

に愛想のいい世馴れた微笑みを浮かべながら、彼女は言ひ直した、「あなたのやうな親しいお友だちが、そんなことをお考へになるわけはありませんわ。それどころか、わたしには、あなたを失ふのは、何よりの不幸なのですの（彼女はいきなりイワンに飛びかかつて、両手を取るや否や、熱情をこめて握りしめた）。わたしが仕合せだと申しましたのはね、かういふわけなんですの。あなたがモスクワへいらつしやいましたら、今のわたしの境遇を、今の怖ろしい身の上を、あなたの口から伯母さんやアガーシャ（アガツ）に、すつかり傳へていただけるとはね、どうか、アガーシャにはすつかり打ち明けてありのままを話して下さいまし。伯母の方は程よくして。尤も、こんなことはあなたのお胸にあることとごさいますわね。昨日も今朝も、この怖ろしい手紙をどんな風にか分らないで、どれほど辛い思ひをしたか、とてもお察しはつきましますまい、……だつて、こんなことはどんなにしたつて、手紙で言ひつくせるものぢやありませんものねえ、……でも、今になれば、樂に書けますわ。あなたが向かうへいらつしやれば、すつかり説明して下さいますものね。ほんとに、こんな嬉しいことはありません！ですけれど、嬉しいのはただこれだけです、しつこいやうですが、どうぞ信じて下さいまし。あなたといふお方はわたしにとつて、かけがへのないお方なんです、……さあ、今すぐにも、ちよつと家へ歸つて、手紙を書きませう。」と彼女はだしぬけに言葉を結んだかと思ふと、今にも部屋を出て行くかのやうに、一足ふみ出した。

「でも、アリオーシャさんは？　あなたが是非とも聞きたいといつてらしたアレクセイさんの御意見は？」とホフラーコワ夫人は叫んだ。何となく皮肉な、腹立たしげな調子とその聲の中に感ぜられた。

「わたし、それを忘れてゐませんわ。」と急にカテリーナは立ちどまつて、「あなたは何だつて、今の場合に、わたしをさう邪怪になさいますの？」熱した、辛さうな調子で、彼女は答めるやうに言ひ出した、「わたし、自分でいつたことは間違ひなくいたしますわ！　この方の御意見はどうしても必要なのですの。それどころか、わたしこの方の断定が必要なんですの！　この方の仰つしやることは、その通りに實行いたします、——ね、アレクセイさん、これほどまでにわたしは、あなたのお言葉を聞きたくてたまらないのです、……でも、あなたはどうかなすつて？」

「僕は今までこんなことを考へたこともありませんでした。こんなことは想像もできません！」不意に悲しさにアリオーシャは叫んだ。

「え、何ですつて？」

「兄さんがモスクワへ行くといふと、あなたはそれを嬉しいと仰つしやるぢやありませんか、——あなたはわざとあんなことを仰つしやつたのです！　それからまたすぐに、いま嬉しいといつたのは、まさきり別なことで、反對に、友だちを失ふのが残念だなどと辯解しはじめるぢやありませんか、——あれはわざと芝居をなすつたのですね、……まるで舞臺に立つて、喜劇をなすつたも同然です！」

「舞臺ですつて？　なぜのですの？　一體、それはどういふことのですの？」カテリーナは顔を眞赤にして、苦い顔をしながら、心の底から驚ろいて叫んだ。

「あなたがどんなに、兄さんといふお友だちを失ふのが残念だと仰つしやつても、やはり兄さんの出立が嬉しいと、當人に面と向かつて言つてらつしやるやうなものですよ……」もう全く息を切らしなが



ら、アリョーシャがいつた。彼は卓子の傍へ突つ立つたまま、腰をかけようともしなかつた。

「一體あなたは何をいつてらつしやるんですの。わたし、分かりませんわ……」

「さう、僕自身でもよく分らないんです……僕はふつと、そんな気がしたんです、勿論、こんなことを言ふのは、よくないつてことは僕も知つてゐますが、やはり、それでも、すつかり言つてしまひませう。」アリョーシャは相變らず、とぎれがちな慄へ聲で言葉をつづけた。

「ふつと、そんな気がしたといふのは、あなたはドミトリイ兄さんを……最初から、……ちよつとも愛していraftしやらなかつたのかも知れないし、……兄さんだつて、やはり、あなたを、少しも愛してゐなかつたのではないかしら……抑々の初めから、……ただ尊敬してゐるだけだと、さう思つたんですよ。全く僕はどうして今こんな大膽なことがいへるのか、我ながら不思議なくらゐですが、しかし、誰か一人くらの本當のことをいふ人がゐなくちやなりませんね、……だつて、ここでは誰ひとり本當のことをいふ人がゐないんですからね。」

「本當のことつて何ですの？」カテリーナは叫んだが、何となくヒステリックなものが、その聲にひびいてゐた。

「ぢや申し上げませう、」思ひきつて屋根の上からでも飛び下りるかのやうに、あわただしくアリョーシャは呟やいた、「今すぐドミトリイをお呼びなさい——僕がさがして上げませう、——そして、兄さんがここへ來たら、先づ、あなたの手を取らうとして、その後でまた、イワン兄さんの手を取らせ、さうして二人の手を結びつけてもらふのです。何しろ、あなたはイワン兄さんを愛していraftしやるため

に、かへつて愛する兄さんを苦しめてらつしやるからです、……ところが、なぜ苦しめなされるのかと申しますと、それはドミトリイにたいするあなたの愛が、發作的なものだからです……偽りの愛だからです、……なぜさうなつたかといひますと、あなたが御自分で御自分を説き伏せていらして……」

アリョーシャは急に言葉を切つて、黙り込んでしまつた。

「あなたは……あなたは……あなたは、ちつばけな信心きちがひです、それきりの人です！」カテリーナは、すつかり顔の色をなくして、憤りのために唇を歪めながら、いきなり、噛みつくやうに言つた。イワンはだしぬけに、聲を立てて笑ひ出したかと思ふと、席を立つた。彼は帽子を手にしてゐた。

「お前は勘違いしてるよ、アリョーシャ。」といつて、彼は未だ會てアリョーシャの見たことのないやうな妙な表情を浮かべた。それは若々しい眞面目さと、抑へることのできないほど力強い、露骨な感情の表はれであつた。「カテリーナさんは決して僕を愛したことなんかありやしないよ。一度も、口に出していつたことはないけれど、僕がカテリーナさんを愛してゐるつてことは、御自分でちやんと承知してゐたんだ。ところが、僕を愛してはゐなかつたんだよ。また僕は一日だつて、この人の友だちだつたこともないんだ。氣位の高い婦人は、僕なんかの友情を必要としないからね。この人が僕を傍へ曳き寄せたのは、しつきりなしに復讐をしたためだつたのさ。初めて會つたとき以來すつと、ドミトリイから絶えず受けてゐた侮辱の恨みを、僕に向けてもたらしてゐたんだ。實際、ドミトリイと最初に會つたことさへ、この人の心には侮辱として刻みつけられてゐるんだ。この人はかういふ心を持つた人なんだよ！僕はいつもいつも、この兄貴にたいするおのろけばかり聞かされた譯なんだ。もう僕はここを去



つてしまひます。しかしね、カテリーナさん、あなたは本當に、兄貴ひとりをおいでに愛しておいでになつたんですから、そのことは御承知をねがひますよ。兄貴の侮辱が烈しくなるにつれて、あなたの愛も次第に募つて行くといふものです。これがあなたの氣ちがひじみた要求なんです。あなたは今のままの兄貴を愛しておいでになりますね、あなたを侮辱する兄貴を愛しておいでになります。若しも、兄貴の身持が改まつたら、あなたはすぐに愛想をつかして、棄ててしまふに相違ありません。兄貴があなたにとつて必要なのは、いつも御自分の御立派な貞操を頭において、兄貴の不實を責めたいからにすぎません。これといふのも、皆あなたの己惚れから起るのです。ええ、無論、その中にはするぶん屈從しなければならぬところもあり、自分を卑下しなければならぬ場合もあります。しかし、とにかく、一切のことはプライドから來てゐるのです、……僕はあまり若すぎたので、あまりひどく、あなたを愛しすぎたのです。こんなことはまるつきりいふ必要がない上に、黙つてあなたの傍を離れてしまつた方が、僕としてもより多く威厳が備はるわけだし、あなたにも厭やな思ひをさせないで済むといふことは、自分がよく承知してゐます。しかし、僕は遠いところへ行つてしまつて、またと再び歸つて來ないんですからね、……これが永久のお別れなんです、……僕は破裂を傍で見つてゐるのが厭やなんです。しかし、もうこれ以上いふことができません、何もかもいつてしまひました、……さやうなら、カテリーナさん、あなたが僕に腹を立てるわけには行きませんよ。なぜつて、僕はあなたより百倍以上も、ひどい罰を受けてるんですからね。もう永久にあなたに會へないといふ、この一つだけでも随分ひどい罰ですからね。さやうなら、僕はあなたの握手を必要としません。あなたはあまり意識的に僕をお苦しめなすつたから、

今あなたを許すことができないのです。後でまた赦しませうけれど、今は握手には及びません。

Den Dank, Dame, begehrt ich nicht.

御身の感謝を余は求めず、夫人よ!

彼は無理に作り笑ひを浮かべながら言ひ足した。これによつて自分もシルレルを暗記するほど讀んでゐるといふ意外な事實を證明したのであつた。以前ならば、アリオーシャも、決してそんなことを信じ得なかつたに違ひない。イワンは女主人にさへ挨拶をせず、そのまま部屋を出て行つた。アリオーシヤは手を拍つた。

「イワン、」と彼は度を失つたやうに後ろから叫んだ、「歸つてらつしやいよ、イワン! 駄目だ、駄目だ、もうとても歸つて來ない!」再び心の中に悲しい思ひを浮かべて、叫ぶのであつた、「けれど、これは僕の間違ひです、僕が悪いんです、僕が始めたのです。イワンは意地の悪い、とんでもない言ひ方をしました。あんな間違つた、意地のわるい物の言ひ方をするなんて……兄さんはどうしても、もう一度ここへ來なくちやならない、歸つて來なくちやならない……」……アリオーシヤは半ば氣がちがつたもののやうに叫びつづけた。

カテリーナは不意に次の部屋へ出て行つてしまつた。

「あなたは何も悪いことはないんですよ。あなたは天使のやうに、見事な振舞ひをなすつただけです。」ホフラーコワ夫人は悲しさうな顔色をしてゐるアリオーシヤにむかつて、さも嬉しさうに早口にささやいた、「わたし、イワンさんを行かせないやうに、できるだけの方法を講じますからね……」

夫人の顔に喜びの色が輝やいてゐるのを見て、アリオーシヤは一そう悲しくなつて來た。ところへ、



カテリーナがいきなり引き返して来た。その手には虹色をした、百留札が二枚あつた。

「アレクセイさん、わたしあなたに一つ大へんなお願ひがあるんですけど。」と彼女はいきなりアリョーシャに向かつて話しかけた。その聲は静かに落ちついてゐて、實際に何事もなかつたかのやうな風であつた。「一週間——ええ、一週間まへのことでしたの、——ドミトリーさんがあの熱し易い性質にまかせて、非常に間違つた、しかも不體裁きはまることを仕出かしたんです。それはあまりよくないところ、つまり、居酒屋であつたことなんですが、いつかお父さんが何かの事件で、代理人にお頼みなすつた例の豫備二等大尉に、ドミトリーさんが出會ひなすつたのです。ところが、あの人はどういふ譯か、この二等大尉に腹を立てて、大勢のゐる前で相手の髭を引つ掴んだのださうです。そして、この見苦しい姿で、二等大尉を往來へ引きずり出して、長いこと往來を引きまはしたんです。すると、この二等大尉には小さな男の子がありましてね、この小學校へ通つてゐるのださうですが、この子はその様子を見ると、うろうろ父親の傍を駆け廻りながら、大きな聲で泣いたんださうです。そしてお父さんの代りに謝つてみたり、あたりの人に加勢を頼んだりしても、みんな笑つて見てゐて取り合はないんです。失禮ですけど、アレクセイさん、わたしはあの人のこの穢らはしい行ひを思ひ出すたびに、義憤を感じないではゐられません、……こんなことはほんの腹立ちまぎれの……夢中になつたときのドミトリーさんでなければ、とても思ひ切つてできないやうな仕打ちです！ わたし、もうこの話をするのができません。氣力がありません、……どういつていいか分からないんです。で、わたしはこの相手のことを調べてみましたところ、非常に貧しい人だといふことが分かりました。苗字

はスネギーレフといふのださうです。何かで勤めの方で失敗があつて、免職になつたのですが、そんなことがあつたのか確かなことはお話しできませんわ。この人はいま病身な子供たちと氣ちがひのお内儀さんといふ（たしかそんな話でした）不仕合せな家族をかかへて、何でも怖ろしい貧乏に陥つてゐるらしいんです。もうずつと前から、この町で何かしてゐて、どこかの書記を勤めてゐたこともありませんけれど、どうした譯か、このごろちつとも収入の道がないんです。わたしはちらとあなたを見て……考へたんですけれど、……わたし、何といつたらいいか分かりません、わたし何だか頭がごたごたしてしまつて、——ねえ、アレクセイさん、あなたは類のない親切な方ですから、わたし一つお願ひしたいことがありますの。どうかあの人のところへ行つて、何とか口實を見つけて中へはいり込んで下さいな。つまり、その、二等大尉の家へ入るんですの——まあ、わたしどうしてこんなにまごついてばかりゐるんでせう。さうして氣をつけながらうまく——ええ、これはあなたでなければできないことではないです——（アリョーシャは急に顔を赧くした）——うまくこの扶助金を渡して下さいませんか、ここに二百留ありますから。その人はたしかに納めてくれると思ひます、……納めてくれるやうに説きつけていただきたいんですの、……もし駄目でしたら、どんな風にしたものでせうね？ ね、よござんすか、それは告訴してくれないやうにと、示談のための賠償金ではありません（だつて、その人は本當に告訴するつもりだつた風ですもの）。ほんの同情のしるしなんですの、補助のつもりにすぎないんですもの。そして名義はわたしですよ、わたしですよ、ドミトリーの許嫁の妻ですよ、決してあの人自身ぢやありません。とにかく、あなたのお腕前におまかせしますから……わたしが自分で行つたらいいん



ですけれど、あなたの方がずっと上手にまとめて下さるに違ひないんですもの。あの人はね、湖水通りの、カルムイコワといふ町人の持家に住んでらつしやるのです、……後生ですから、アレクセイさん、どうかわたしのためにこの役目を果たして下さいまし。ところで、今、……今わたしは少々疲れましたわ。ちや、これでお暇いたします……」

彼女は不意に身を交はして、又もや帳のかけへ隠れてしまつたので、アリョーシヤは、口がききたくてたまらなかつたが、一言も口をきく餘裕がなかつた。彼は自分で自分の罪を責めて謝罪をするか、……まあ、何にもせよ、一口でも物を言はずにはゐられなかつた。彼は胸が一ぱいになつてゐたので、このまま部屋を出る氣にはどうしてもなれなかつたのである。しかし、ホフラーコフ夫人はその手を抑へて、自分で部屋の外へ連れ出した。玄關へ来たとき、夫人は又もやさつきと同じやうに立ちどまらせた。

「ずいぶん高慢な人ですわね、自分で自分と闘つてゐるんです。でも、惚々するやうな、親切な、肚の大きい方ですわ。」夫人は半ば囁やくやうな聲で、感きはまつたかのやうに言つた。「おおわたしはあの人が大好きです、時には、たまらないくらゐに、……わたしはいま何から何まで嬉しいんですの！アレクセイさん、あなたは御存じないでせうが、實はわたしたちはみんな、——わたしと、あの人の伯母さん二人と、——それに、リーズまでが仲間にはいつて、この一月の間、ある一つのことばかり、願つたり祈つたりしてゐるんです。といふのは、あの人が、あなたの大好きなドミトリイさんを思ひきつて、あの教育の……立派な青年のイワンさんと結婚しますやうにつてね、……だつて、ドミトリイ兄

さんの方は、あの人なんか見るのも厭やだといはなはかりだのに、イワンさんは世界ぢゆうの何よりも、あの人を愛してらつしやるんですものね、わたしたちはこれについていろいろ段取りをきめてゐましたの。わたしがここを立たないのも、多分、これがためかも知れませんが……」

「でも、あの人はまた侮辱を受けて、泣いてゐたぢやありませんか！」とアリョーシヤが叫んだ。

「女の涙なんか當てになるもんぢやありませんよ。かういふ場合には、わたし女に反対します、わたしは男の味方ですわ。」

「母さん、母さんはそのお方を悪くして、墮落さしてしまつてよ。」戸のかけからリーズの細い聲が聞こえた。

「いいえ、これといふのもみんな僕がもたんです、僕は實に悪いことをしました！」自分の行爲にたいするはげしい羞恥の念がこみ上げて来て、アリョーシヤは両手で顔までかくしながら、何といはれても氣が安まらないで、繰り返すのであつた。

「それどころぢやありません、あなたはまるで天使のやうな振舞をなすつたのです、全く天使ですよ。何ならわたし十萬遍でもこの言葉を繰り返して上げますわ。」

「母さん、どうして天使のやうな振舞なの？」リーズの聲がまた聞こえた。

「僕はあるときの様子を見てゐるうちに、どうしたわけか、まるでリーズの聲など耳に入らないやうに、アリョーシヤは言葉をつづけた、「あの人はイワンを愛してゐるといふやうな氣がしたんです、それであんな馬鹿なことをいつちまつたんです、……一體、これからどうなるでせう！」



「誰のこと、それは誰のことなの？」とリーズが叫んだ、「母さんはきつとあたしを死なす氣なんだわ。あたしがいくら訊ねたつて、返事一つして下さらないんですもの。」

丁度このとき、小間使が駆け込んで来た。

「カテリーナ様が御氣分が悪いさうで……泣いていらつしやいます。ヒステリイでございませう、しきりに身をもがいて……。」

「まあ、どうしたんでせう？」とリーズは心配さうな聲で叫んだ、「お母さん、ヒステリイが起こつたのはわたしなのよ、あの人ぢやなくつて！」

「リーズ、後生だから、そんな大きな聲をしてわたしの壽命を縮めないでくれ。お前はまだ年が若いんだから、大人のことをすつかり知るわけに行かないんですよ。今すぐ歸つて来て、お前に話していいことだけは聞かして上げるから、ああ、本當に大へんだ！いま行きます……いま行きます……とこゝろでね、アレクセイさん、ヒステリイといふのは、おめでたいことなんです。あの人がヒステリイを起こしたのは本當に好都合なんです。これは是非さうなければならぬんですよ。わたしはかういふ場合、いつも女に反對します。あんなヒステリイや女の涙なんかには反對します。ユーリヤ、駆け出してさういつておいで。ただ今すぐ飛んで参りますつて。だけど、イワンさんがあんな風にして出て行つたのは、あの人の罪なんです。でも、イワンさんは出て行きはしませんよ。リーズ、後生だから大きな聲を立てないで頂戴！おやまあ、大きな聲をしてるのはお前ぢやなくてわたしだつたのね、まあ、お母さんのことだから勘忍しておくれ。だけど、わたしは嬉しくつて、嬉しくつて、嬉しくつて仕様が

ないわ！時に、アレクセイさん、あなた氣がおつきになつて？さつきイワンさんが出ていらつした時の、男らしい様子つたらどうでせう！あの仰つしやつたことといひ、態度といひ！わたし、あの人はとても物識りの學者だとばかり思つてたのに、だしぬけにそれはそれは、熱烈な若々しい露骨な調子で、あんなことを仰つしやるぢやありませんか。全く世馴れない、うひうひしい調子でした、まるであなたそつくりの立派な態度でした！それにあの獨逸語の詩を仰つしやつたところなんか、まるで、まるであなたそつくりでしたわ。だけど、もう行きませう、行きませう。アレクセイさん、あなた大急ぎであの頼まれたところへいらつしやい、そしてすぐ歸つてらつしやい。リーズ、何か用はなくつて？後生だから、一分間でもアレクセイさんを引きとめないでくれ、すぐにお前のところへ歸つていらつしやるんだから。」

ホフラーコワ夫人はやつとのこと、駆け出した。アリョーシヤは出て行く前に、リーズの部屋の戸を開けようとした。

「どんなことがあつても駄目よ！」とリーズは叫んだ。「今はもうどんなことがあつても駄目よ！そのまま、戸の向かうからお話しなさい。あなたはどうして天使のお仲間いりをしたの！わたしそれ一つだけは、聞かしていただきたいの。」

「ひどく馬鹿げたことを仕出かしたからですよ！リーズさん、さやうなら！」

「あなたはよくまあ、そんな歸り方ができますわね。」とリーズは叫んだ。

「リーズさん、僕にはほんとに悲しいことがあるんです！すぐ歸つて來ますが、僕には、とても悲



「しい悲しいことがあるんです！」  
といつて、彼は部屋を駆け出して行つた。

## Ⅶ

### 小屋に於ける破裂

事實、彼には未だ曾て、めつたに経験したこともないやうな、並々ならぬ悲しみがあつた。彼は出しゃばつて、『愚かなことを仕出かした』のだ、——しかも、どんな世話を焼いたのか？ 愛に關したことではないのか？ 『一體あんなことについて、自分に何が分かるのか、この事件について、何が僕に解釋がつくのか？』彼は顔を赧らめながら、心の中で百度も繰りかへすのであつた、『ああ、恥づかしいくらゐは何でもないんだ、それは僕にとつて當然の罰だ。——厄介なのは、僕が必らず新しい不幸を生む元になるといふことだ、——長老様が僕をお寄こしなすつたのは、みんなを仲直りさせて一しよにするためだつた。ところで、こんな一致の仕方でもいいものか？』ここで、彼は急にまた『二人の手を結び合はす』といつたことを思ひ出して、又もや恥づかしくなつて來た。『僕は全く誠意をもつてしたんだけど、これから先はもつと惻巧になることだ。』と彼は不意に決心したが、その決心に

對しては微笑だもしなかつた。

カテリーナの頼みは湖水通りとのことであつたが、ちやうど兄のドミトリーはその道筋の、湖水通りから遠くない横町に暮らしてゐた。アリオーシャは兎にも角にも、二等大尉のところへ行く前に必らず兄の家へ寄つて見ようと決心したが、しかも、きつと兄は留守だらうといふ豫感もしてゐたのだ。兄は今、ことさらに自分を避けて、身を隠すかも知れないといふ懸念さへも起こつたが、どんなことがあらうとも、是が非でも、さがし出さなければならなくなつたのである。時は過ぎて行つた。それに修道院を出たときから、瀕死の長老を思ふの念は一分間も、一秒間も、彼の念頭を去らなかつたのである。

カテリーナの頼みについて、唯一つかなり彼の興味をそそることがあつた。二等大尉の息子の小さな小學生が、聲をあげて泣きながら、父の傍を駆けまはつたといふ話をカテリーナから聞かされた時、ふつと、アリオーシャの胸に、ある考へがちらついたので、それは、さつき、『一體、僕がどんな悪いことをしたつていふの？』と問ひ詰めたとき、自分の指へ噛みついた小學生が、その二等大尉の子供ではあるまいか？ といふ疑ひであつた。ところが、今アリオーシャは、何故といふこともなしに、殆んどそれに違ひないと思ひこんでゐた。かくのごとくして、本筋に關係のない想像をしてゐるうちに、氣が觸れて來たので、彼はたつたいま自分の仕出かした『不始末』ばかり氣にして、後悔の念に自分で自分を苦しめるやうなことはよして、ただなすべきことだけをすればよいのだ、どんなにしても、どうせ成るやうにしかならないのだ、と肚を決めた。覺悟が決まると、彼はすつかり元氣づいた。さて、兄ドミトリーの家をさして、横町へ曲がつたとき、彼は空腹を感じたので、先ほど、父の所からとつて來た



佛蘭西麵麩を、かくしから取り出して歩きながら食べた。これでやつと元氣が出て來た。

ドミトリイは留守であつた。家の人たち——指物師の老夫婦とその息子は、訝かしげにじろじろとアリョーシヤを見まはした。『もう今日で三日も家へはお歸りになりません。ひよつとしたら、どこかへ行つておしまひになつたのか知れませんか。』老人はアリョーシヤの根強い質問に對して答へるのであつた。アリョーシヤは老人が前から言ひ合められて、こんな返事をするのだと見てとつた。『ちや、グルーシエンカのところにあるんぢやないでせうか、またフォーマのところにかくれてるんぢやありませんか?』と訊かれたとき(アリョーシヤはわざと、さつくばらんな風をして見せた)、家の人たちは心配さうな様子をして、彼の顔を見つめた。『して見ると、兄さんを好いて、味方になつてゐるんだ。』とアリョーシヤは考へた、『それはまあ、結構なことだ。』

つひに彼は湖水通りにあるカルムイコワの家を見つけた。一方に傾いた古い小さな家で、窓は往來へ向いてたつた三つしかなかつた。泥だらけの中庭があつて、その真ん中に、牝牛が一匹、ぼつたり寂しさうに立つてゐた。中庭からの入り口は玄關に通じてゐた、玄關の左側には女主人と娘が暮らしてゐたが、娘といつても、もうお婆さんで、しかも二人とも聾らしかつた。彼が二等大尉のことを幾度も幾度も繰り返して訊ねたとき、一人の方がやつと下宿人のことを訊ねてゐるのだなと悟つて、まるで物置小屋のやうなもの戸口を、玄關ごしに指さして見せた。全く二等大尉の住ひは何のことはない、純然たる物置小屋であつた。アリョーシヤは鐵のハンドルに手をかけて、戸を開けようとしたが、ふつと、戸の向かふが妙にひつそりしてゐるのに氣がついた。彼はカテリーナの言葉によつて、二等大尉に家族が

あるといふことを知つてゐたので、『みんな描つて寝てゐるのかしら、それとも僕の來たことを聞きつけて、戸のあくのを待つてるのかしら。しかし、まあ、ドアを叩いて見た方がいいだらう。』と考へて、彼は戸を叩いた。すると、返事の聲が聞こえたが、それも直ぐではなしに、十秒くらゐたつたらうかと思はれる頃であつた。

「一體、だれ?」と腹立たしさうな大聲で誰かがどなつた。

で、アリョーシヤはドアを開けて闖を跨いだ。彼の入つた小屋はかなりに廣かつたが、ごたごたした道具や家族の人たちで、足の踏み場もないくらゐであつた。左手には大きな露西亞風の煖爐があつた。煖爐から左側の窓にかけて、部屋いづばいに繩が渡されて、色とりどりのぼろが下がつてゐた。兩側の壁のそばには、右にも左にも、寢臺が、一つづつ据ゑてあつて、編物の夜着がかかつてゐた。左側の寢臺には、大きいから順々に更紗の枕が四つ並べられて、小山のやうに積み重なつてゐる。右側のもう一つの寢臺には非常に小さな枕が、たつた一つ見えるだけであつた。それから手前の方の片隅には、はすかひに繩を引いた上にカーテンとも敷布ともつかないものをつるして、少しばかり仕切りをしたところがあつた。この仕切りの向かふにもベットがあつたが、これはベンチと椅子をつなぎ合はして仕立てたものであつた。真ん中の窓のそばにある、飾り氣のない、無細工な、木造りの四角のテーブルは、その片隅から移されたものらしかつた。かびの生えたやうな青い小さなガラスを四枚張つた小さな窓は、三つとも、いづれもどんよりと曇つたうへに、びつたり閉め切つてあるので、部屋の中はかなり息苦しく、それほど明るくはなかつた。テーブルの上には食べのこされた卵子の目玉焼の入つてゐる焼鍋や、



食ひさしの麵麴や、底の方にほんのちよびり残つてゐる地上の幸福(トキ)の小壘などが載つてゐた。

左側の寢臺に近い椅子には、更紗の着物を着た品のいい女が坐つてゐた。顔はひどく瘦せてゐて黄色く、著しく落ちこんだ頬は、一目見ただけでもその女が病氣だといふことを表はしてゐた。しかし、何よりもアリョーシャの心を打つたのは、この哀れな婦人の眼ざしであつた。ひどく物問ひたげな、しかも、それと同時に、怖ろしく高慢な眼ざしであつた。婦人はまだ口を出さずに、主人公がアリョーシャと話し合つてゐる間ぢゆう、大きな鶯色の眼を高慢らしく、物問ひたげに動かしながら、話し合つてゐる二人を見くらべるのであつた。左の窓側の婦人のわきには赤い捲毛の、かなりに器量のわるい、若い娘が立つてゐた。身なりは粗末ながら、小ざつぱりしてゐた。彼女はアリョーシャの入つて来るのを、氣むづかしげに眺めた。右側には同じく寢臺の傍に、もう一人の女性が腰をかけてゐた。やはり二十歳ばかりの若い娘ではあつたが、見るも哀れな尙儻で、あとでアリョーシャの訊いたところによると、兩足が萎えてしまつた躰だとのことであつた。この娘の松葉枝は一方の隅の寢臺と壁の間に立てかけてあつた。一きは美しく、氣立てのよささうな眼は何となく落ちついた、つつましい表情を浮かべながら、じつとアリョーシャを見つめてゐた。テールブルの向かふには四十五ばかりの男が坐つてゐて、玉子焼を平らげてゐるところであつた。あまり背が高くなく、痩せこけて、弱々しげな體格をして、髪の毛も赤く、まばらな鬚髯も服みがかつてゐたが、この髯はささくれ立つた垢すりの絲瓜にそっくりであつた。(この比喩——殊に『絲瓜』といふ言葉が、何といふこともなしに、一目見るなり、アリョーシャの心にちらつて、彼はこれを後になつて思ひ出した。) 部屋の中に誰もほかに男のゐないところから察す

るに、この男が戸の中から『一體、だれ?』と叫んだものらしかつた。しかし、アリョーシャが入つたとき、彼は今まで腰かけてゐたベンチから、いきなり跳びあがつて、穴だらけのナブキンであわてて口のあたりを拭きながら、アリョーシャの方へ飛んで來た。

「お坊さんがお寺からお布施をもらひに來たんだわ、選りに選つてこんなところへ！」左の隅に立つてゐた娘が、大きな聲で言つた。すると、アリョーシャのそばへ飛んで來た男は、いきなり、ぐるりと踵で、娘の方へ身をかはして、昂奮して、妙にちぎれちぎれた調子で答へた。

「さうぢやないよ、ワルワラさん、それはあなたの勘違ひですよ！」ところで、私の方からも、お伺ひしますが、」彼は再びアリョーシャの方をひよいと振り向いた、「どういふ譯であなたはお越しなすつたんでございますか、……この内まで?」

アリョーシャはしげしげと相手を眺めた。初めて彼はこの男を見たのであつた。この男は、何となく角ばつてゐて、せかせかして、いらだたしさうであつた。たつた今、飲んだといふことははつきりしてゐるが、決して酔つ拂つてはゐなかつた。その顔は何かしら、非常に高慢な様子と、それと同時に、奇妙なことであるが、いかに臆病らしい色を浮かべてゐた。長いこと忍んで仕へてゐた人が、急に奮然と立つて氣骨を示さうとしてゐる人のやうなところがあつた。もつと適切にいふと、相手なぐりつけたくてたまらないのに、相手の者から撲りつけられはしまいかと、極度に怖れてゐる人のやうであつた。彼の言葉にも、かなり鋭い聲の調子にも、何かしらキ印らしいユーモアがあつて、意地わるさうになつたり、時には待ちきれないで、びくびくしてゐるやうに、しどろもどろになつたりした。



『この内』のことで質問を放つたとき、彼は全身を慄はせながら、眼を廻してアリョーシャの方へびつたり食ひつくやうに跳びついたので、こちらは思はず機械的に、一步あとへ引きさがつたくらゐであつた。

彼は非常に粗末な、南京木綿か何かの地味な服を着てゐたが、それはつぎはぎだらけで、しみが一ぱいついてゐた。ズボンはずつかり流行おくれの、思ひきり明るい色をした格子縞で、極めて薄つぺらな地であつた。下の方がすつかり皺くちやになつてゐるので、裾がつりあがつて、まるで子供のやうに足がつき出てゐた。

「僕は……アレクセイ・カラマゾフです……」とアリョーシャは答へた。

「それはよく承知して居りまする、」そんなことを訊かなくとも、客の何ものかはよく知つてゐたと悟らせるかのやうに、男はすぐに遮つた、「ところで、私はスネギーレフ二等大尉でございますが、それにしても、どういふ仔細があつてお越しになつたかお伺ひいたしたいものです……」

「なほに、僕はちよつとお寄りして見ただけなんです、實のところ、たつた一ことあなたに申し上げたいことがあるんですが……。お差支へございませんでしたら……」

「さういふわけなら、ここに椅子がございますから、さあ、どうぞ、その場に。これは昔の喜劇の中によくいふやつでございますよ、『どうぞその場に』なんかと……」いひながら、二等大尉はすばやく空の椅子をつかんで（それは全く木ばかりで造つた、よくよく無細工な椅子で、何も張つてなかつた）、それを殆んど部屋の真ん中の邊に据ゑて、やがて、自分がかかるために、もう一つ同じやうな椅子をと

つて、アリョーシャの眞向かひに坐つたが、前と同じやうに膝と膝とが擦れ合ふほど接近してゐた。

「ニコライ・スネギーレフと申し、昔は露國歩兵二等大尉でござりましたが、身持のよくないために、恥をかきましてね、それでもやはり二等大尉なんでして。しかし、スネギーレフといふより、むしろ二等大尉スロヲエルソフといつた方が分かるくらゐでございますよ。なぜと申すに、わたくしは後半生に至つてスロヲエルスばかりで話をするやうになつたもんですからね。このスロヲエルスは大い落ちぶれてから口癖になるものでして、……」

「いかにも御尤もです。」とアリョーシャは微笑みを浮かべた。「しかし、何氣なくお使ひになるお言葉ですか、それとも、ことさらに……」

「誓つて申しますが、何氣なくなんです。いつも言つたことなんかなかつたのでして、永いことスロヲエルスで話したことなんかなかつたのですが、急に落ちぶれて、いつの間にかスロヲエルスを言ひ始めてゐたのです。これは神様のお力であることでございますよ。お見受けしたところ、あなたは現在の問題に興味を持つていらつしやるやうでございますね。それはさうと、どうしてわたしなんぞに好奇心をお起こしなすつたのでせうね？ 御覽の通り、お客様をおもてなしすることもできないやうな境遇に居りますので。」

「僕は……あの例の事件のことで參つたのです……」

\* スロヲエルス……露西亞語において、敬語をあらはす形尾語。身分の低い者が「でございます」などといふときにつける。従つて、これを名前にすると「御座郎大尉」といふやうなことになる。〔譯者註〕



「あの例の事件？」と二等大尉はちれつたさうに遮つた。

「僕の兄貴のドミトリーとあなたがお會ひなすつた件についてです。」とアリョーシヤは不細工に口を出した。

「會つたとは何でございますか？ あの例の一件ぢやございませんか？ つまり何ですか、絲瓜の一件、垢すり絲瓜の一件ぢやございませんかね？」彼は急に乗り出して來たので、今度は本當にアリョーシヤと膝を突き合はせてしまった。彼の唇は何か妙にひき締まつて、絲のやうに細くなつた。

「一體、絲瓜とは何のことですか？」アリョーシヤは呟やいた。

「それはね、父ちゃん、僕のことを父ちゃんに言ひつけに來たんだよ！」片隅のカーテンのかけから、聞きおぼえのある先ほどの子供の聲が叫んだ、「僕さつき、その人の指を嚙んでやつたんだ！」

カーテンがさつと引かれたかと思ふと、聖像の飾つてある片隅に、床几と椅子とをつないでこしらへた寢臺があつて、その上に横たはつてゐる先ほどの敵の姿が、アリョーシヤの眼にはいつた。子供はさつきと同じ古外套に、もつと古ぼけた綿入れの布圍をかけて横になつてゐた。體の工合がよくないらしく、燃えるやうな眸から判断すると、熱が高いらしかつた。今はさつきとは違つて、怖れるさまもなく、『もう家にゐるんだから駄目だぞ。』とでもいひたさうに、アリョーシヤを見つめてゐた。

「え、何だ、指を咬んだと？」二等大尉は椅子から跳びあがらんばかりにして、「それはあなたの指を咬んだのでございますか？」

「ええ、さうです。さつきあなたの坊ちゃんが往來で、大ぜいの子供を相手に石の投げつこをしてた

んですが、何しろ向かふは六人、こつちは一人ですから、僕が見かねて、傍へ寄つて行きますとね、坊ちゃんが僕にまで石を抛るぢやありませんか。二度目のが僕の頭へ當りました。で、僕が何の恨みがあるのかと訊きましたら、いきなり飛びかかつて來て、ひどく僕の指を咬んだんですけれど、僕にはさつぱり譯が分かりません。」

「今すぐ、ぶんなぐつてやりますよ！」二等大尉はもうすつかり椅子から跳びあがつた。

「僕は決して言ひつけに來たのぢやありません。ただありのままを話ただけです、……坊ちゃんをなぐつていただきたくはありません！ それに今加減が悪いやうですし、……」

「ぢやあなたは本當に、わたしがあれをなぐるとでも思ひでしたか？ 一體、わたくしがイリユーシヤをとつ掴まへて、今すぐあなたの前で、御満足のゆくほど、なぐりつけると思つてらしつたんでございませうか？ 直ぐさうして欲しいと仰つしやるんですか？」二等大尉は、まるで今にも飛びかかりさうな様子をして、急にアリョーシヤの方へ振り向きながら、いふのであつた、「いや、あなた様の指のことは全くお氣の毒です。はい。しかし、イリユーシヤを撲る代りに、今すぐお眼の前で、そこにあるナイフでもつて、充分あなたの氣の済みますやうに、わたくしの指を四本、すばりと斬り落しては如何でございませうね。指を四本なら、あなたの復讐の御希望が充分に達せられるだらうと存じます、よもや五本目の指までは要求なさらないでせうね？……」

彼は急に言葉を切つて、苦しさうな息づかひをしてゐた。その顔の線は悉く、引つつりながら躍つて、



眼には怖ろしい、挑戦的な色が浮かんでゐた。彼は夢中にでもなつてゐるらしかつた。

「僕はやつと何もかも分かつたやうな気がします。」アリョーシャはじつと坐つたまま、聲低く、悲しさうに答へた、「つまり、坊ちゃんは一氣だてのいいお方で、お父さん思ひなんですね、だから、父親を侮辱した者の兄弟として、僕に飛びかかつた譯なんですね……僕はやつと、何もかも分かりました。」と彼は考へこみながら繰り返した、「しかし、僕の兄のドミトリーは自分のしたことを後悔してゐます。それは僕がよく承知してゐます。だから、兄がお宅へ來ることが、いや、それよりも、あの時と同じところであなたにまた、お目にかかることができれば、みんなの眼の前で兄はお詫びする筈です……若しお望みとあらば。」

「すると、何ですか、人の髻を引つこぬいた擧句、お詫びをして、それでもう何もかもおしまひにして、罪亡ぼしをした……とでもいふんでございますね、ね、さうでせう？」

「いいえ、どういたしまして、兄は何でもお氣に入るやうにしませうし、お望み通りのことをいたします！」

「そんなら、若し、わたくしがあの方に、前と同じ居酒屋——屋號は『都』と申しますが、そこでか、又は町の廣小路で、わたしの前へ膝をついて下さいとお願いしたら、その通りにして下さるでせうかね？」

「しますとも、無論、兄は膝をつきますとも。」

「ああ、胸に泌みました！ あなたはわたくしの涙をお絞りになりました、ああ、胸にしみるです！」

すつかりもう、お兄さんの寛大な心をお察しする氣になりました。どうぞ充分に紹介の勞をとらして下さいまし、あれに居りますのが、わたしの家族で、娘が二人に息子が一人——みんな一つ腹のなんぞございますよ。若しわたくしが死んだ日には、誰があれらを可愛がつてくれませう？ また、わたくしの生きてゐるあひだ、あれらを除けて、誰が、こんな厭やらしい親爺に目をかけてくれませう！ これこそ、わたくしのやうな人間に、神様が定めて下さつた大きな事業でございますよ。實際、わたくしのやうな人間は、誰かに愛して貰はなくちやなりませんからね……。」

「ええ、それは仰つしやる通りです！」アリョーシャは叫んだ。

「まあ、澤山だわ、馬鹿な眞似はいい加減にしないよ。どこかの馬鹿者がやつて來れば、すぐもう、あんたは恥つさらしたことがかりなざるんですもの！」不意に、窓の傍に立つてゐた娘が父に向かつて、氣むづかしさうな人を馬鹿にしたやうな顔をして、思ひがけなくかう叫んだ。

「まあ、一寸お待ち、ワルワラさん、いひかけたことをついでにしまひまで言はしておくれ。」と父親は叫んだ。號令でもかけるやうな口吻であつたが、しかもその眼つきは、大いにわが意を得たりといふやうな風であつて、「この子はどうもああいふ性分でございますね。」と彼はまたアリョーシャの方を向いた。

「ありとある自然のうちに

何ものをも頌ふるを欲せざりき。

いや、これは女性にして、彼女にしくちやなりませんね。ところで、今度は失禮ですが、家内を紹



介いたしませう。これがアリーナ・ペトローヴナと申し、年は四十で、足のない婦人でございます。いやなに、歩くことは歩きますが、ほんの少しばかりなんでして。素性の賤しい者でございますよ。おい、アリーナさん、そんなに變な顔をするのはよせよ。このお方はアレクセイ・フォードロキツチ・カラマゾフさんだよ。お立ちなさい。カラマゾフさんだよ。」と彼は客の手を取つて、この男には思ひがけないくらの力で、いきなりアリーションを引き起こした、「あなたは婦人に引き合はされていらつしやるのですから、お立ちにならないければなりません。この人はね、母ちゃんや、あのカラマゾフとは違ふんだよ。わしをその……ふむ！ その弟さんで、品行の正しい、おとなしい立派なお方なんだ。失禮でございますが、アリーナさん、失禮でございますが、ねえ、母ちゃんや、先づもつて、あなたの御手を接吻させて下さいませな。」

といつて、彼は妻の手に、恭々しく、優しく接吻までするのであつた。窓ぎはの娘はこの光景を見ると癪にさはつて、背を向けた。高慢らしく、物問ひたげにしてゐた妻の顔は、急に並々ならぬ愛想のよさを示した。

「よくいらつしやいました、チェルノマゾフ(黒ん)さん、さあおかけなさいまし、」と彼女はいつた。

「カラマゾフさんだよ、お母ちゃん。カラマゾフさんだよ……何しろ、わたくしたちは素性の卑しい者でございますからね。」と彼は再び囁やいた。

「まあカラマゾフでも何でもいいけど、わたしはいつでもチェルノマゾフです……さあ、おかけなさいな。一體、家の人はどうしてあなたを立たしたのでせうね？ 家の人には足のない婦人だなんて言ひま

すけれど、足はちゃんとありますよ。ただまるで桶のやうに脹れ上がつて、體が瘦せてしまつたのですよ。以前はどうしてどうして、とても肥つてましたけど、今はもうまるで針でも呑んだやうに瘦せてしまひましたね。」

「わたくし共は何分にも素性の卑しいものでして、素性の卑しい……。」二等大尉は又もや傍から口を出した。

「父さんてば、よう、父さん！」今まで椅子に坐つて黙りこんでゐた尙嬢の娘が、いきなりいつたかと思ふと、ハンカチで顔をかくした。

「道化者！」窓の傍の娘はだしぬけに言ふ。

「まあ、あなた、家は今どんなことになつてゐるか御覽なさいまし。」と母親は両手をひろげて、二人の娘を指さした、「まるで雲が湧き上がつてるやうなものですよ。雲が通り過ぎてしまふと、また、がやがや始まるんですからね。まだ、わたしたちが軍人のお仲間におりました時分は、いろんな立派なお客様がたくさん見えになつたものです。何も、あなた、何と較べるわけぢやありませんけど、愛してくれる人があつたら、こちらもその人を愛してやらなければなりませんよ。そのころ、補祭の家内が参りましたね。『アレクサンドルさんは氣性の立派なお方ですのに、ナスターシャさんといへば、地獄の申し子だ。』なんていふぢやありませんか。だから、わたしはね、かういつてやりましたの、『人は、誰でも崇拜してくれる相手があるのに、お前なんか一人ぼつちで、鼻もちならないわ。』すると、向かふのいふには、『お前なんぞは半へ抛り込んでやらなくちゃならない』——そこでわたしは、『ええ、この意



地わるめ、誰を教へに来たんだ？」するとまた、向かふでかういふんですよ、『わたしはきれいな空気を吸つて居るけれど、お前は汚い空気を吸つて居るぢやないか。』『ぢや、將校さん方みんなに訊いてみる、わたしの體の中に汚い空気があるかないか！』といつてやりました。それからといふもの、このことばかり氣になつてたまらなかつたんですよ。すると、つい先だつて、今のやうにここに坐つてゐますとね、本當の將官様がこちらへ復活祭をかけていらつしたんですよ、そこでわたしは、『閣下、一體、高尚な婦人が外の空気を吸つても、よろしいものでございませうか？』と訊きましたの。と、『うむ、こちらでは通風口でもつけるか、さもないければ戸を開けるかしなければいけません。何しろ、お宅の空気は新鮮でないのですからね。』と仰つしやるんですよ。しかも誰にきいても、皆さういふぢやありませんか！ 一體、あの人たちに、私の空気が、どうだつたんでせう？ 死人の臭ひよりはましぢやありませんか！ だから、わたしいつてやりますの、『わたしはあなた方の空気を濁したりなんかしませんよ。わたしは靴を注文して、よそへ行つてしまひます。』つて。まあ、ね、自分の母親をさう咎めないでおくれ！ ニコライさん、一體、わたしがお氣に入らなかつたんですの？ わたしのせめての楽しみは、イリュージカが學校から歸つて、わたしを可愛がつてくれることですの。昨日も林檎、持つて歸つてくれましたよ。どうか許しておくれ、母さんを許しておくれ、わたしは一人ぼつちの寂しい身の上です。一體、何だつて、みんなわたしの空気がそんなに厭やになつたのでせう？』

といつて、哀れな狂女は、いきなり聲をあげてすすり泣きを始めた。涙はとめどなく流れるのであつた。二等大尉はまつしぐらに妻の方へ駈け寄つた。

「母ちゃんよ、母ちゃん、およしよ、およしつたら！ お前は決して一人ぼつちぢやないよ。みんなお前を好いてゐるんだよ、みんなお前を尊敬してゐるよ。」と彼はまた妻の兩手に接吻しながら、兩の掌でその顔をやさしく撫てはじめた。それから、ナブキンを取るなり、顔の涙を拭いてやつた。アリョーシヤには彼自身の眼にも涙が閃めいたやうに感ぜられた。

「さあ、あなた、御覽になつたでせう？ お聞きになつたでせう？」彼はだしぬけに哀れな低能を指さしながら、威丈高になつて、アリョーシヤの方を振り向いた。

「ええ、よく分かりました。」こちらはへどもどしながらかう呟やいた。

「父ちゃん、父ちゃん！ 一體、父ちゃんはその人と……そんな奴うちやつてお置きよ、ねえ、父ちゃん！」不意に床の上に起き直つて、燃えるやうな眼で父親を見つめながら、少年は叫んだ。

「もう、澤山だわ、そんな道化た真似をして、馬鹿げた藝をして見せるのは、もういい加減にしたらいいぢやありませんか。そんなことは何の役にも立つぢやあるまいしよ……」

ワルワラは、もうすつかり癪癪を起こしてしまつて、やはり同じ片隅から、どなりつけた。彼女は床まで鳴らすのであつた。

「全く尤もな話だ、なあワルワラさん、今度こそはお前さんが憤慨なさるのも無理のない話だ。だから、わたくしもお前さんのいふことを聞きませう。さあ、お帽子をかぶりなさい、わたくしも、このシャツポを被りますから、一しよに出かけませう。あなたに一こと眞面目に申し上げたいことがございますが、まあ、この部屋を出てからにいたしませう。その、そこに坐つてゐる娘は、わたくしの娘で、



ニイナ・ニコライヅナと申しますんでございますよ。紹介するのを忘れて居りましたが。——これは生き身の天使でございますよ……人間の世界へ天降りしましたんで、……でも、お分かりになりますかしら……」

「ほら、あんなに體ぢゆう懐はせて、まるで痙攣でも起こしてゐるやうだわ。」とワルワラは腹立たしげに言葉をつづけた。

「ところで、いま地團太を踏みながら、わたくしのことを道化といつた娘も、やはり生き身の天使なんでございまして、わたくしのことを道化よばりしたのも、尤も至極なんでございますよ。さあ、カラマゾフさん、お伴いたしませうかな、切をつけなければなりませんので……」

かういつて、アリョーシャの手を取つて、部屋からいきなり、通りへ引つ張り出した。

## Ⅶ

### 清らかなる外氣のうちに

「空氣が澄んで居りますな。わたしのお屋敷の中は、實際、いろんな意味で申しましたが、あんまりせいせいして居りませんで。まあ、ゆつくり、参りませう。わたくしは面白いことをお聞かせしたいと

思ひました。」

「實は僕も、大へんな問題があるんですけれど……」とアリョーシャがいつた、「さて、どういふ風に切り出していいか迷つてゐるんです。」

「あなたがわたくしに用件のあることを、知らずに居る筈はございません。用がなかつたら、決して、わたくしのところなぞ、覗いて御覧になることもなかつた筈ですからね。それとも實際に、子供のことを言ひつけにいらつただけなんでございませうか？ それはどうも受けとれませんでね。それはさうと、序でに子供のことをちよつとお話しいたしませう。先程あの席では、すつかりお話ができなかつたものですから、今ここであのとときの様子を詳しく申し上げることにしませう。御覧なさいまし、この絲瓜もつい一週間前までは、もう少し厚かつたのでございますよ、——自分の髻のことを申してゐますので。わたくしの髻は絲瓜といふ綽名を取つてゐるんでございますが、これは主として、小學校の生徒のいふことなんでございますよ。ところで、その、あなたのお兄さんのドミトリーさんが、あの時、わたくしの髻を引つばつたんでございますよ。何といふわけもなしに、ただお兄さんが暴れ出したところへ、折悪しくわたくしが行き合はせたものですから。居酒屋から廣場へ引きずり出されたときに、ちやうどそこへ生徒たちが學校から出て來ましてね。その中にイリョーシャも混つてゐた譯なんです。わたくしがそんな目に遭つてゐるのを見ると、伴はいきなり飛びかかつて來て、『父ちゃん！ 父ちゃん！』とわめくんでしてね！ そしてわたくしをつかまへて、抱きしめながら、一生懸命に引き放さうとして、敵にむかつて、『放して下さい、放して下さい、これは僕の父ちゃんだから、ねえ、僕の父ちゃんなん



だから、勘忍してやつて頂戴よ！」全くさういつて唝鳴るぢやありませんか、『勘忍してやつて頂戴』と喚いたのです。それから、小さな手でお兄さんにとびついて、その手に、え、その手に接吻するぢやございませんか、……わたくしは、その時のあれの顔が、今でもありありと見えるやうでございますよ。忘れられないんでございますよ、決して、これから先も忘れはいたしません……」

「僕誓つてもいいです、」とアリョーシャは叫んだ、「兄は充分にこの上もない誠意をもつて、あなたに悔悟の念を表はす筈です。あの廣場で膝をついてまでも……無理にさうさせます。でなかつたら、もう僕の兄ぢやありません！」

「はあ、ではまだ御計畫中なんですね。あの人から直接に出たことでなくつて、あなたの立派な情愛から出たことなんですね。そんならさうと仰つしやればよろしいのに。いや、さういふわけなら、わたくしにもお兄さんのこの上もなく義侠的な、いかにも軍人らしい高潔なお心を證明させていただきます。お兄さんはあの時、その高潔なお心を、立派にお示しになつたのでございますからね。この髻を引つぱり、廻してゐた手を放しなされると、『君も將校なら、おれも將校だ、若し相當の介添人が見つかつたら、決闘を申し込め。さうしたら君のやうなやくざ者でも、得心の行くやうに相手になつてやる！』と、かう申されたんでございますよ。いや、全く義侠的精神ぢやございませんか！ わたくしは、そのとき、イリユーシャを連れてすごすごと歸りましたが、家の系圖にまで残るほどのその時の光景は、永久にあの子の心に刻みつけられたのでございますよ。いいえ、どういたしまして、わたくしたちは貴族の眞似をするわけぢやござりません。御自分でも考へて見て下さいまし。あなたは今わたしのお屋敷で、

何を御覽になりました？ 三人の貴婦人が坐つてをりますが、一人は足癢えの阿呆、もう一人は足癢えの佻儻、もう一人は足も達者で、利口すぎるくらゐでございますが、女學生でして、もう一度ペテルブルグへ行くと申して、何でもネヴ河の岸で、露西亞婦人の權利を求めるとか申して承知しません。イリユーシャのことは何も申しません。何といつてもやつと九つで、指一本にも當らないやうな子供でしてね。若しわたくしが死にましたら、かういふ子供はどうなるのやら分かりませんのでね。わたくしはことごとつだけあなたにお訊ねしたいんですけれど？ 若し、わたしがお兄さんに決闘を申し込んで、さつそく殺されでもしたら、その時はどうなるでせう？ 家内の者はどうなるでせうか？ おまけに、なほ仕末が悪いのは、お兄さんがわたしを殺してしまはないで、片輪者にするくらゐで許して下さつたときでございます。働らく譯には参りませんが、それでも口だけはやはり残つてゐます。一體、その時に、誰がこの口を養つてくれるでせう？ それとも、イリユーシャを學校から下けて、毎日乞食しに歩かさうと仰つしやるんでございませうか？ お兄さんに決闘を申し込むといふことは、わたくしにとつて、これだけの意味があるのです。そんな馬鹿々々しいことをいつても、もう仕方はございませんがね。」

「兄さんはあなたにお詫びしますよ。廣場の眞ん中であなたの足もとに跪づくでせう。」アリョーシャは眼を輝やかせながら、又もや叫んだ。

「またあの人を裁判所へ訴へようかとも思ひました。」と二等大尉はつづけた、「ところが、わが國の法典を披けて御覽なさいまし、わたくし個人を受けた侮辱に對して、相手の者から大した賠償もこれな



いんぢやございせんか？ それに、そこへもつて来て、アグラフェーナ(エンカシ)様が、わたしを呼びつけて、いきなりどなり散らすぢやありませんか、『大それたことを考へるもんぢやないよ！ 若しもあの人を訴へでもしたら、わたしが脇から手を廻して、あの人がお前を撲つたのは、お前のいんぢきよのせむだと、みんなに吹聴してやる。そしたら、お前があべこべに、裁判所へ引つばられるんだよ。』つて。しかし、このいんぢきが誰の手から出たことか、そして誰のいひつけでわたくしが卑怯な真似をしたのか、神様ばかりはよく御承知でございますよ。つまり、あの方御自身と、フォードル様のさし金ぢやございせんか？ それから附けたりに仰つしやるには、『おまけに、わたしが一生お前を追つ拂つたら、わたしのところでは銀一文だつてとれないんだよ、うちの商人にもさういつておいたから、(あの方はサムソフ老人のことを『うちの商人』と申されますので)、あれもお前を寄せつけない筈だ。そこで、わたしも考へました。若しも、あの老人がわたくしを寄せつけないかつたら、誰から貰へるのか？ と。何せ、わたくしに儲けさしてくるのは、あのお二人きりでございませうからね。あなたのお父さんはある別な事情のために、わたくしを信用して下さらないやうになつたばかりではなく、わたくしの證文を楯にとつて、裁判沙汰にしようとしてらつしやるんでございませう。こんなことのために、わたくしも、黙つてしまつた譯でして。また、あなたも、わたくしの内を御覽になつたわけなんです。ところで、一寸、お伺ひいたしますが、あの子は先程ひどくあなたのお指を咬んだんでございませうか？ お屋敷の中で、あの子のゐる前では、どうにも詳しいことに亘るのが氣がひけたものですから。』

「ええ、すむぶんひどいんです。それに、坊ちゃんも大へん氣が立つてゐたやうですから。あの坊ち

やんは僕をカラマゾフの一族として、お父さんの仇うちをしたのです、それが今になつてよく分かつて來ました。でも學校の友だちと石の投げつこをしてるところを、あなたが御らんになつたら、どうでしたらう？ それこそ危なかつたですよ。何しろ子供で、分別もありませんから、皆で坊ちゃんを殺してしまふかも知れせんよ。石が飛んで來たら、頭なんか割れるかも知れせんよ。』

「いや、もう當りましたんでございませう、頭でなくて、胸をやられたんですが、心臓のちよつと上の邊へ石が當つたとかで、あさができて、今日は泣いたり、うなつたりして、歸つて來るなり、あの通り病みついたんでございませうよ。』

「時に、御承知でせうが、坊ちゃんも御自分から先にみんなに食つてかかるんですよ。あなたのために憤慨したんでせう。子供らの話によると、さつきクラソトキンとかいふ子供の横腹を、ナイフで突いたさうですよ……」

「そのことも聞きましたが、どうも危いことでございます。そのクラソトキンといふのは、この役人ですから、また厄介なことが起るかも知れせん、……」

「僕はあなたに御忠告しますが、」とアリョーシヤは熱心につづけた、「當分の間、氣が靜まるまで、全然、學校へやらない方がいいですよ、……そのうちに、怒りも納まるでせうからね……」

「怒り！」と二等大尉は引き取つた、「全く怒りでございますね！ ちつぽけな子供ですが、大きな怒りをもつてゐますよ。あなたはこのことを全部御存じないんですね。ぢや特にこの話をはつきり説明させていただけます。といひますのは、あの出來事の後で、學校の子供らが、あれを絲瓜といつてから



かひ出したことです。學校の子供らは、なかなか慘酷なものでしてね、一人々々のときは天使のやうでも、いつしよになると、わけても學校でみんな一しよになると、よく慘酷になるものでしてね。皆がからかひ出すと、イリニューシャの心の中に健氣な精神が、むらむらと湧き起こつて來たのです。普通の弱い子供なら、いかげんに降参して、自分の父親を恥づかしく思ふところでせうが、あれは一人で父親のために皆を向かうに廻しました。父親のために、眞理のために、眞實のために奮ひ立つたのです。あのとき、お兄さんの手に接吻しながら、『父ちゃんを勘忍してやつて頂戴。父ちゃんを勘忍してやつて頂戴』と喚いたとき、あの子がどんな辛い思ひをしましたか、まあ神様お一人と、それからわたくしのほか、知る者はございませんですよ。全く、手前どもの子供は——つまり、あなた方のぢやなくて、手前どもの子供で、——人から蔑まれてゐても、氣高い貧乏人の子供といふものは、もう九つくらゐの年から浮世の眞理をわきまへますからね。金持なんかには、どうしてどうして一生涯かかつて、そんな深いところまで分かるもんぢやありません。ところが、うちのイリニューシャと來たら、例の廣場で、お兄さんの手を接吻したとき、その瞬間に眞理といふ眞理を一時に試したんでございませすよ。この眞理があれの頭にしみこんで、永久にあれを打ち砕いたんでございませすよ。』

二等大尉は又しても昂奮のために、前後を忘れたかのやうに、熱心に述べるのであつた。述べながら、『眞理』がイリニューシャの心を打ち砕いた有様を、まさまさと現はさうとでも思つたかのやうに、彼は右手を固めて自分の左の掌を打つてゐた。

「その日、あれは熱を出しましてね、一晩ぢゆう、謔言ばかり言ひ通したのです。その日一日といふ

もの、あの子はあまりわたくしに口を利きませんでした。黙つてゐたといつてもいいくらゐでした。ただ、隅つこの方から、一生懸命にわたくしを見つめてゐましたが、だんだんと窓の方に凭れかかつて、學校のおさらへでもしてるやうに見せかけてましたが、おさらへなんぞに氣をとられてゐないことは、わたくしによく分かりました。次の日は少々飲みましたので、大ていのは忘れてしまひました。罪の深い男で、ただ憂さ霽らしのために飲んだんでございませすよ。母ちゃんもやつぱり泣き出しましてね、わたくしは母ちゃんをかなり愛して居ります、——まあ、悲しさをまぎらはすために、なげなし金をはたいて飲んだんでございませすよ。あなた、どうかわたくしを馬鹿にしないで下さいませ、露西亞で、われわれ仲間では酒飲みが一ばん善人といふことになつてゐましてね、また一ばん人のいい連中がまた一ばんの酒のみなんでございませすよ。それで、横になつてゐましたんで、イリニューシャのことはその日はそんなによく覚えてゐませんでした。ところが、丁度その日は朝つばらから子供たちが學校で、あれをからかつてゐたんでございませすよ。『やい、絲瓜野郎、お前の親父は絲瓜をつかんで居酒屋から引つ張り出されたんだ、やあい。それで、お前はその傍をかけすり廻つて、あやまつたぢやないか。』とはやし立てましてね。三日目の日にあれが學校から歸つて來たのを見ますと、眞つ蒼になつてしまつて、その顔色つたらございませせん。『一體、どうしたんだ』と訊いても黙つてるんです。それにわたくしのお屋敷では何一つ話ができんです。すぐに母ちゃんやお嬢さんたちが口を出しますので。その上お嬢さんたちはもう事件のあつた當時に、すっかり聞きつけてしまつたのでございませすよ。ワルワラなんぞはもう、『この道化者、一度だつてお父さんのすることに、理窟の適つた例しはないぢやありま



せんか?』なんかと、まぜかへし始めたんですよ。『全く、その通りだ、ワルワラさん、わしのすることが理窟に適ふ筈はないよ。』といつて、その場を濁しときましたよ。その日の暮れ方に、わたくしは野郎を連れて散歩に出かけました。ちよつとお断りしておきますが、わたしはそれまで毎晩あの子をつれて、今あなたとかうして歩いてゐると同じ道を、散歩につれ出してゐたんですよ。家の木戸から、あの道の籬の傍に、たつた一つ淋しさうにころがつてゐるあの、すてきに大きな石のところまで行くんです。あの石のところから牧場が始まるんですが、閑静な見晴らしのいいところでございますよ。いつもの通り、わたくしは、イリニューシャの手を取つて歩いてをりました。あれの手はまことに小さな手で、指なぞ細くつて、冷めたくさいますんで、何しろ、あれは胸の病氣があるもんでございすから。ところが、不意に、あの子が、『父ちゃん、父ちゃん——』といひ出します。わたしが、『何だい?』といひながらよく見ると、あれの眼が光つてるぢやありませんか。『父ちゃん、あのときね、父ちゃん、ひどい目に遭ひましたね!』『仕方がないよ、イリニューシャ。』とわたしはいひました『あいつと仲直りしちやいけないよ、父ちゃん。だつて学校で皆が言ふんだもの、父ちゃんが仲直りのために、あいつから十留もらつたなんて。』『そんなことがあるもんか、イリニューシャ、もうかうなつたら、どんなことがあつても、あいつから金なんぞ貰ひやしないよ。』すると、あれはぶるぶる身慄ひして、いきなり両手でわたくしの手をとつて接吻しながら、『父ちゃん、あいつに決闘を申し込んで下さい。だつて、学校でみんなが言ふんだもの、父ちゃんは臆病だから決闘を申し込めないんだ、それで、あいつから十留もらつたんだなんて馬鹿にするんだもの。』『イリニューシャ、あいつに決闘を申し込むわけに行か

ないんだよ。』と答へて、わたくしは、たつた今あなたにお話ししたことを、あつさりと聞かしてやつたんです。あれはじつと聞いて居りましたが、『父ちゃん、それでもやつぱり、仲直りをしないで頂戴。僕は大人になつたら、決闘を申し込んで、あいつを殺してやるんだ!』といふんです。眼を光らせましてね。まあ、それでも、やはり、わたしは父親でございますから、一こと本當のことを教へてやらなければなりません。で、『たとひ、決闘になつても、人を殺すのはいけないことだ』とかういひきかせますと、『父ちゃん、僕、大人になつたら、あいつを打ち据ゑてやるんだ。僕、自分のサーベルであいつのサーベルを叩き落して、あいつに飛びかかつて、倒してやるんだ。そしてね、あいつの頭の上にサーベルを振り上げて、「今すぐにも殺せるんだけれど、勘辨してやる、有難く思へ!」つていつてやるんだ……』つて。どうでせう、あなた、どうでせう、この二日の間に、こんな段取りが、あの小さな頭になつてきてるぢやございせんか。あれは、晝も夜もこのことばかり考へ通して、きつと、謔言にまで言つてたんでせうよ。ところで、学校から、ひどい目に遭つて歸つて來るつてことは、やつと、一昨日、分かつたばかりなんでございすよ。あなたの仰しやる通り、もう、あの子を學校へは決してやりませぬ。あれが組中の者を向かふへ廻して、自分から腹を立て、胸が一ぱいになつてみんなに喧嘩を賣るといふことを聞いたとき、わたしはあれのことが氣になつて、たまらなかつたんでございすよ。それからまた、二人で散歩に出た時のことですが、イリニューシャがこんなことを訊くぢやありませんか。『父ちゃん、金持が世界中で誰よりも強い?』つて。『さうだよ、イリニューシャ、金持より強いものは世界中にないんだ。』と、わたしが言ひますと、『父ちゃん、僕うんと金持になるよ。僕は軍人に



なつて、みんな負かしてやるんだ。さうすると、皇帝陛下が僕に御褒美を下さるから、さうしたらここへ歸つて来るんだ。そしたら、誰だつて僕に手出しなんかできるものか……』それから暫らく黙つてゐましたが、『父ちゃん。』とまた言ひ出しました。——唇はやはり前のやうに慄へてるぢやありませんか、『この町は本當にいやな所だねえ、父ちゃん！』『さうだ、イリニューシャ、この町はどうもあまり感心しないよ。』『父ちゃん、ほかの町へ、ほかの、いい町へ引越させようよ。僕らのことを誰も知らない町へ引越させよう。』『うん、越さう！ さうしよう。イリニューシャ、ただお金を少しためりやいいんだから。』といつて、わたくしは、あの子の悲しい思ひをまぎらす折が來たのを喜んで、どんな風にして他の町へ行かうかだの、馬と馬車をどうして買はうかだの、いろんな空想を始めました。『母ちゃんと姉ちゃん、お前は馬車へ乗せて、上から覆ひをしてやらう。そしてお前とお父さんはその傍を歩いて行かうよ。時、お前だけは乗せてやるが、父ちゃんはやはり傍について歩いて行かう。だつて、うちの馬だから世話をしやらないやならんから、みんなで乗る譯には行かないんだよ。そんな風にして行くことにしようね。』かういひますと、あの子は夢中になつて喜びました。何よりも、自分の家に馬があつて、自分がそれに乗つて行くといふのが嬉しいんですね。御承知の通り、露西亞の子供といふものは馬といつしよに生れるやうなものでございますからね。まあ、こんなことを、永いこと、お喋りしました。いい鹽梅に、あれの氣をまぎらはして、慰めてやつたと思つて安心しました。これは一昨日の夕方のことでしたが、昨日の晩になると、様子ががらりと變つてしまひました。朝、あれはまた例の學校へ出かけました。歸つて來た時には沈んだ顔つきをして居りました。ひどく沈み込んで居りましたので。夕方、わた

しはあの子の手を取つて、散歩に出かけましたが、黙り込んでゐて、口をきかんです。風がそよそよと吹いて來て、夕日はかげり、いかにも秋らしい感じがしました。あたりはだんだん薄暗くなつて、ぶらぶらして居りましたが、何だか二人とも氣が減入つて來るやうでございました。『なあ、イリニューシャ、どんな風にして旅立ちの用意をしたものかな。』とわたくしが申しました。やはり昨日の一件に話を持つて行かうと思ひましたので。ところが、やはり黙つてゐるぢやありませんか。氣がついて見ると、あれの指が私の掌の中でふるへてゐるのです。ああ、これはいかん、何か新しいことがあるんだな、と、わたしは思ひました。そのうちに、ちやうど今と同じやうに、この石のところまでやつて來て、わたしはその上に腰をかけました。すると、空には紙鳶がどつさりあがつてゐて、ぶんぶん唸つたり、ばたばた音を立てたりしてゐました。ちやうど紙鳶の時節なものですから。『おい、イリニューシャ、おれたちも一つ去年の紙鳶をあげようぢやないか。お父さんが繕つてやるよ。一體、お前、どこへ藏つたんだえ？』と訊きましたが、あれはやはり黙つて、そつぽを向きながら、わたしに横顔を見せて立つてゐるんでございますよ。そのとき、疾風が吹いて來まして、砂を吹き上げました。……それで、あの子はいきなりわたしに飛びかかつて、小さな兩手でわたくしの頸筋に抱きついて、じつとしめつけるのでした。御承知でせうが、無口でゐても、氣位の高い子供は、いつまでも肚の中で涙を抑へてゐるものですが、非常な悲しみに襲はれてやり切れなくなると、もうその時は涙が流れるのでなくつて、まるで小川が逆

\* うちの長男フォードルが馬が大好きで、父に、しよつちう馬のことばかり訊ねるので、よくドストイエフスキーはかう言ひました。父は喜んで、くはしく馬の話をしてやつて、子供の好奇心を満足させるのでした。(アンナ夫人の駐)



るやうでございますよ。その温い涙が迸つて、わたしの顔は、忽ちずぶ濡れになつてしまひました。あの子はまるで引きつけたやうに、しやくり上げて泣きながら、身慄ひをして、一生懸命にわたくしを抱きしめるぢやありませんか。わたくしはじつと石の上に坐つて居りました。『父ちゃん、』とあの子が喚くのでございます。『父ちゃん、あいつは父ちゃんに何て恥をかかしたんだらうね!』そこでわたくしも貰ひ泣きをしましたんですよ。二人は石の上に坐つて、抱き合つたまま慄へて居りました。『父ちゃん、父ちゃん!』とあれがいへば、わたしも、『イリニューシャ、イリニューシャや!』と申します。そのとき誰も二人を見た者はございませぬ。ただ神様だけは御覽下すつて、出勤簿へつけて下すつたらうと存じます。どうか、アレクセイさま、お兄さまによくお禮を申して下さいませぬ。とんでもありません。あなたの御得心の行くやうに、あの子を撲るわけにはとても行きませぬでございますよ!』

彼は長談義を、元のやうな恨めしげな、キ印らしい語調で結んだのであつた。しかし、アリオーシャは、彼が自分を信用してゐると感じた。誰か他の人が自分の立場にあつたとしたら、決してこの男は自分にこんなことを『語り』もすまいし、今、自分に話したやうなことを報告もしないだらうと思つた。それがアリオーシャを元氣づけたが、胸は涙にふるへるばかりであつた。

「ああ、どうかしてあのお子さんと仲直りがしたいもんです!」と彼は叫んだ、「若し、あなたがうまく取り計らつて下されば……!」

「いや、全くでございますよ。」と二等大尉は呟やいた。

「しかも、今申し上げようと思ふのは別のことですよ。まるで別のことですよ。ようござんすか、」アリオ

ーシャは叫びつづけた、「ようござんすか! 僕はあなたに言つてを頼まれてゐるんです。あの僕の兄のドミトリーは許嫁の妻をも辱めたのです。それは實に氣高い令嬢なんです、あなたもきつとお話をお聞きになつたでせう。僕はあの人の受けた侮辱を、あなたに打ち明ける権利を持つてゐます。いや、打ち明ける義務があるといつてもいいくらゐです。なぜと申しますと、あの人はあなたがお受けになつた侮辱を聞き、あなたの不仕合せな境遇も何もかも聞いたので、たつた今、……ほんの今さつき……この扶助金をあの人の名であなたにお届けするやうにと、僕にお頼みなすつたからです、……尤も全くあの人ひとりの名で、あの人を捨てたドミトリーの名ではありません。決してそんなことはありません。また弟たる僕の名でもありません。ほかの誰の名でもありません、全くあの人ひとりの名なんです! あの人には是非とも納めていただくやうにと、拜まぬばかりに頼みました、……だつて、あなた方お二人は、同じ人間から侮辱を受けたんぢやありませんか、……ですから、あの人があなただけのことを思ひ出したのも、自分であなたと同じやうな侮辱を受けた時でした。(つまり侮辱の程度が同じな譯です)。それです。まあ、妹が兄を助けるといふやうなものです、……あの方はあなたがお困りになつてゐるのを承知してゐますから、自分を妹だと思つて、この二百留といふ金を納めていただくやうに、是非あなたを説きつけてくれと僕に頼んだんです。このことは誰ひとり知る者がありませんから、とんでもない噂が立つ氣づかひは全然ありません。で、これがその二百留です。僕、誓つて申しますが、是非ともあなたはお納めにならんといいけませんよ。……でない、……でない、世界中の人はみんなかたき同志にならなくちやならんといふ理窟になつて來ますからね! しかし、世の中には兄弟といふもの



もある譯ぢやありませんか、……あなたは氣高い心をもつたお方ですから、……是非ともお納めにならなければなりませんよ、是非とも！」

といつて、アリオーシャは新しい二枚の虹色の札を差し出した。二人はそのとき、ちやうど鐘のほとりの、大きな石のところに立つてゐたが、あたりには誰もゐなかつた。二枚の紙幣は二等大尉に怖ろしい印象を與へたらしかつた。彼は身を慄はせたが、今のところは、ただ驚愕のためばかりらしかつた。彼は、こんな風なことは夢にも思はなかつたし、こんな成行を豫想だにしかつたからである。誰からにもせよ扶助金を、しかも、こんなに大へんな金を貰はうなどは、想像さへしたことがなかつたのである。彼は紙幣を手にしたが、暫らくは、返事もできなかつた。何かしら、まるで違つた表情が彼の顔にちらついた。

「これをわたくしに、わたくしに、わたくしに！ こんな澤山なお金を、二百留といふ大金を！ まあ！ わたくしは、もう四年ばかりも、こんな大金を見たことがございませぬよ、——まあ、これはこれは！ それに、『妹から』と仰つしやるんでございませぬ、……それは一たい本當に、本當にでせうか？」

「誓つて申します、僕が今いつたことはみんな本當です！」とアリオーシャは叫んだ。二等大尉はちよつと顔が赧くなつた。

「ところでね、あなた、お伺ひしますけれど、若し、わたくしがこの金を受け取りましたら、卑屈な人間にならないでございませうか？ つまり、あなたの眼から御覽になつて、わたくしが卑屈な人間にな

らないでございませうか？」彼は兩手を伸ばしてアリオーシャの體に觸りながら、一こと一こと急ぎ進むのであつた。「あなたは『妹の贈物』だからと申して、わたくしを説きつけなさいませけれど、心の中ではですね、肚の底では、わたくしを見下げた男だと思ひになるんぢやございませぬか、若しわたくしがこれを受け取りましたら、え！」

「いや、いや、なあに、そんなことはありませんよ！ 僕は命にかけても誓ひますが、そんなことはありません！ それに、決して誰も知る者はゐないんですもの。知つてゐるのは、僕たちばかりですよ。僕とあなたとあの人と、それにあの人がかかりに親しくしてゐる奥様がもう一人……！」

「奥様なんかどうでもいいです！ ねえ、アレクセイさま、どうぞ聞いて下さいませ。全くもう何もかも聞いて頂かなくてはならない時が來たんでございますよ。なぜといつて、今この二百留といふお金がわたくしにとつて、どんな意味を持つてゐるか、あなたは御存じないからで。」二等大尉は次第次第に取り亂しながら、殆んど野性的なくらゐに有頂天になつて、言葉をつづけた。彼は前後をも忘れかけたやうに、まるで自分の言ひたいことを、すっかり言はしてもらへなかつたからと、そればかりを心配してゐるやうに、思ひ切り口早に言ふのであつた。「この金が非常に尊敬すべき神聖な『妹』から、眞ごころこめて、贈られたといふことは別として、現在、わたくしはこの金でもつて、『母ちゃん』とニイノチカ——あの尙僕の天使、つまり、わたくしの娘を療治してやることのできるんでございます。いつかお醫者のヘルツェンシュトゥベ様が、御親切な思召から、わたくしどもへお出で下さいまして、まる一時間ばかりも可哀さうな親子の者を診て下さいましたが、『どうにも分かん』と仰つしやるん



でございますよ。しかし、それでも、こちらの薬種屋で賣つてゐる鑛泉を、母ちゃんの處方に書いて下さいましてね、これはたしかにききめがあるとのことでした。それから藥湯の素もやはり處方して下さいました。鑛泉は三十哥いたしますが、どうしても四壺くらゐは飲まなければなりません。わたくしはその處方を聖像の下の棚へ載せて、今もつて、そのまましておくやうな始末です。ところで、ニイノチカの方は何かの薬を熱く沸かして、お湯を使はせるやうにとのことでした。しかも毎日朝晩二度づつなのでございますよ。あなた、どうしてまあ、手前どもで、そんな療治ができるものでせう？ あの小屋で、女中もなく、手傳ひもなく、道具も水もなしに何ができません？ ところが、ニイノチカはひどいレウマチなんでございますよ。わたくしはこのことをお話しするのを忘れてゐましたが、毎晩々々右半身が全體に、づきづき痛んで、それはそれは苦しむんでございますよ、まるで嘘のやうな話ですけど、あの神様のお使ひはわたくしどもに心配をかけまいと、一生懸命に我慢をして、他の者が眼をさまさないやうにと、呻き聲さへ立てないんでございますよ。わたくしどもは食べ物も手あたり次第に、何でもかまはず口に入れるんでございますが、その中でも、あれが一番わるい、犬にしかやられないやうなところを取るぢやありませんか。『こんなよいところをいただくに罰があたります、それではみんなの物を取り上げることになりませう。わたくしは厄介者なんですから。』と、まあ、こんなやうなことを、あれの天使のやうな眼つきが、言ひたさうにしてゐるんですよ。わたくしどもが、あれの世話をしてやるのが、あれには辛いらしいんでございますよ。

『わたくしはそんなことをしていただく値うちはありません、わたくしは何の役にも立たない、つま

らない片輪ぢやありませんか。』——ところが、どうしてどうして、役に立たないどころぢやございませぬ。あれは天使のやうな優しい心で、わたくしどものことを神様に祈つてくれるのでございますから。あれがゐなかつたら、あれの優しい言葉がなかつたら、それこそ、わたくしどもの家は地獄も同然なのでございますよ。あれはワルワラの心までも、慰めてくれました。しかし、ワルワラのこと、やはり悪く思はないで下さいませ。あれもやはり天使ですけど、ただ辱しめられたる天使なのでございませぬから。あれがここへ参りましたのは夏のことでしたが、その頃は十六留の金を持つて居りました。それは子供に積古などしてやつて、儲けた金なので、九月——といつて、つまり今ごろはベテルブルグへ歸るつもりで、それを旅費に取つておいたんでございます。ところが、わたくしどもがその金を取つて使つてしまひましたので、あれはもう歸らうにも金がない、といふやうな始末なのでございます。それにまだ歸れしないと申す譯は、わたくしどものために懲役人のやうな働きをしてゐるからでございます。何しろ、やくざ馬に馬具や鞍をつけて、こき使ふやうな有様なのでございますからね。皆の者の世話をする、洗濯をする、雑巾がけをする、床を掃く、母ちゃんを床の上に寝かしてやる——ところが、そのお母さんは氣ちがひと來て、涙つぽい女で氣ちがひなんでございますよ！ かういふわけでございますから、この二百留があれば、女中も雇へますし、ねえ、アレクセイさま、可愛い者どもの療治にかかることもできますし、女學生をベテルブルグへやることもできるんでございますよ。牛肉も買へるし、みんなに食べ物の具合もよくすることができまので。ああ、しかし、これも、空想です！」

アリョーシャは彼にかうした幸福を與へることができて、また彼がこの幸福を受けることを承諾した



ので、喜ばずには居られなかつた。

「待つて下さい、アレクセイさん、待つて下さい。」二等大尉は又もや、ふつと腦裡に浮かんで来た空想に驅られて、我を忘れたやうに早口に喋り出した。「ねえ、あなた、わたくしとイリユーシヤの空想は、今すぐ實現できるかも知れませんよ。小さな馬と幌馬車を買つて、あの子が是非とも黒駒くろこまにしてくれと申しますから、黒駒くろこまを買ふことにして、一昨日、計畫したやうに、ここを立つんでございます。K縣にはわたくしの知合ひの辯護士、幼な友達がゐますが、或る確かな人を通して聞いたのでは、若しわたくしがそちらへ行つたら、その事務所で書記に使つてくれるとか言つてゐるさうです。全くあの人のことだから、使つてくれないとも限りません。ですから、わたくしは母ちやんと、ニイノチカを載せて、……イリユーシヤを馭者臺に坐らせて、自分は歩きながら、みんなを引つ張つて参ります、……ああ、もしここで倒された貸金を手に入れることができたなら、これだけの間に合ふんだがあ！」

「間に合ひますとも、間に合ひますよ！」とアリョーシヤは叫んだ。「それにカチリーナさんはまだ幾らでも、お入り用なだけ送つて下さいます。それに、あなた、僕も自分の金を持つてゐますから、兄弟だと思つて、親友だと思つて、お入り用なだけ取つて下さい。それは後で返して下さればいいのですから……（あなたは金持になりますよ、金持に！）その上、あなたがほかの縣へ行かうと考へつかれたのは、實にこの上もないよい御了簡でした！ さうしたら、あなた方はきつと救はれますよ、しかも、誰よりも一番あのお子さんのためになることです、——では、なるべく早く、冬になつて、寒くならないやうにいらつしやい。そしてあちらへいらつしても、僕たちに手紙を下さいよ。僕たちはいつまでも親友で

のようぢやありませんか、……いいえ、これは決して空想ぢやありません！」

アリョーシヤは相手を抱きしめようとしてゐた。それほど彼は喜んでゐたのである。しかし、相手の様子を一目見るなり、急に彼はそのまま立ち去つてくんだ。二等大尉は頸をのばして唇を突き出しながら、昂奮した青い顔をして立つてゐたのである。そして、何やら言ひ出しさうに、唇をもぐもぐさせるのであつた。聲は少しも出なかつたが、絶えず唇を動かしてゐる様子は、何となく不思議であつた。

「あなた、どうなすつたんです！」アリョーシヤはなぜかしら、不意にぎくりとした。

「アレクセイさま、……わたくしは……あなた」二等大尉は、山から身投げしようと思つた人のやうな風をして、じつと、穴の明くほど、狂氣じみた眼で相手を見つめながら、それと同時に唇には微笑みを浮かべてゐるらしく、切れ切れに、呟つぶやいた。「わたくしは……あなた……ねえ、如何でございませう、今すぐ一寸、わたくしは手品をお目にかけてようと思ひますが！」いきなり早口に、しつかりした聲で囁ささやいた。話はどう、少しも途切れなかつた。

「どんな手品です？」

「ええ、手品です、ちよつとした手品です。」二等大尉は相變らず囁やくのであつた。彼は口を左の方へ歪めて、左の眼を細くして、まるで吸ひつくかのやうにアリョーシヤを見つめてゐた。

「一體、どうしたのです、どんな手品なんです？」と相手はすつかり恐れをなして、叫んだ。

「ほら、御らん下さい、これです！」不意に、二等大尉は金切り聲を立てた。

\* ちちの子、フロードルは馬が大好きで、父親にむかつて、「きつと黒駒を買つて頂戴」と願ひのぞいた。（アンナ夫人の註）



彼は今まで話をしてゐる間ちゆう、右手の拇指と人差指で、角のところをつまんでゐた二枚の紙幣を、相手の方へ差し出して見せたかと思ふと、いきなり荒々しく引つつかんで、皺くちやにしながら、右手でしつかりと握りつぶしてしまつた。

「分かりましたか、分かりましたか？」眞つ蒼な顔をして、夢中になりながら、彼はアリョーシャにむかつて叫んだ。やがて、いきなり拳を振り上げると、皺くちやになつた紙幣を力いつばい砂の上に叩きつけた。「分かりましたか！」紙幣を指さして見せながら、彼は再び金切聲で叫んだ、「まあ、この通りでござい—」

といつて、急に彼は右の足をあげて、荒々しい憤怒の色をうかべながら、靴の踵で紙幣を踏みつけ始めた。さうして、息を切らしながら、踏みつける度に喚き立てた。

「これがあなたの金ですよ！　これがあなたの金ですよ！　これがあなたの金なんです！　これはあなたの金なんだ！」

不意に、ひよいと、彼は後ずさりして、アリョーシャの前に仁王立ちになつた。その全體の様子は名状すべからざるプライドを示してゐた。

「あなたを使ひに寄こした人にいつてやつて下さい、絲瓜は自分の名譽を賣物にしないつて！」

彼は両手を宙へさし上げながら、叫ぶのであつた。それから急に身をかはしたかと思ふとまつしぐらに駆け出した。が、まだ五足と行かないうちに、不意に彼はまた振りかへつて、アリョーシャに手を振つて見せた。又もや五足と走らないうちに、もう一度振りかへつたが、これが最後であつた。この時は

歪んだやうな笑ひのかげもなく、顔は涙に濡れて慄へてゐた。涙ぐんで、ときれがちな咽び泣くやうな聲で、彼は早口に叫んだ。

「あんな恥づかしい思ひをして、その報いに金なんか貰つたら、うちの子に何と言ひわけができるのか！」かういふなり、彼はまつしぐらに駆け出して、今度はもう振りかへらうともしなかつた。アリョーシャは言ひ知れぬ悲しさを覚えながら、後姿を見送つてゐた。ああ、あの人も最後の瞬間まで、自分が紙幣をもみくちやにして地べたへ抛り投げようとは、夢にも考へなかつたらう。アリョーシャにはそれがよく分かつてゐた。彼は走りながら、一度も後を振りかへらなかつた。決して振りかへらないだらうといふことは、アリョーシャもよく承知してゐた。彼は二等大尉の後をつけて、聲をかけようといふ氣にはならなかつた。その理由も彼にはよく分かつてゐた。相手の姿が見えなくなつたとき、アリョーシャは二枚の紙幣を拾ひ上げた。紙幣はただ、皺くちやになつて、砂の中にめり込んでゐるばかりで、アリョーシャが擴げて皺を伸ばして見ると、破れたところもなく、まるで新しい物のやうに、ばりばりしてゐたほどであつた。彼は皺をのばして、それを疊むと、ポケットに入れて、頼まれたことの結果を報告するために、カテリーナのもとをさして歩き出した。



## 第五篇

Pro et contra

### I

#### 婚約

アリョーシャを先づ最初に出迎へたのは、やはりホフラーコワ夫人であつた。夫人はあわててゐた。かなり大へんな騒ぎが起こつたのであつた。カテリーナ・イワーノヴナのヒステリイはあげくのはてには卒倒するに至つて、やがて、「怖ろしいほど、ひどい衰弱に襲はれましてね、あの人は床について眼をつりあげて、うはごを始めたさいましてね。いま熱がさましてね、ヘルツェンシュトゥベも迎へにやりましたし、二人の伯母さんも迎へにやりましたの。伯母さんたちはもういらつしつてますけれど、ヘルツェンシュトゥベの方はまだお見えになりません。みんなあの人の部屋に控へて、お待ちしてゐますの。何か起こるでせうよ、何しろ、あの人はもうまるで覺えがないんですからね。まあひどい熱病に

「もなつたら！」

かういふうちにも、夫人はひどく驚ろいたやうな風をしてゐた。そして、「これはもう大へんなことです、大へんなことです！」と一言一句につけ加へてゐたが、まるで今までにあつたことは何もかも大へんなことなかでなかつたかのやうであつた。アリョーシャは心苦しさに、夫人の言葉を聞き終つた。今度は彼が自分の方に起こつた出来事を話しかかつたが、夫人は暇がないからといつて、口を切り出したかと思ふと忽ちそれを遮つてしまつた。どうかリーズのところへ行つて、その傍で自分が来るのを待つてゐてくれと頼むのであつた。

「アレクセイさん、リーズはね、」と夫人は殆んど耳もとに口をあてんばかりにして囁やいた、「リーズは今わたしを妙にびつくりさせましたの、ですけど、喜ばしてもくれませんでした。ですから、わたしはあれのことなら、何でも許してやりますわ。まあ、どうぞごさいませう、あなたが出ていらつやるとすぐに、あの子は昨日も今日も、あなたをからかつたとかいつて、ひどく後悔し出してましたね。でも、あの子からかつたんぢやありませんわ、ただ一寸、ふざけただけですよ。けれど、涙を流さんばかりに心から後悔するものですから、わたしびつくりしてしまひましたの。今までにあの子がわたしをからかつたからつて、一度も眞面目に後悔したことなんかありません。いつも冗談なんですよ。あなたも知つてゐられるやうに、あの子つたらもう、しよつちゆうわたしをからかつてばかりゐるんですよ。ところが、今日はどうしたことが眞面目なんですの。それこそ大眞面目なんです。あの子はね、アレクセイさん、大そうあなたの御意見を尊重してをります。ですから、若しできることなら、あの子のことを



腹を立てないでいただきたいの、悪く思はないでいただきたいの。わたしはいつもあの子を大目に見てゐますの、だつてそりや本當に利口な子なんでものね——さうお思ひになりませんか？ 今もこんなことを申しますの——『あの子はわたしの幼馴染よ——おまけに一ばん眞面目なお友達なのよ。それなのにわたしは？……』あの子はかういふことにかけては、大へんにまじめで、記憶もたしかなのです。けれども、何よりも感心なのは、あの言葉なんですの。本當に思ひがけないことを、ひよいひよいと言ひ出すんですからね。例へば、ついこの間も梅の木のことと面白い話がございますわ。あの子のごく小さい時分のこと、家の庭に一本の梅の木がありましたの。今でもやはりあるんですから、べつに、何も過去のことにしてお話しすることなんかありませんわね。アレクセイさん、梅の木は人間と違つて、長いあひだ變らないものですわねえ。あの子は云ひますの、『お母さん、わたしあの梅を夢のやうに覺えてるわ』つて。——つまり『うめをゆめのやうに』といふのですけれど、言ひ方はもう少し違つてゐました。だつて、何だかごちやごちやしてゐましたから。むろん、梅なんてばかばかしい言葉ですけれど、あの子はさういふことで何か大へん奇抜なことをいつて聞かせましたので、わたしはどうしてもうまくお話しができませんの。それにもう忘れてしまひましたわ。ではもう失禮しますわ、わたし吃驚りしてしまつて、何だか氣がへんになりさうですの。ねえ、アレクセイさん、わたしはね、もう今まで二度、氣がへんになつて、療治してもらつたことがありますのよ。それでは、リーズのところへいらつして、いつもなされるやうにしてあの子を悦ばしてやつて下さいませ。リーズや。」と夫人は戸口の方へ寄つて行きながらかう叫んだ。「さあお前があんな失禮なことを申し上げたあのお方をね、アレクセイさんを、

お連れ申して來ましたよ。だけどちつとも怒つてはいらつしやらないんだから安心しておいでな。いいえ、かへつてお前がそんなことを氣にしてゐるのを、不思議に思つていらつしやるくらゐよ。」

「Merci, maman 有難うお母さん おはいいり下さいな、アレクセイさん。」

アリオシヤは入つて行つた。リーズはなんだか極り悪さうに見てゐたが、不意にばつと顔を赧くした。彼女は何かを恥ぢてゐるやうであつた、いつもさういふ時の辯として彼女は、ひどく早口に、それとは關係のない他のことを話しはじめた。まるで、今のところでは話してゐるそのことより他には、興味を持つてゐないかのやうであつた。

「アレクセイ・フォードロキツチさん、お母さんつたらねえ、何を思ひ出したのか、二百留のことをすつかりわたしに聞かしてくれましたの。それからあなたがあの貧乏な士官さんのところへお使ひにいらつしたことや、その將校が侮辱を受けたといふ怖ろしい話も、わたしのこらす聞きましたわ。お母さんの話はひどくごたごたしてましたけれど、……だつて、お母さんは先ばかり急ぐんですもの……でもわたし聞いてゐるうちにすつかり泣いちやつたわ。どうだつたの、あなたそのお金をその方へお渡しなすつて、そしてその氣の毒な士官さんの方、いまだんな風にしてて？」

「實はね、金は渡さなかつたのです。話すとき長くなりますがね。」とアリオシヤは答へたものの、かれもまた金を渡さなかつたのがやはり何よりも氣にかかつてゐるらしかつた。またリーズの方でも、彼があらぬ方ばかりを見ながら、直接には興味のない世間話をしようと努めてゐる様子が、はつきり分かつた。



アリョーシャは卓子について、話しを始めた。しかし、話し始めるや否や、全くどぎまぎするのをやめてしまつて、今度はリーズに心をひかれた。彼はまださつきのはげしい、並々ならぬ印象と、強い感情に支配されてゐたので、うまく詳しく物語ることができた。

彼は昔も、モスクワで、リーズが子供の頃、リーズのところへ行くのが大好きで、どんなことが起こつたとか、何を讀んだとか、子供の時分の思ひ出などを話すのを好んだ。どうかすると、一しよに空想して、またまつた小説を二人で作つたりしたものであるが、それはたいいてい、愉快な、可笑しな話であつた。いま二人は、二年以前のモスクワ時代へ急に歸つたかのやうな感じがした。リーズはかれの話をきいて可成りに感激させられた。アリョーシャはあたたかい氣持で、イリョーシャの風貌を物語ることにできた。かれがあの不幸な人がお金を踏みつけたときの場面を、あますところなく話し終つたとき、リーズは手を打つて、やむにやまれぬ心のままにかう叫んだ。

「してみると、あなたはお金をやらなかつたのね、さうして、その人をそのまま逃がしてしまつたのね！ まあ、あなたはその人の後を追つかけてつかまへるのが本當だつたわ。」

「いいえ、リーズさん、僕が追つかけなかつた方がよかつたんですよ。」といつて、アリョーシャは椅子から立ち上がり、心配さうに部屋の中を往き來した。

「どうしてですか、何故その方がいいんですか？ 今その人たちは食べるものもなくつて、死にかけてゐるぢやないの？」

「そんなことはありませんよ。だつて、その二百留は、やはりあの人たちの手に入るんですからね。」

あの人は明日にたれば全部うけ取つてくれますよ。きつと明日は受け取つてくれますよ。」物思ひにふけて歩きながらアリョーシャはいひ出した。「ねえ、リーズさん、」ふと、彼は彼女の前に立ちどまつてつづけた。「僕はあのとき失敗をやつたのです。でも、失敗したのが、かへつて好都合になりましたよ。」

「どんな失敗ですか？ どうして好都合でしたの？」

「それはねえ、あの人は臆病な、氣の弱いひとなんですからね。あの人は苦勞もして、大へん氣だてのいい人なんです。僕は今どういふわけで急にあの人が憤慨して、金を踏みにつつたのか知らんと、いろいろ考へて見ましたけれど、それはつまり最後の一瞬まで、金を踏みにつつたりしようとは、思つてゐなかつたからです。それで今になつて見ると、あの人はそのときいろんなことに腹を立ててゐたんじゃないかと思ひます。……しかし……あの人の立場になつてみたら、さうするよりほかに仕方がなかつたのかもしれないね……第一に、あの人はわたしの眼の前で、あまり金のことを喜んで見せた上に、それを隠さうとしなかつたので、腹を立てたのです。たとひ、喜んだとしても、それほどぢやなく、そんな素振りを見せず、ほかの者と同じやうに氣どつた眞似をして、顔をしかめながら受け取つたのですから、それがいまいまいしくもあつたのです。ああ、リーズさん、あの人は正直な方ですよ。こんな場合、やつかいなのは實にこのことなんですよ！ あの人は話してゐる間ぢゆう、弱々しい力のない聲をして、おまけに恐ろしい早口なんです。そしてしじゆう妙にひひひと笑つたり、泣いたりしてたんです。」



よ……本當にあの人は泣いてたんです、それほど嬉しがつてゐたのです。……娘たちのことも話しました……ほかの町で周旋してもらへるとかいふ勤め口のこと話しました……さうして殆んどすっかり胸のなかを僕にさらけ出して見せると、今度は、その胸の中を展げて見せたことが、急にきまりわるくなつて來たのです。それで、直ぐに僕が憎らしくてたまらなくなつたのです。つまり、あの人はひどく恥づかしがりやの貧乏人の仲間なんです。ところで腹をたてたおもしろい理由は、あの人があまり早くから僕を友だちあつかひにして、あまり早くから僕に氣をゆるしたからです。初め、さかんに僕に食つてかかつて、脅してゐたと思つたら、金を見るや否や、僕を抱きしめようとするぢやありませんか。何故つて、あの人は僕を抱きしめて兩手でさはつたりしてたんですからね。そんな具合だつたものですから、きつと自分の屈辱を感じたにちがひありません。ところが、ちやうどそのとき、僕が失敗をやつたのです。それもとても大へんなのをね。僕はいきなりかう言つてやりましたよ。若しもほかの町に行く費用が足りなかつたら、まだその上に貰へるし、僕だつて自分の金のなかからお好きなだけさし上げますからね……すると、これが急にあの人の胸にこたへたのです。なぜお前までが俺を助けに飛び出すのかといふわけですね。ねえ、リーズさん、見下げられてゐる人間には、みんなに恩人のやうな顔をされるのを見るのがとても辛いことなんですよ……僕はこんな話を聞きましたよ。長老が僕にきかしてくれました。どういつていいか分からないけど、僕は自分でよく見受けました。それに自分でもよくその氣持がわかりますよ。ところで、何よりもいけないのは最後の瞬間まで、紙幣を踏みじらうなどは、夢にも思つてなかつたにしても、やはり豫感してゐたらしいことです。これはもう間違ひありません。なぜつて、

あの人の喜び方があまり烈しかつたので、あの人はそんなことを豫感したのです。……それはたとひ、みんないやらしいことであつたにしろ、やはり好都合に行つたのです。僕のつもりではこの上もなく都合よく行つたとさへ思つてゐますよ……」

「どうしてですの、どうしてこの上ないほど都合よく行つたんですの？」リーズは非常に驚ろいたやうな眼つきでアリオーシャを見つめながら、叫んだ。

「そのわけはね、リーズさん、あの人がたとひ金を踏みじらないで持つて歸つたとしても、家へ歸つて一時間もしたらきつと自分が辱しめをうけたと思つて泣くでせう、必らずさうなるにちがひない。さうして泣いた擧句の果て、翌る日の明けがた頃には、早速僕のところへやつて來て、——さつきと同じやうにあの紙幣を投げつけて、踏みじつたかも知れません。でもあの人は今、『自分を殺した』といふ氣持でゐながら、とにかく非常に勝ち誇つた氣持で、意氣揚々と引き上げていつたのです。ですから明日、この二百留を持つて行つて、無理に受け取らせることくらゐ樂なことはありませんよ。だつて、もうあの人は金を投げつけて、踏みじつて、立派に自分の潔白を證明したんですし、……それに金を踏みじるとき、まさか僕が明日もう一ど持つて行くなどは、夢にも考へなかつたことでせうからね。ところが、あの人に見ればこの金は大へん必要な金なんです。よしまた、今非常な誇を感じてゐるとしても、一面自分がどれだけの助力を失つたかといふこともまた、今考へずにはをられますまい。夜などはますます強くそのことを考へて、夢にまで見るに相違ありません。そして明日の朝になつたら、さつそく僕のところへやつて來て、詭言でもしたい氣持になるでせう。丁度そこへ僕が入つて行くので



す。そして『あなたは誇の高い人です、もうあなたは御自分の潔白なことを證明なさいました。さあ、もう取つていただけませう。わたしたちの悪かつたことはお赦し下さい。』といつて持ちかけたら、必らずうけ取るに違ひありません！」

アリョーシャは『必らずうけ取るに違ひありません！』といふとき、もうまるで夢中になつてゐた。リーズは思はず手を叩いた。

「ええ、全くだわ、わたし今急にすつかり分かつてきてよ！ アリョーシャ、どうしてあなたはそんなに何でも知つてらつしやるんでせうねえ？ お若いのに、よく、人の心の中が何でもお分かりになるのねえ……わたしにはとてもそんなことを考へつけませんわ……」

「ところで今、何より大事なことは、たとひ僕たちから金をうけ取つても、僕たちと對等の位置に立つてゐるといふ自信を、あの人に吹き込むことなんです。」相も變らず夢中になつて、アリョーシャは言葉をつづけた。「いや、對等ではない。むしろより高い地位にゐると思はせるのです……」

「『より高い地位』ですつて、うまいわねえ、アレクセイさん。でも、それからどうなんですの、話して頂戴！」

「いや、より高い地位……といふのは少し僕の言ひ方がまづかつた……しかし、そんなことは何でもありません、なぜつて……」

「ええ、そんなこと無論、何でもありませんわ、何でもありませんわ！ 御免なさい、アリョーシャ、後生だから……あのね、わたし今まであなたを尊敬してゐなかつたわよ……いいえ、してはゐるんだけど

れど、それほどでもなかつたの、だけど、だけど今は一だん高く尊敬しますわ……あら、怒らないでね、わたしちよつと戯談を言つただけよ。」と彼女は烈しく情をこめて、すぐ自分で自分の言葉を抑へた。「わたし、こんなをかしい小娘なの。だけどあなたは、本當にあなたは！ ねえ、アレクセイさん、わたしたちの考へには、いえ、つまり、あなたの考へには……いいわ、いつそわたしたちのといふことにしますわ、……あの不仕合せな人を卑しめたやうなところはないかしら……だつて、あの人の心を高いところから見下ろすやうにして、いろいろ解剖したんぢやなくつて？ え？ 今あの人があつとお金を受け取るにちがひないと、決めてしまつたぢやないの、え？」

「いいえ、リーズさん、少しも見下げてなんかありませんよ。」すでにこの質問あるを豫期してゐたものの如く、きつぱりした調子で、アリョーシャは答へた。「僕はここへ来る途中、そのことについてはもう考へておきました。まあ、考へて御らんない、この場合、どうして見下げたところなんかあり得るでせう。僕らだつてあの人と同じ人間ぢやありませんか。世間の人はみんなあの人と同じ人間ぢやありませんか。ええ、僕たちだつてあの人と同じことです。決して優れてはゐません。たとひ假りに優れてゐても、あの人の境遇に立つたら、あの人と同じやうになつてしまひます。ところがあの人のは決して浅薄ではない、かへつて非常に優しいところがあります……いいえ、リーズさん、あの人を見下げるなんてことはちつともありません！ 實はね、リーズさん、長老が一度仰つしやつたことがあります——人間てものは子供のやうに、しじゆう氣をつけて世話をしてやる必要がある。またある者は、病院に寝てゐる患者のやうに看護してやる必要さへあるつて……」



「まあ、アレクセイさん、偉いわね、病人にしてやるやうにして、わたしたちは人を見てあげませうね！」

「さうです、見てあげませう、リーズさん、僕はいつでも喜んで見てあげますよ。しかし、僕は未だ本當に準備ができてない気がしてゐます。時とすると、ひどく気が短かいし、時とすると物を見る眼がないんですからね、だが、あなたは別です。」

「あら、そんなこと本當にしくつてよ！アレクセイさん、わたし何て幸福なんでせう！」

「さういつて下さるので、僕も大へん嬉しく思ひますよ、リーズさん。」

「アレクセイさん、あなたは何といふ立派な方でせうね、だけど、どうかするとまるで術學者のやうだわ……でもよく見ると、決して術學者ぢやないのね。戸口を見て来て下さらないこと、……そつと開けて見て頂戴、お母さんが立聞きしてやしなくつて？」神經的な慌てた調子で、だしぬけにリーズは囁やいた。

アリオーシャは立つて戸を開けて見た。そして誰も立聞きしてはゐないと報告した。

「しらつしやいな、アレクセイさん。」次第に顔を赧らめながらリーズは言葉をつづけた。「お手を貸して頂戴、ありがたう。あのね、わたしあなたに大へんなことを白狀しなければならぬのよ。昨日の手紙は冗談ぢやなくつて、わたし眞面目に書いたのよ……」

と、彼女は片手で眼をかくした。白狀するのが恥づかしかつたのであらう。不意に、彼女はアリオーシャの手をとつて、あわてて、三たび接吻した。

「ああ、リーズさん、よくしてくれましたね。」と彼は嬉しさに叫んだ。「僕だつてあの御手紙が眞面目だつてことはよく知つてゐたのですよ。」

「御承知だつたのですつて、まあ本當に！」と彼女は自分の口から男の手を離しはしたが、やつぱり放してしまはうとはしないで、ひどく赧い顔をしたが、愉しげなかな笑ひ聲を立てるのであつた。「わたしが手を接吻してあげれば、『よくした』なんて。」

けれど、彼女の咎めだては不公平であつた。なぜといつて、アリオーシャもやはり、非常に心をとりみだしてゐたからである。

「僕はいつだつて、あなたのお氣に入りたいと思つてるんですよ、だが、どんなにしていいか分からないもんだから。」彼もまた顔を赧らめながら、あわてて呟やいた。

「アリオーシャ、あなたみたいな冷淡な、酷い方はありませんわ。さうぢやなくつて！勝手にわたしを自分のお嫁さんに決めて、安心してるんですよ！あなたはわたしがあの手紙を眞面目に書いたものと、信じきつてらつしやるんでせう。どうしたといふことでせうね！だつてあんまり勝手ぢやなくて、——ええ、さうよ！」

「一たい僕が信じてたのは悪いことなんでせうか？」と不意にアリオーシャは笑ひ出した。

「嘘よ、アリオーシャ、却つていいことだわ。」とリーズは仕合せらしい眼つきで優しく相手を眺めた。アリオーシャはやはり自分の手のなかに、彼女の手を取つたまま、じつと立つてゐたが、いきなり屈みかかつてその唇の眞んなかへ接吻した。



「どうなさつたといふの？ いったい、あなたどうなすつたの？」とリーズは叫んだ。  
アリオーシャはすつかりまごついてしまった。

「もし間違つてゐたら御免なさい……ひよつとしたら、僕のしたこと、ひどく馬鹿げたことだつたかも知れませんか……あなたが僕を冷めたいなどと仰つしやるもんだから、僕は手接吻してしまつたんです……しかし實際、妙な具合になつてしまひましたね……」

リーズはいきなりふき出して、両手で顔をかくしてしまつた。

「おまけにそんな着物で……」といふ聲が笑の間から洩れて聞こえた。

が、急に彼女は笑ふのをやめて、すつかり眞面目な、といふよりはむしろいかつい顔つきになつて、「ねえ、アリオーシャ、わたしたちは接吻はまだまだ控へなくちやならないわ。だつて、まだそんなことしてはいけないんですもの。わたしたちはまだまだ長いこと待たなくちやなりませんわ。」と彼女は不意にかう言つてくくりをつけた。「それよりわたしの訊きたかつたのはね、どういふわけであんなこんな馬鹿を——病身なばか娘をお選みなすつたの？ あなたみたいな賢い、考へ深い、よく氣のつく方が、どうしてわたしなんかを……ああ、アリオーシャ、わたし本當に嬉しいわ。だつて、あたしあなたに愛していただくだけの値うち一つもないんですもの！」

「お待ちなさい、リーズさん、僕は二三日のうちに斷然お寺を出ます。一たん世間へ出た以上、結婚しなくちやなりません、それは自分でよく分かつてゐます。それに長老もさうしると仰言るのです。ところで僕は、あなた以上の妻を娶ることもできなければ、またあなたよりほかには、僕を選んでくれる

人もありません。僕はこのことをもうよく考へてみました。先づ、あなたは僕を小さい時分から知つてゐる。次には、あなたは僕の持つてゐない多くの能力を持つてゐる。あなたの心は僕の心より快活です。第一、あなたは僕より遙かに無垢ですからね。僕はもういろんなものに觸れました。いろんなものに……だつて、僕だつてやはりカラマゾフなんだから、あなたにはそれが分かりませんか！ あなたが笑つたり、ふざけたりするのが何でせう……僕のことにしてもね……いや、かへつて笑つて下さい、ふざけて下さい、僕はその方が嬉しいくらいですよ……あなたは表面こそ小さな女の子のやうに笑つてゐられるが、心のなかには殉教者の考へをもつてゐられるのだからね……」

「殉教者のやうですつて？ それはどういふわけ？」

「それはね、リーズさん、さつきあなたはこんなことを訊きましたね——僕たちがあの不仕合せな人の心をあんな風に解剖するのは、つまりあの人を卑しめることになりはしないかつてね——この質問が殉教者ののです……僕にはどうもうまく言ひ現はせませんが、こんな質問の浮かんで來る人は、自分で苦しむことのできる人です。あなたは安樂椅子に坐つてゐるうちに、いろんなことを考へ抜いたんですね……」

「アリオーシャ、手を貸して頂戴、どうしてそんなに引つ込めるの？」嬉しさのあまり、力が抜けてしまつたかのやうな弱々しい聲で、リーズはいつた。「でも、アリオーシャ、あなたはお寺を出たら、どんなものを着るおつもり、どんな着物を？ 笑つちやいや、怒らないでね、わたしにとつては、このこと、それはそれは大事なことなんですもの。」



「僕着物のことまで考へなかつたが、あなたの好きなのを着ますよ。」

「わたしはね、鼠がかつた青いビロードの背廣に、白い縮入のチョッキを着て、鼠色をした柔い毛の帽子を被つて欲しいのよ……ところで、さつきわたしがあなたは嫌ひだ、昨日の手紙は嘘だといつたでせう、あのことあなたは本當にしたの？」

「いいえ、本當にはしませんでした。」

「ああ、何て厭な人だらう、どうしてもそのくせが直らないのねえ！」

「ねえ、僕は知つてゐたんですよ……あなたが僕を……愛してらつしやるらしいことを、……だが……あなたが嫌ひだと仰つしやるのを、わざと本當にしたやうな振りをしたんです。だつて、その方があなたには、都合がいいんでせうからね……」

「あら、そんなこと悪いことだわ！ 悪くもあるし、また一ばんいいことでもあるのよ、アリオージャ。わたしあなたが好きでならないの。さつきあなたがここへいらつしやつたとき、實は、判じ物をしてたのよ。わたしが昨日の手紙を返して下さいといつて、もしあなたが平氣でそれを出してお渡しになつたら（あなたとしてはそれは全くありさうなことなんですもの）、つまり、あなたはわたしを愛してもゐなければ、何とも思つてゐないことになる。つまり、あなたは馬鹿なつまらない小僧つ子で……そしてわたしの一生は滅びてしまふと思つたの——ところが、あなたは手紙を庵室へ置いてらしたので、わたしすつかりせいせいのよ、だつて、あなたは返してくれと言はれるのを感じて、わたしに渡さないやうに庵室へ置いてらしたんでせう？ ねえ、さうぢやない？」

「おお、ところがさうでないんです、リーズさん。だつて、手紙は今ちやんと持つてるんです、さつきだつてやはり持つてたんです。ほら、このかくしに、ね。」

アリオージャは笑ひながら手紙を取り出して、遠くの方から彼女に見せた。

「但しあなたには渡しやしないから、そこから御らん。」

「え？ ぢや、あなたはさつき嘘をついたのね。坊さんのくせに嘘をついたのね、あなたは！」

「或ひはさうかも知れませんが」とアリオージャは笑つて、「あなたに手紙を渡すまいと思つて、嘘をついたんです。僕にとつて、これは非常に大切なものなんですからね、」不意につよい情をこめてかう言ひ足すと、彼はまた顔を赧くした。「これは一生涯だれにも渡しやしませんよ！」

リーズはうつとりとして、彼を見つめてゐるのであつた。

「アリオージャ。」と彼女はふたたび囁いた。「ちよつと戸口を覗いて見て頂戴、お母さんが立聞きしてやしなくつて？」

「よろしい、僕見てあげませう。しかし、見たりしない方がよくはないのぢやないかしら、なぜそんな卑しいことでお母さんを疑ふのです！」

「なぜ卑しいことなの？ どんな卑しいこと？ 娘のことを心配して立聞きするのはお母さんの権利だわ、ちつとも卑しいことぢやなくつてよ。」とリーズは眞つ赧になつた。「前もつておことわりして置きますわ、アレクセイさん、わたしが自分でおつ母さんになつて、わたしのやうな娘を持つたとしたら、わたしはきつと娘の話を立聞きしてやるわ。」



「まさかねえ、リーズさん？ でも、それは間違つてゐますよ。」

「まさか、どうしませう！ 何も卑しいことなんかありませんわ！ これが世間なみのお話しを立聞きする人につたら、それや卑しいことに相違ないでせうが、現在うみの娘が若い男と一間にとちこもるなんて……ねえ、アリオージャ、よござんすか、わたしは結婚したら早速、あなただつて、こつそり監督してあげることよ。そればかりか、あなたの手紙をみんな開封して、すつかり読んでしまふわよ……前もつて御承知を願つておくわね……」

「勿論、さうしたいのならしても結構……」とアリオージャは呟やくやうにいつた。「だが、いいことぢやありませんね……」

「まあ、何といふ見下げやうでせう！ アリオージャ、後生だから、のつけから喧嘩なんかするのよしませう、——わたしいつそ本當のことを言つちまふわ、もちろん、立聞きするなんてよくないことだわ、勿論、わたしが間違つてゐて、あなたの仰つしやるのが本當よ。だけど、わたしやつぱり立聞きしますわ。」

「ぢやあ、なさいとも。だが、僕には何もそんな後ろ暗いことがありませんからね。」とアリオージャは笑ひ出した。

「アリオージャ、あなたはわたしに従ふつもりなの？ そんなことも前にちやんと決めておかないぢやならないわ。」

「僕は、悦んでさうしますよ。だけど、根本の問題は別ですよ。根本の問題については、もしあなた

が僕に一致しなくつても、僕は義務の命ずる通りに行ふから。」

「それはさうなくちやならないわ。ところでね、わたしはその反対の根本の問題についても、あなたに服従するのはもちろんだし、萬事につけてあなたに譲歩するつもりでゐますわ。このことは、今あなたに誓つてもいいわ——ええ、萬事につけて、一生涯。」とリーズは熱情をこめて叫んだ。「わたしそれを幸福に思ふわ、幸福に思ふわ！ そればかりでなく、わたし誓つていふわ、決してあなたの話を立てきたんかしません、一度だつてそんなことをしませんわ。あなたの手紙も一通だつて読みやしません。だつて、あなたがどこまでも正しくていらつしやるのに、わたしはさうでないですもの。もつとも、わたしはひどく立聞きしたくてたまらないんですが（それはわたしにも分かつてゐます）、でもやはりしませんわ。だつて、それが卑しいことだつてあなたは仰つしやるんでせう。今、あなたはいはばわたしの神さまみたいな人よ。……ところで、アレクセイさん、いつたい、あなたはどうしてこの二三日——昨日も今日も浮かぬ顔をしてらつしやるの。いろんな心配があなたにおありになることは知つてますけれど、そのほかに何か特別な悲しみがあるやうにも見えてよ——ことによつたら、秘密な悲しみかも知れないわ、ね？」

「さうです、リーズさん、秘密な悲しみです、」アリオージャは沈んだ調子でいつた。「それに気がつかれたところを見ると、あなたはやはり僕を愛してゐて下さるんですね。」

「一たいどんな悲しみなの？ 何か心配してゐるの？ 話してもよくつて？」とリーズは物怖じるやうな哀願の調子でかういつた。



「それは後でいひます、リーズさん。——後で、……」とアリョーシヤはこまつた。「それは未だ今は、はつきりしてないんです。僕自身もうまく話せないやうな気がするのです。」

「わたし分かつたわ、きつと、まだそのほかに、兄さんや、お父さんがあなたを苦しめなさるんでせう？」

「ええ、兄さんたちもね。」とアリョーシヤは愁はしさうにかういつた。

「わたしあなたの兄さんのイワン・フォードロキッチが嫌ひなの。」と不意にリーズはいつた。

アリョーシヤは少し驚いた様子でこの言葉に注意した。けれど、何の意味だかは分からなかつたのである。

「兄さんたちは自分で自分を滅ぼしてゐるんですよ、」彼は言葉をついだ。「お父さんだつてさうなのさ。さうしてほかの人までも、自分といつしよに巻き添へにしてゐるんです。先だつてパイーシイ主教も言はれたことなのだが、その中には大地のやうなカラマゾフの力が動いてゐるのです——それは大地のやうに兇暴な、きちのままの力なんです……この力の上に神の精霊が働いてゐるかどうか、それさへ分からないんです。ただ僕もカラマゾフだ、といふことだけが、分かつてゐるんです、……僕は坊さんなのかしら、果して坊さんだらうか？ リーズさん、僕は坊さんでせうかね！ あなたは今さきさういつたでせう、僕が坊さんだつて？」

「ええ、いつたわ。」

「ところがね、僕は神を信じてないかも知れないんですよ。」

「信じてないんですつて、あなたが？ まあ、あなた何を仰つしやるのよ？」リーズは低い聲で用心深さうにかういつた。だが、アリョーシヤはそれに答へなかつた。あまりに思ひがけない彼のこの言葉には、一種神秘的な、あまりにも主観的なあるものが感じられたのである。これは彼自身にさへはつきりとは分からないけれども、もう前から彼を苦しめてゐるものだといふことは何ら疑ふ餘地もなかつた。

「ところがね、今そのうへに、僕の大切な友だちが行つてしまはうとしてゐるのです。世界の第一人者がこの土を見棄てようとしてゐるのです。僕がどんなにこの人と精神的に結びついてゐるか、それがあなたに分かつて下さつたらなあ！ あなたに分かつて下さつたらなあ！ しかも、僕はいま、たつた一人でとり残されようとしてゐるのです……僕はあなたのところへ來ますとも、リーズさん。これからさき一しよにゐることにしようね……」

「ええ、一しよにね、一しよにね！ これから一生涯いつも一しよにゐませうね。ちよつと、わたしを接吻して下さらない、わたし許すわ。」

アリョーシヤは彼女を接吻した。

「さあ、もういらつしやい、では、御機嫌よう！ (と彼女は十字を切つた)。早く生きてゐられるうちにあの方のところに行つておあげなさい。わたしすっかりあなたを引き止めてしまつたわね。今わたしあの人とあなたのために祈りすることにするわ。アリョーシヤ、わたしたちは幸福でゐませうね？ ね、幸福になれますわね？」

「なれますとも、リーズさん。」



リーズの部屋を出たアリョーシヤは、母夫人のところへ寄らない方がよいと思つたので、夫人には別れの挨拶をしないで家を出ようとした。だが、戸を開けて階段の口へ出るや否や、どこから来たのか、富のホフラーコワ夫人が、眼の前に控へてゐた。最初の一事を聞くと同時に、アリョーシヤは彼女がわざとここで待ちうけてゐたのであることを悟つた。

「アレクセイさん、何て怖ろしいことでせうね。あれは子供らしい馬鹿げたことですわ、無意味なことですわ、あなたはつまらないことを空想なさらないだらうと思つて、わたしそれを當てにしてゐますのよ……馬鹿げたことですわ、馬鹿げたことですわ、全く馬鹿げたことですわ！」と夫人は彼に食つてかかつた。

「ただね、おねがひしておきます、あの人にはそんなこと言はないやうにして下さいよ。」とアリョーシヤはいつた。「でないよ、あの人はまた興奮しますよ、今あの人の體にとつて、それが一ばんいけないことなのですからね。」

「分別のある若いお方の、分別のある御意見、たしかに承知しましたわ。あなたが今あの子の言葉に同意なすつたのも、多分あの子の病的な體の具合に同情して下さつて、逆らひだしてあの子をいらさらせまいとのお心づかひからだつたのですか、さう解釋して宜しうございますね？」

「いいえ、それは違ひます、まるで違ひます。僕は眞面目にあの人と話したのですよ。」とアリョーシヤはきつぱり言つた。

「こんな場合、まじめな話なんてあり得ないことですわ、考へることもできないことですわ。何より

先づ、わたしこれからはもう決してあなたに家へ来ていただきたくないの。第二に、わたしはあの子を連れてこの町を立つてしまひますから、そのおつもりで。」

「どうしてまた。」とアリョーシヤはいつた。「だつてあの話はまだすつと先のことでせう、まだ一年半から待たなくちやならないんですからね。」

「そりやあね、アレクセイさん、それにちがひありませんけどね、その一年半の間に、あなたとリーズは幾千度となく、喧嘩したり別れたりなさるわ。けれど、わたしは言ひやうのないほど不仕合せな女なのですからね。みんな馬鹿々々しいことには相違ありませんが、それにしても、びつくりしてしまひました。今わたしはちやうど大詰の幕のファームソフ（「罪人の悲し」の人物）のやうでございます。そしてあなたがチャーツキイ、あの子がソファイヤの役割でございます。おまけにまあどうしたといふのでせうね、わたしがあなたをお待ち受けしようと思つて、わざわざこの階段のところへ来てみると、ちやうどそこへあの芝居の大切な場面が何から何までみんな階段のうへで起こつてるぢやありませんか。わたしはすつかり聞いてしまひましたが、本當にじつとその場に立つてゐられないくらゐでしたの。昨夜の怖ろしい熱病だつて、さつきのヒステリイだつて、もとはといへば、みんなここにあるのですもの！ 娘の戀は母親の死です。もう棺にでも入つてしまひさうですよ。ああ、それからもう一つ用事がありました。これが一ばん大事なことなんです。あの子が差し上げたとかいふ手紙、一たいどんなのですか、ちよつと見せて下さい、いまここで！」

「いいえ、そんな必要はありません、それよりカテリーナさんの容體はどうなんです、僕それが聞き



たくてたまらないのです。」

「やつぱりうなされながら寝てらつしやいます。まだお氣がつかれないんですよ。伯母さんたちは来てゐても、ただ吐息をついて、わたしに威張りちらすばかりなんですからね。ヘルツェンシュトゥベも来るには來ましたが、もうすつかりびつくりしてしまつて、却つて、あの方の方へ手當をしてあげたり、介抱したりするのにあたし見當がつかなくて困つたくらゐなんです。別の醫者でも迎へにやらうかと思つたくらゐですもの。たうとううちの馬車に乗せて歸してしまつた上に、突然あの手紙の一件でせう。もつとも、それは未だ、これから一年半たつてからのことでせうが、すべて偉大で神聖なもののみ名をもつて誓ひますから——今おかくれにならうとしてゐる長老様のお名をもつて誓ひますから、どうかその手紙をわたしに見せて下さい、母親に見せて下さい！もし何なら指でしつかりつまんで下さい！わたし自分の手に取らないで讀みますから。」

「いいえ、見せません。あの人が許しても僕は見せません。僕、明日また來ますから、もしお望みなら、そのときいろんなことを御相談させう、しかし今日はこれで失禮します！」

アリョーシャは階段から往來へ駆け出してしまつた。

II

ギタアをもてるスメルヂャコフ

事實、彼には餘裕がなかつたのである。更に、リーズにまだ暇乞ひをしてゐるとき、ふつと彼の脳裡には一つの考へが閃めいた。といふのは、何とか一つ巧い工夫をこらして、明らかに自分を避けてゐるらしい兄のドミトリーを、是が非でも今すぐに捜し出したいといふ願ひであつた。時刻ももう早くはななく、午後の二時を過ぎてゐた。アリョーシャは一生懸命に、あの修道院で今やこの世を去らうとしてゐる『偉人』のもとへ駆けつけようと思つてゐたのであるが、しかも一方、兄のドミトリーに逢ひたいといふ希ひがすべてのものを征服したのであつた。なぜなら、彼の心の中では、何かしら怖ろしい出来事が避け難い力をもつて、まさに起らうとしてゐるのだといふ信念が、刻一刻と大きくなつて來たからである。それにしても、その出来事とはどんなことなのか、またこれから兄を捜し出して何を言はうとしてゐるのか、恐らく自分にもはつきりとは分からなかつたであらう。『たとひ恩師が自分のゐないうちに亡くなられても、自分の力で救へるかも知れないものを救ひもせず、見て見ぬふりをして家路を急いだといふ自責の念のために、一生苦しむことはなくて済むであらう。つまり、さうするのが、結局、



恩師の言葉に副ふことになるのだ……』

彼の計畫は兄のドミトリイの不意を襲ふところにある——即ち、昨日のやうに例の垣根を乗り越えて庭に入りこみ、例の四阿（よあ）に先づ落ちつかうといふのであつた。『若しも兄がそこにゐなかつたとしたら、フォマにも家主のお婆さんにも言はずに、じつと隠れたまま、晩までも四阿で待つてゐることだ。兄が以前どほりグルーシエンカのやつて来るのを見張つてゐるとすれば、何れあの四阿に姿は現はすといふことは大いにありうべきことだ……』とはいふものの、アリオーシヤはそれほど詳しく自分の計畫を何かと考へることもなく、たとひ今日ぢゆうに修道院には歸れなくても構はぬから、さつそく實行にとりかからうと決心したのである……。

すべては何の故障もなく好都合にいつた。彼は昨日と殆んど同じ場所の垣根を越して、こつそり四阿まで辿りついた。彼が誰の眼にも觸れたくないと思つたのは、家主の老婆にしる、フォマにしる（若しもこの男が居合はせたなら）、或ひは兄の味方をして、その言ひつけをきくかも知れない、さうすれば自分を庭へ入れてくれないか、でなければ、兄を捜して訊ねまはつてゐることを直ぐに兄に知らされるといふ恐れがあるからであつた。四阿には誰もゐなかつた。アリオーシヤは昨日と同じ席に腰をおろして待ちにかかつた。あらためて四阿を見廻したが、なぜかしら昨日よりはすつと古ぼけたものに見える。怖ろしくぼろ家のやうに思はれた。尤も、天気は昨日と同じやうに、澄み渡つてゐた。緑いろの卓子の上には、前の日に杯から掬（く）れたコニャクの跡らしい、まるい形がついてゐた。いつも人を待つて退屈な時に経験する、何の役にも立たない、例へば自分はここへ入つて来て、何故ほかの場所へ坐らずに昨日

とちやうど同じ席へ腰をおろしたのであらうなどといつたやうな下らない考へが、そつと彼の頭に忍びこむのである。遂に非常に佗びしい氣持になつて来た。それは不安な未知に招來される一種の佗びしさであつた。わづかに彼が座についてから十五分とも経たないうちに、不意にどこか非常に近いところで、ギターを弾く音が聞こえて来た。前からゐたのか、それともたつた今、来たばかりなのか、とにかくどこか二十歩以上とは隔たつてゐない筈の灌木のかけに誰かがゐる。アリオーシヤはふと思ひ出した——きのふ兄と別れて四阿を出る時、左手の前方にあたる灌木の間に、低い緑いろの古びた腰掛があるのを見た、といはうか、ちらりとそれが眼に入つたのであつた。きつとそのベンチに今すわつたに違ひない。だが一體それは誰だらう？ と、不意に一人の男らしい聲が、自分にギターで伴奏をしながら、甘つたるい裏聲で對句（かたじけなく）をうたひはじめた。

つきぬ力にひかされて

いとしき人を慕ひつつ

あはれみたまへ、ああ神よ

いとしき人と、このわれを

いとしき人と、このわれを

聲がとだえる。中音も野卑（やひ）なら、歌の節廻しも下品であつた。と、今度は別の女の聲が、何となくおどおどしてはゐるが、ひどく氣取つた調子で、甘つたるくかう言つた。

「パーヴェル・フォードルキツチさん、あなたはどうして長いこと宅へ来て下さらなかつたの？ き



つとわたしたちを卑んでいらつしやるんだわねえ。」

「いいえ、とんでもないことです。」と男の聲が丁寧ではあるが、あくまでその強い尊厳を保たうとするやうな調子で答へた。察するところ、男の方が上手で、女の方から機嫌をとつてゐるらしい。「男の方はどうもスメルチャコフらしい」とアリオーシャは考へた。「少くとも、聲がよく似てゐる。女の方はきつとこの家の娘に相違ない。モスクワから歸つて来て、長い裳裾のついた著物を著て、マルファのところへスロープを貰ひに来る例のあの娘らしい……」

「わたし、詩ならどんなのでも大好きよ、うまく出来てさへゐれば……」と女の聲が話を續けた。「どうして續きを歌はないの？」

男の聲がまた歌ひだした。

世にたくひなきよきひとよ、

すこさせたまへ、すこやかに、

みめぐみたまへ、ああ神よ！

いとしきひとと、このわれを、

いとしきひとと、このわれを、

いとしきひとと、このわれを、

「前のときの方がよかつたわね。」と女の聲がいつた、「あの時はあなた、『いとしきひとよ、すこやかに』つて歌つたでせう。あの方が優しくつていいわ。今日はきつとお忘れになつたのね。」

「詩なんて馬鹿々々しいもんでさあ。」とスメルチャコフは吐き出すやうに言つた。

「あら、そんなことないわ、わたし、詩が大好きなのよ。」

「詩を作つたりするなんて、全く馬鹿げきつたこつてすよ。まあ、考へて御覽なさい、一體全體、韻を踏んで話をする人が世の中にありますかね？ 又たとひ政府のいひつけであらうと、韻を踏んで話をすることにでもなつたら、われわれは言ひたいと思ふことも満足には言へやしませんからねえ。詩なんて大事なものぢやありませんよ、マリヤさん。」

「何ごとによらず、どうしてあなたはそんなに賢くていらつしやるんでせうね？ ほんとにどうして何もかもよく御存じでいらつしやるんでせう？」女の聲はいよいよ甘つたれた調子になつて來た。

「小さい時分からあんな貧乏籤さへ引きあてなかつたら、僕はまだまだ色んなことができた筈なんですよ。もつともつと色んなことを知つてゐた筈ですよ！ 僕のことをスメルチャーシチャヤの腹から生れた父なし兒だから根性が曲つた悪黨だなんかつていふ奴には決闘を申し込んで、ピストルでどんとやつつけてやりたいですよ。モスクワでも面と向かつて、そんな風に當てこすりを言はれたことがあります。それもグリゴリー・ワシーリエキツチのお蔭で、この町から出て行つた噂なんですよ。グリゴリー・ワシーリエキツチは僕が自分の誕生を呪ふからといつて『お前はあの女の子宮を破つたんだ』なんて咎めるんです。まあ、子宮は子宮でいいとして、僕はこんな世の中へなんか出て來ずに済むものなら、まだ胎の中にあるうちに自殺してしまひたかつたらゐですよ。よく市場なんかで不躰千萬にも、あの女は雀の巢のやうな頭をして歩いてゐただの、脊がニアルシンとちよつびりしかなかつたなんかと言ふ



し、あなたのお母さんなども、やつぱりづけづけと話されるぢやありませんか。いつたい何のためにちよつぱりなんていふのです？ 普通に話すつもり、すこしと言つたらよさうなもんぢやありませんか。きつと哀れつぽく言ひたいからでせうが、それはいはば百姓の涙です、百姓の感情です。いつたい露西亞の百姓が教育のある人間に對して何か感情を持つことができますか？ 奴らは無教育なために感情を持つことが出来ないんです。僕はまだほんの子供の時分から、この『ちよつぱり』といふのを聞く、まるで壁にでもがんとぶつかつたやうな氣がしたものです。露西亞全體を僕は憎みますよ、マリヤ・コンドゥラーチエヴナさん。」

「でも、あなたが陸軍の見習士官か、若い驃騎兵でもあつて御覽なさい、そんな言ひ方をなさりはしないから。きつとサーベルを抜いて露西亞全體をお守りなさることよ。」

「僕はね、マリヤ・コンドゥラーチエヴナさん、陸軍の驃騎兵になんぞなりたいたいと思はないばかりか、あべこべに兵隊なんでものがすつかり消えてなくなればいいと思ひますよ。」

「ぢや、敵がやつて來たとき、誰が國を護りますの？」

「そんな必要は少しもありませんよ。十二年に、佛蘭西の皇帝ナポレオン一世が（今の陛下のお父さんですがね）、露西亞へ大軍を率ゐて侵入して來ましたが、あの時に佛蘭西人たちがこの國をすつかり征服してしまへばよかつたんですよ。あの利口な國民がこの上なしにのろまな國民を征服して、合併してしまつてもゐたら、國の様子がらりと變つてゐたでせうにねえ。」

「ぢや、外國の人は露西亞人より豪いと仰つしやるんですか？ わたしは露西亞のハイカラな人の中

には、どんな若い英吉利人を三々八々束にして來ても、取りかへたくないと思ふやうな人がありますのよ。」と、マリヤは優しい聲で言つたが、さう言ひながら、懶い眼で男を眺めたのに違ひない。

「それあね、めいめい好き好きがありますからね。」

「それに、あなた御自身がまるで外國人のやうですわ。生れのいい外國人にそつくりよ。こんなこと言ふの、わたし、きまりが悪いだけだ。」

「よかつたら話しますがね、女好きなどところは露西亞人も外國人も似たりよつたりですよ。どちらも仕やうのない極道どもですよ。ただ外國の奴はエナメル靴をはいてるのに、露西亞の極道は乞食さうい臭ひをぶんぶんさせてゐながら、自分ではそれを少しも悪いと思はないところが違ふだけです。露西亞の人間は、ぶん殴らなければ駄目だ、昨日フォードル・パーヴロキッチの言はれたとおりですよ。尤もあの人も三人の息子たちと一緒に氣がふれてゐますがね。」

「だつて、あなたはイワン・フォードロキッチを尊敬するつて仰つしやつたぢやありませんか？」

「しかし、あの人も僕を穢ららしい下男のやうに扱ふのです。僕を謀叛でも起こしかねない人間だと思つてゐますがね、そこはあの人の思ひ違ひです。僕は懷に相當の金さへあれば、疾うにこんなところにゐはしないんです。ドミトリー・フォードロキッチなんか、身持からいつても、智恵からいつても、貧乏なことからいつても、どこの下男よりも劣つた人間で、何ひとつ出来もしないくせに、みんなから崇められてゐる。僕なんかは、よしんばただの料理人にしろ、うまくゆきさへすればモスクワのペトロフカあたりで、立派な珈琲兼料理店を開業することができます。なぜつて、僕には特別な料理法の心得



がありますが、それはモスクワでも外国人をのけたら誰ひとり出来る者はゐないんですからね。ところがドミトリー・フォードロキッチが素寒貧でありながら、しかも、一流の伯爵の息子に決闘を申し込んだとすれば、その若様は、のこのこ出かけて行くに相違ないんですよ。一體、あの男のどこが僕より豪いんでせう？ だつて僕よりは、比べものにならないほど馬鹿だからですよ。ほんとにどれだけ何の役にも立たないことに金を使ひ果したか分かつたものぢやない。」

「決闘つて、ほんとに面白いものでせうね。」といきなりマリヤが言つた。

「どうして？」

「とても怖ろしくつて、勇ましいからよ。とりわけ若い將校なんか、どこかの女の人のためにピストルを持つて射ちあふなんて、ほんとに堪らないわ。まるで繪のやうね。ああ、若しも、娘にも見せて貰へるものだつたら、わたしどんなにそれが見たいでせう。」

「それはね、自分の方が狙ふ時はいいでせうが、こつちの顔のまん中を狙はれる時には、それこそひどく氣持の悪い話でさあね。その場から逃げ出すくらゐが落ちですよ、マリヤさん。」

然るに、スメルチャコフは返事をするにも及ばぬといふやうに、暫らく黙つてゐたが、やがてまたギタアが鳴り出して、例の裏聲が最後の一聯を歌ひはじめた。

どんなに骨が折れようと

遠くへ行つて住みませう

楽しい暮らしをしたいもの

花の都に暮らしたい

もうもう悲しむこともない

さらに悲しむこともない

さらに悲しむ氣もないよ

折しも思ひがけないことがおこつた。アリョーシャがだしぬけにくさみをしたのである。ベンチの方の人聲はびたりとやんでしまつた。アリョーシャは立ちあがつて、その方へ歩み寄つた。男は果してスメルチャコフであつた。彼は晴著を著飾り、頭にはボマードをつけて、すこしく髪をうねらし、足にはエナメルの靴をはいてゐた。ギタアはベンチのうへに置いてあつた。女はやはりこの家の娘マリヤ・コンドウラーチエヅナで、ニアルシンほどもある装束のついた淡い水いろの著物を著てゐた。まだ若くて、顔だちのいい娘であるが、惜しいことには顔がすこし丸すぎる上に、ひどい雀斑であつた。

「ドミトリー兄さんはもう直き歸るの？」とアリョーシャは出来るだけ落ちついて訊ねた。

スメルチャコフはゆつくりとベンチから立ちあがつた。うづいてマリヤも席を立つた。

「ドミトリー・パーヴロキッチのことなんか、わたしが知つてゐる譯がないぢやありませんか。若しあの人の見張りでもしてゐたのなら格別ですけど！」と、靜かに一語々々を離して、ぞんざいな調子でスメルチャコフが答へた。

「いや、僕はただ知つてゐるかどうか、ちよつと訊いてみただけなんだよ。」と、アリョーシャは言ひ譯



をした。

「わたしはあの人の居どころなんかちつとも知りませんし、別に知らうとも思つてゐませんよ。」

「で、兄さんはたしかに、うちの出来事を何でもお前が見さんに知らせることになつてゐるつて僕に話したんだよ。それにアグラフェーナ・アレクサンドロヴナが來たら知らせるつて、約束したさうぢやないか。」

スメルチャコフは徐かに眼をあげて、ふてぶてしく相手を眺めた。

「しかし、あなたは今どうしてここへ入つておいでになりました。だつてね、門の戸は一時間ばかり前に、ちゃんと鍵をかけておいたんですよ。」と、彼はじろじろとアリョーシャを見つめながら訊ねた。

「僕は横町から編垣を越えて、いきなり四阿の方へ行つたんだ。どうぞだから、そのことで僕を咎めないで下さいね。」と彼はマリヤにむかつて言つた。「僕は少しでも早く兄を捕まへたかつたものだから。」

「あら、わたしなんかあなたがあなたに腹を立てる道理があるもんですか。」アリョーシャの謝罪にすつかり氣をよくしたマリヤが言葉尻を引きながら言つた。「それにドミトリイ・フョードロキッチもそんな風にして、よく四阿へいらつしやいますから、わたしたちがちつとも知らないでゐますのに、もうぢやんと四阿に坐つてらつしやるんですのよ。」

「僕はいま一生懸命に兄を捜してゐるところなんです。是非とも自分で會ふか、それとも兄が今どこにゐるかを教へていただきたいんです。實は兄にとつて非常に重大な用件があるものですから。」

「あの方わたしたちには何も仰つしやいませんわ。」とマリヤが舌たらずな調子で言つた。

「わたしはただほんの知合ひとしてここへ遊びに来るだけですが、」とスメルチャコフが新たに口を出した。「あの人はいつでもここで旦那のことをしつこく訊ねて、なまけ容赦もなくわたしを虐めなせる。お父さんのところはどん倉鹽梅だとか、誰が來たかとか、誰が歸つたかとか、何か他に知らしてくれることはないかと言ひましてね。二度ばかりは殺してしまふなんて脅がしなすつたくらゐですよ。」

「どうして殺すなんて？」とアリョーシャはびつくりした。

「それあ、あの人の氣性としてはその位のことは何でもありませんよ。昨日あなたも御覽になつたぢやありませんか。若しもわたしがあグラフェーナ・アレクサンドロヴナを邸へ通じて、御婦人がこちらで泊つて行かれるやうなことがあつたら、第一に貴様を生かしてはおかんど仰つしやつて。わたしはあの人が怖ろしくつてなりません。もうこれ以上怖ろしい思ひをしないやうにするには、警察へでも訴へるよりほか仕方がありません。ほんとに何をしでかしなせるやら知れたものぢやありませんからね。」

「この間もこの人に『白へ入れて搦殺すぞ』つて仰つしやいましたわ。」とマリヤが口を添へた。

「いや、そんな白へ入れてなんかといふのは、それはほんの口さきだけのことでせうよ。」とアリョーシャが言つた。「僕がいま兄に逢ふことが出来さへしたら、そのこともちよつと言つておくんですがねえ……」

「あなたにわたしがお知らせできる、たつた一つのことではですな」と、何かしら考へついたやうにスメルチャコフが不意にひ出した。



「わたしがここへ出入りするのには隣り同志の心安だてからです。別に出入りをして悪い譯もありませんからね。ところで、わたしは今日、夜の明けないうちにイワン・フォードロキッチのお使ひで、湖水街のあの人の家へ参りましたが、手紙はなくてただ口上だけで、一しよに食事がしたいから、廣場の料理屋までせひ来てくれとのことでした。わたしが参りましたのは八時ごろでしたが、ドミトリイ・フォードロキッチは家にいらつしやいませんでした。『ええ、いらつしたのですが、つい今しがたお出かけになりました』と宿の人たちが、この通りの文句で言ひましたが、どうやら打合せでもあるやうな口ぶりでしたよ。若しかしたら、丁度いま時分、その料理屋でイワン・フォードロキッチとさしむかひで坐つておゐるかも知れませんか。なぜつて、イワン・フォードロキッチが晝飯にお歸りにならなかつたもんですから、旦那は一時間ほど前ひとりで食事をすまして、いまに横になつて休んでいらつしやるんですからね。ですけども、是非お願ひしておきますが、わたしのことも、わたしのお話したことも、必らずあの人に言はないで下さいまし。でないと、わたしは理由もなく殺されてしましますからね。」

「イワン兄さんが今日ドミトリイを料理屋へ呼んだつて？」と、アリオーシヤは早口に問ひ返した。

「そのとほりですよ。」

「廣場の『都』だな？」

「たしかにあそこですよ。」

「それは大いにありさうなことだ。」とアリオーシヤはひどくわくわくしながら叫んだ。

「ありがたう、スメルチャコフ、それは大切な報せだ。これから直ぐに行つてみよう。」

「どうか仰つしやらないで下さいまし。」とスメルチャコフが後ろから念を押した。

「大丈夫だよ。僕はその店へ偶然ゆき合はしたやうな風にするから、安心しておいで。」

「あら、あなた、どこへいらつしやいますの？ 今わたし耳門を開けて差しあげますわ。」とマリヤが叫んだ。

「いや、こちらが近いですよ、また垣を越えてゆきます。」

この報せは非常にアリオーシヤの心を打つた。彼はまっ直ぐに料理店をさして急いだ。彼の服装で料理店に入るのには妙であつたが、階段のところから呼び出して貰ふといふ手もあつた。しかし、彼が料理店の傍へ近づいたばかりのとき、不意に一つの窓があいて、兄のイワンが窓から下を見おろしながら呼びかけた。

「アリオーシヤ、お前は今すぐここへ入つて来る譯に行かないかえ、どうだい？ さうしてくれると實にありがたいんだが。」

「ええ、いいの位ぢやありませんよ、でも、こんな服装で入つて行つてもいいかどうか、それが分からないだけです。」

「だつて、丁度いい鹽梅に僕は別室に陣取つてるんだ。かまはずに玄關から入つておいでよ、僕が今迎へに駆け出してゆくから……」

一分間の後、アリオーシヤは兄と並んで坐つてゐた。イワンは一人きりで食事をしてゐたのである。



兄弟相識る

尤も、イワンが陣取つてゐたのは別室ではなかつた。それはただ、窓のそばの、衝立で仕切つただけのところを過ぎなかつたが、それでも中に坐つてゐると、はたの人からは見えなかつた。その部屋は入口から取つときの部屋で、横の方の壁際にはスタンドがあり、ポイーがあちこちと絶えず動きまはつてゐた。お客といつては、退職の軍人らしい老人がただ一人、隅つこの方でお茶を飲んでゐるだけであつた。それに反して、他の部屋では、料理店につきもの騒々しい音——ポイーを呼ぶ叫び聲や、ビールを抜く音や、玉突のひびきが沸きたつてゐて、オルガンの唸り聲が聞こえてゐた。アリョーシヤはイワンがこの料理屋へ殆んど一度も来たことがないといふことも、概して彼が料理屋といふものを好かないといふこともよくよく知つてゐた。だから、イワンがここへ来た譯は、ただドミトリイに逢ふ約束のためであらうと考へた。ところが、兄ドミトリイの姿はそこになかつた。

「魚汁か何か誂へようかね。まさか、お前もお茶ばかりで生きてゐるわけでもあるまいからね。」と弟をつかまへたことに、ひどく満足したらしい様子でイワンが言つた。彼自身はもう食事を終つて茶を飲んで

ゐたのである。

「魚汁を下さい、その後でお茶もいただきませうよ、僕すつかりお腹が空いてゐるんです。」とアリョーシヤは愉快さうに答へた。

「櫻ん坊のジャムはどうかえ？　ここにあるんだよ。覚えてゐるかな、お前は小さい時分にボレーノフの家にゐて、櫻ん坊のジャムが大好きだつたちやないか？」

「そんなことをよく覚えてゐますね？　ジャムも下さいよ。僕は今でも好きなんです。」

イワンはポイーを呼んで魚汁と茶と櫻ん坊のジャムを注文した。

「何もかも僕は覚えてゐるよ、アリョーシヤ、僕はね、お前が十一の時までは覚えてゐる、そのとき僕は十五だつたんだ。十五と十一といふ年の違ひは、兄弟がどうしても仲よしになれない年頃なんだ。僕はお前が好きだつたかどうかさへ覚えてゐないんだ。モスクワへ出てから最初の何年かは、お前のことなんかでんで思ひ出しもしなかつたよ。その後お前自身がモスクワへやつて来た時だつて、たつた一度どこかで會つたきりだつたつけ、それにまた、僕はこちらへ来てもう四ヶ月にもなるけど、今まで一度もお前としんみり話したことがない。僕はあす立たうと思ふんでね、今ここに坐つてゐながら、不圖どうかしてこれに會へないかしら、しんみり別れがしたいものだと思つてゐると、そこへお前が通りかかるぢやないか。」

「それでは、兄さんはそんなに僕に會ひたかつたんですか？」

「とても。一度しつくりとお前と近づきになつて、また自分の腹の中をお前に知つて貰つて、それを



土産に別れたかつたんだ。僕の考へでは、別れる前に近づきになるのが一番いいやうだ。僕はこの三ヶ月の間お前がどんなに僕を見てゐたか、よく知つてるよ。お前の眼の中には何か絶え間のない期待、とてもいふやうなものがあつた。それがどうにも我慢ができなくて、そのために僕はお前に近づかなかつたんだ。ところが、たうとう終ひになつて、僕はお前を尊敬するやうになつた。奴は相當にしつかりしてるぞといふやうな気がして來たんだ。いいかい、いま僕は笑つてるけれど、言ふことは眞面目なんだよ。だつて、お前はしつかりした足つきで立つてるぢやないか？ 僕が好きなのは、さういふしつかりした人間なんだ。その立場が何であらうと、又その當人が、お前のやうな小僧つ子であつてもさ。で、しまひには何か期待するやうなお前の眼つきが、ちつともいやでなくなつた。いや、却つてその期待するやうな眼つきが好きになつたんだよ……お前もどういふわけか僕を好いてくれるやうだな、アリョージャ？」

「好きですとも、イワン。あなたのことをドミトリイ兄さんは、イワンの奴は慕だといつてるけれど、僕の方は、イワンは謎だといふんです。今でも兄さんは僕にとつて謎だけれど、しかし、やつと僕は何か兄さんの或るものを掴んだやうな気がするんです。それも、つい今朝からのことですよ。」

「一體、それは何だい？」とイワンが笑つた。

「怒つたりなんかしないでせうね？」とアリョーシャも笑ひだした。

「で？」

「つまり、兄さんだつても、やはりほかの二十四くらの青年と同じやうな青年だといふことです。」

つまり、同じやうに若々しくて、元氣のいい、可愛い坊つちやんなんです。いはば、まだ嘴の黄いろい青二才かも知れませんか！ どうです、大して氣にさはりもしないでせう？」

「どうしてどうして、それどころか却つて暗合に驚ろかされるよ！」イワンは愉快さうに熱中した調子で叫んだ。「お前は本當にしないだらうが、さつきあの女のところへ會つた後で、僕はそのことばかり心の中で考へてたんだ。つまり、僕が二十四歳の嘴の黄いろい青二才だつてことをさ。ところが、お前は僕の腹の中を見抜いたやうに、いきなりそのことから話し出すぢやないか。ここへ僕は坐つてるあひだ、どんなことを考へてたか、お前に分かるかえ？」——たとひ僕が人生に信念を失ひ、愛する女に失望し、物の秩序といふものを本當にすることができなくなつた擧句、すべてのものは秩序のない、呪はれた悪魔的な混沌だと確信して、人間の滅亡のあらゆる怖ろしさをもつて叩きつけられたとしても——やつぱり僕は生きてゆきたいよ、一旦この杯に口をつけた以上、それを征服しつくすまでは決して口を離しはしない！ しかし、三十にもなれば、たとひ飲み干してしまはなくても、きつと、杯を棄てて行つてしまふ。行くさきなどはどこだか分からないけれど、だが、三十の年までには僕の青春が一切のものを征服してしまふに違ひないんだ——生に對する一切の幻滅もあらゆる嫌惡の情も。心の中でよく僕は、自分の持つてゐる熱烈な、殆んど無作法といつてもいいほどの生活慾を征服し得るやうな絶望が一體この世の中にあるのかしら、と自問自答したものだ。そして結局、そんな絶望はないと決めてしまつたんだ。けれど、これもやはり三十までで、それから後のことは、もう自分でも望むところはないだらうと、そんな風な氣がするんだ。肺病やみのやうな鼻涙つたれの道學者先生は、かういつた生活慾



を何かと下劣なものやうにいふ、詩人なんて連中は殊にさうなんだ。この生活慾は性質からいふと幾分カラマゾフ的だね、それは事實だ。何れにしてもこの生に對する渴望はお前の心中にだつて潜んでゐるよ。必らず潜んでゐるよ。しかし、どうしてそれが下劣だといふんだ？ 求心力といふ奴はわが遊星上にはまだまだ澤山あるからな、アリョーシャ。生きたいよ。だから、僕はたとひ論理に逆つても生きるんだ。たとひ物の秩序を信じないとしても、僕にとつては春の芽を出したばかりの、ねばつこい若葉が尊いのだ。青い空が尊いのだ。時には全く何のためとも分らない、好きになる誰彼の人間が尊いんだ。そして今ではもう疾うにそれを信じようと思はなくなつてゐながら、しかも古い習慣から感情の上で尊重してゐる或る種の人間の功名心が尊いんだ。さ、お前の魚汁が来た、うんとやつてくれ、うまい魚汁だよ、なかなか料理がいいぞ。僕はね、アリョーシャ、歐羅巴へ行きたいのだ、ここからすぐ出かけるつもりだ。といつても、行くさきがただの墓場にすぎないことは、百も承知してゐる。だがその墓場は何よりも一番に貴い墓場といふことが肝腎なんだ！ そこには貴い人たちが眠つてゐる。その一人々々のうへに立つてゐる墓石は、昔日の熱烈な生活を物語つてゐる。自己の功績、自己の眞理、自己の戦ひ、自己の科學に對する燃ゆるが如き信念を物語つてゐる。僕はきつといきなり地べたへ身を投げ、その墓石に接吻をして、そのうへに泣き伏すだらうことを今からちやんと承知してゐるが、それと同時に、それが皆とうの昔からただの墓場にすぎず、それ以上の何物でもないことも眞底から確信してゐるんだ。それに僕が泣くのは絶望のためではなく、ただ自分の流した涙によつて幸福を感じるために他ならないんだ。つまり自分の感動に酔はうといふ譯だ。僕はねばつこい春の若葉や青い空を愛する

んだ。ここだよ！ 理智も論理もなく、ただ衷心から、眞底から愛するばかりなんだ。自分の若々しい力を愛するばかりなんだ……なあ、アリョーシャ、僕のこのナンセンスが分かってくれるかい、それとも分からないかい？」さう言つてイワンは急に笑ひ出した。

「分かりすぎるぐらゐですよ、兄さん。衷心から、眞底から愛したいつて、それはすばらしい言葉でしたね。僕もそんなに兄さんが生きたいと仰つしやるのが、とても嬉しいんですよ。」とアリョーシャは叫んだ、「人はすべて何よりもまだ地上で生を愛さなければならぬと思ひます。」

「生の意義以上に生そのものを愛するんだね？」

「斷然さうなくつちやありません。あなたの仰つしやるとほり論理より前にまづ愛するのです。是非とも論理より前にですよ。それでこそ初めて意義も分かつてきます。そのことはもう以前から僕の頭の中に浮かんでゐたんですよ。兄さん、あなたい事業の前半はもう成就もし、獲得もされました。今度はその後半のために努力しなければなりません。さうすればあなたは救はれますよ。」

「もうお前は救ひにかかつてゐるんだね。ところがね、僕は案外、滅亡に瀕してなんかゐないかも知れないよ。ところでお前のいはゆる後半といふのは一體なんだね？」

「つまり、あなたの死人たちを蘇生させる必要があるといふのです。多分、彼らは決して死んではゐないのかも知れませんか。さあ、お茶をいただきませう。僕はかうしてお話をするのが、とても嬉しいんですよ、イワン。」

「見たところ、お前は何かインスピレーションでも感じてゐるらしいな。僕はお前のやうな……新發



怒から、そんな Profession de foi (誓約) を聴くのが大好きなんだ。お前はしつかりした人間だね、アレクセイ、お前が修道院を出るついでにふのは本當かい？」

「本當です。長老さまが世の中へ僕をお送りになるのです。」

「ぢや、また世間へ會へるね。僕が三十そこそこになつて、そろそろ杯から口を離さうとする時分に、どこかで落ち合ふことがあるだらうよ。ところで親父は自分の杯から七十になるまで離れようとしならしい。いや、若しかすると、八十までもと空想してるのかも知れない。自分でもこれは非常に眞面目なことだと言つたつけ。尤も、ただの道化にすぎないがね。親父は自分の肉慾の上に立つて、大盤石でもふまへたやうな氣でゐるんだ……が、三十を過ぎたら、それより他には立つ足場がないだらうからね、全く……それにしても七十までは卑劣だ、三十までがまだしもだよ。何しろ、自分を欺きながらも『高潔の影』を保つことが出来るからね。けふドミトリーには會はなかつたかな？」

「ええ會ひませんでしたよ、ただスメルジャコフには會ひました。」と、アリョーシャは下男との邂逅を手短かに兄に話した。イワンは急に、ひどく氣がかりになつたらしく耳を傾け始め、何やかやと問ひ返しさへした。

「ただね、自分の話したことをドミトリー兄さんに言はないでくれつて頼みましたつけ。」と、アリョーシャは言ひ足した。

「イワンは苦い顔をして考へこんだ。」

「兄さんはスメルチャコフのことで苦い顔をするんですか？」とアリョーシャが訊いた。

「ああ、奴のことで。しかし、あんな奴のこと、どうでもいい。僕はドミトリーには本當に會ひたかつたが、今はもうその必要もない……」と、イワンは進まぬ調子でいつた。

「兄さんは本當にそんなに急に立つんですか？」

「ああ。」

「ぢや、ドミトリーやお父さんはどうなるんです？ あの騒ぎはどう片がつくんでせう？」と、アリ

ョーシャは不安さうに言ひ出した。

「またお前のお談義かい！ そのことが僕に何の關係があるんだ？ 僕が一體、ドミトリーの番人だとしてもいふのかい？」とイワンは苛々した聲で斷ち切るやうに言つたが、不意に妙な苦笑をうかべた。「弟殺しについてカインが神様に答へた言葉かえ？ え、今お前はそれを考へてるんだらう？ しかし、どうとも勝手にしろだ。僕は全くあの人たちの番人をしてゐる譯には行かないよ。仕事が片づいたから出かけようといふのさ。また、僕がドミトリーを妬いてるだの、三箇月のあひだ兄貴の美しい許嫁を横取りしようとしてゐたのだとは、まさかお前も考へてやしなかつたらうにな。ええ、眞平御免だぜ。僕には僕の仕事があつたんだ。その仕事が片づいたから出かけるのさ。さつき僕が仕事を片づけたのは、お前が現に證人ぢやないか。」

「それは、さつきあのカテリーナ・イワノフザナのところで……」

「さうさ、あのことだよ。一度できれいさつぱりと身を引いてしまつたよ。それが一體どうしたといふんだ？ ドミトリーに僕が何の關係があるんだ？ ドミトリーなんかの知つたことぢやないんだ。僕



はただ自分自身カテリーナ・イワーノヴナに用があつただけの話さ。それを、お前も知つての通り、ドミトリーが勝手に何か僕に申し合せでもしたやうな行動を取つたんだ。僕が兄貴に少しも頼みもしないのに、勝手に兄貴の方でいやに勿體ぶつて、あの女を僕に譲つて祝福したまでの話ぢやないか。全くお笑ひ草だよ。いやいや、アリョーシャ、お前には分かるまいけれど、僕は本當に今とてもせいせいした氣持なんだよ！ さつきもかうしてここに坐つて食事をしてゐるうちに、初めて自由になつた自分の時を祝ふために、すんでのこと、シャンパンを注文しようとしたくらゐなんだ。ちえつ、ほとんど半年もの間するすると引きずられてゐたが、急に一度で、全く一度ですつかり重荷がおりたよ。ほんとにその氣にさへなれば、こんなに造作なく片づけられようとは、昨日までは夢にも考へなかつたからね。」

「それは自分の戀についての話なんですか、イワン？」

「さう言ひたければ戀といつてもいいさ。なるほど僕はあのお嬢さんに、あの女學生に、すつかり惚れてたのさ。あの人と二人でかなり苦勞したもんだ。そしてあの人もずるぶん僕を苦しめたよ。いや本當にあの人に打ちこんでゐたんだ——それが急にすつかり清算がついてしまつた。さつき僕はいやに感激してしやべつたけれど、外へ出るなりからからと笑つちやつたよ——お前ほんたうにするかい、いや、これは文字どほりの話なんだよ。」

「今でも何だか愉快さうに話してますね。」と、實際にばかに愉快さうになつて來た兄の顔をじつと眺めながら、アリョーシャが口を出した。

「それに、僕があの人をちつとも愛してゐないなんてことが、僕に分かる筈はなかつたぢやないか、

へへ！ とところが、果してさうでないつてことが分かつたよ。あの方はひどく僕の氣に入つてたんだよ。さつき僕が演説めいたことを喋つた時でも、やつぱり氣に入つてたんだよ。そして實はね、今でもひどく氣に入つてゐるんだ。けれど、あの方の傍を離れてゆくのが、とてもせいせいするんだよ。お前は僕が馱法螺を吹いてゐるんだとも思ふかえ？」

「ううん、でも、事によつたらそれは戀ではなかつたのかも知れませんか。」

「アリョーシャ、」と、イワンは笑ひ出した、「戀の講釋なんか止せよ！ お前には少し變だよ。さつきも、さつきもさ、飛び出して口を入れたね、恐れ入るよ！ あ、忘れてた……あのお禮にお前を接吻しようと思つてたんだ……。だが、あの方はずるぶん僕を苦しめた！ 本當に破目の傍に坐つてたやうなもんだ。おお、僕があの人を愛してゐるつてことは、あの方も自分で承知してゐるのさ！ そして自分でも僕を愛してゐたので、決してドミトリーを愛してたのぢやない。」と、イワンは愉快さうに言ひ張るのであつた。「ドミトリーは破目さ。僕がさつきあの人に言つたことは、みんな間違ひのない眞理なんだ。しかし、ただ何より大事なことは、あの方がドミトリーをちつとも愛してゐないで、かへつて自分でこんなに苦しめてゐる僕を愛してゐるといふことを自分で悟るためには、十五年二十年の歳月を要するつてことだ。ところが、事によつたら、あの方は今日のやうな經驗をしても、永久にそれを悟ることが出来ないかも知れんよ。でも、まあその方がいいさ。立ちあがつて、そのまま永久に離れ去つてしまつた譯だ。時に、あの方は今どうしてゐるね？ 僕の歸つた後でどうだつた？」

アリョーシャはヒステリーの話をして、彼女は今でもまだ意識がはつきりしないで、うはごとを言つ



てゐるだらうとまで附け足した。

「ホフラーコワが嘘をついたんぢやないか？」

「さうではないらしいんです。」

「だつて、調べて見なくちやならないよ、ただ、ヒステリイで死んだものは、一人もないからね、ヒステリイといふ奴はあつてもいいだらう。神様は好んで女にヒステリイをお授けになつたのだ。僕ももう二度とあそこへは行かない。何も今さら顔を出すにも當るまいからな。」

「でも、兄さんはさつきあの人にこんなことを言つたでせう、あの人はつひぞ兄さんを愛したことがなかつたつて。」

「あれはわざと言つたんだよ。アリョーシャ、シャンパンを注文しようかね。僕の自由のために飲みうぢやないか。いや、僕が今どんなに嬉しいか分かつてくれたらなあ！」

「いいえ、兄さん、飲まない方がいいでせう。」と不意にアリョーシャが言つた、「それに僕は何だか氣が減入つてならないんです。」

「ああ、お前はすつと前から氣が減入つてるやうだね、かなり前から僕にも氣はついてたよ。」

「ぢや、明日の朝はどうしても出立するんですか？」

「朝？ 何も僕は朝といつた譯ぢやないよ……けれど、或は本當に朝になるかも知れないな。ところで、僕が今日、ここで食事をしたといふのはね、ただ親父と一緒に食事をしたくなかつたからなんだよ。それほど僕はあの親父がいやでたまらなくなつたんだ。僕はそのことだけでも、疾うに出立してゐた筈

なんだ。しかし、僕が出立するからつて、どうしてお前はそんなに心配するんだ？ 僕とお前とのために與へられた時間は、出發までにまだどのくらゐあるか分かりやしない。永却だ、不滅だ！」

「あす出立なさるといふのに、どうして永却だなんていふんです？」

「僕とお前とは、あんなことにはまるつきり無關係ぢやないか？」とイワンは笑ひ出した、「だつて、何といつたつて、自分のことは大丈夫話しあふ暇があるからなあ、自分のことは……一體僕たちは何のためにわざわざここへやつて來たんだらう？ 何だつてお前はそんなにびつくりしたやうな眼つきをするんだい？ さあ、言つて御覽、僕たちは何のためにここへやつて來たんだ？ カテリーナ・イワーノヅナに對する戀や、親父のことや、ドミトリイのことを話しに來たといふのかえ？ 外國の話かえ？ 露西亞の因果な國情の話でもあるのか？ ナポレオン皇帝のことでも話しに來たといふのかえ？ さうなのかえ？ そんなことのためなのかえ？」

「いいえ、そんなことのためぢやありません。」

「そんなら、自分でも何のためか分かつてるだらう。ほかの人たちには或ることが必要だらうが、われわれの黄いろい連中にはまた別のものが必要なんだ。われわれは先づ最初に永遠の問題を解決しなければならぬ。これが一番われわれの氣にかかるところなんだ。いま若き露西亞にただ永遠の問題ばかり取りあげてゐる。しかもそれが、ちやうど老人たちがみな急に實際問題について騒ぎ出した現在なんだからな。お前にしたつて、一體、何のためにこの三箇月のあひだ、あんなに何か期待するやうな眼つきで、僕を眺めてゐたんだ？ つまり僕に『お前はどんな風に信仰してるのか、それとも全然信仰を



持つてゐないのか？」と訊問するためだつたのだらう——なあ、アレクセイ・フォードロキッチ、君の三箇月の注目も、結局はこんな意味になつてしまふでせう、え？」

「或ひはさうかも知れません。」とアリョーシャは微笑んだ、「でも、兄さんは今僕をからかつてるんぢやないでせうね？」

「僕がからかふつて！ 僕は三箇月のあひだもあんなに期待をもつて僕を一心に見つめてゐた可愛い弟を悲しませるやうなことはしないよ。アリョーシャ、まつすぐに見て御覽、僕もやつぱりお前とちつとも變りのない、ちつぽけな子供なのさ。ただ新發意でないだけのことさ。ところで、露西亞の子供は今までどんな振舞をしてゐたといふのだ？ といつても或る種の連中に限るんだがね。例へば、この薄汚ない料理屋へ奴らが集まつて、隅つこに陣取るだらう。この連中は生れてこの方、つひぞ知り合つたこともなければ、これから先も一旦ここを出てしまへば、四十年たつたからつて、お互ひに知り合ひになることはありやしない。ところがどうだ、料理屋の一分間を偷んでどんな議論を始めると思ふ？ それを決まつて宇宙の問題なのさ、つまり、神はあるかとか、不死はあるかとかいふ問題なんだ。神を信じない連中は社會主義だの、無政府主義だのを擔ぎ出したり、全人類を新らしい組織に變へようなどといふ話を持ち出す。ところが結局は同じやうな問題に歸着するんだよ、ただ別々の端から出發するだけの違ひだ。こんな風に非常に多くの最も才能あるわが國現代の少年たちが、ただ永久の問題ばかりを話題にしてゐるんだ。ねえ、さうぢやないか？」

「ええ、神はあるか、不死はあるかといふ問題と、それから兄さんの仰つしやつたやうに、別の端から出發した問題は、現代の露西亞人にとつて、何よりも第一の問題なんです。また、さうなければならぬのです。」やはり同じやうに、靜かな探るやうな微笑みをうかべながらアリョーシャはかう言つた。

「ねえ、アリョーシャ、露西亞人たることも、時にはあまり感心しないが、しかし、いま露西亞の少年たちが没頭してゐることぐらゐ馬鹿々々しいことも想像が出來ないな。尤も僕はたつた一人アリョーシャといふ露西亞の少年に限つては、とても好きなんだ。」

「うまいところへ持つて來ましたねえ。」アリョーシャは不意に笑ひ出した。

「さあ、言つてくれ、どつちから始めたものか、ひとつお前に命令して貰はう、神から始めようかな？ 神はあるから始めようかな、どうだい？」

「どちらからでも好きな方から始めて下さい、『別の端』からだつて構はないでせう。けど、兄さんは昨日お父さんの前で、神はないと言ひ切つたぢやありませんか？」と、アリョーシャは探るやうに兄を眺めた。

「僕は昨日、親父のところで、食事の時あんなことを言つたのは、わざとお前をからかふためだつたんだよ。すると果してお前の眼が燃えだしたつけ。しかし、今はお前と意見を交換することを決して避けはしないよ。で、僕は眞面目に話してゐるんだ。僕はお前と親密になりたいのだよ、アリョーシャ、僕には友達がないから、一つどんなものか試してみたいのさ。それに若しかしたら神を認めるかも知れないんだよ。」とイワンは笑ひ出した。「お前にはちよつと意外だらう、え？」



「ええ、勿論、若しもしも兄さんが冗談を言つてゐるんでなければ……」

「冗談をいふつて？ それあ昨日だつて長老のところへ冗談をいふつて咎められたけど。そら、十八世紀にある老人の無神論者が、若し神がないとすれば、案出しなければならぬ、*Si j'existait pas Dieu il faudrait l'inventer.*」と言つた。ところが、實際に人間は神といふものを考へ出したんだ。しかし、神が本當に存在するといふことが不思議でも奇態でもなくつて、そのやうな考へ——神は必要なりといふ考へが、人間みたいな野蠻で性悪な動物の頭にうかんだといふことが、實に驚嘆に値するんだ。値するのだ、それほどこの考へは神聖で、感動的で、賢明で、人間の名譽たるべきものなんだ。僕はどうかといへば、人間が神を創つたのか、それとも神が人間を創つたのかといふことはもう考へまいと、疾うから決めてゐるんだ。だから、勿論、この問題に關して、露西亞の小僧つ子たちが夢中になつてゐる近來の一切の原理を詮議だてすることもやはり御免だ。そんな原理はみんな歐羅巴人の假設から引き出したものなんだ。何しろ、あちらで假設となつてゐるものは、すぐに露西亞の小僧つ子どもに原理化されてしまふんだからね。いや、小僧つ子ばかりではなく、どうかすると大學教授の中にさへそんなのがあるよ。だつて露西亞の大學教授はどうかすると、この露西亞の小僧つ子と同然だからね。だからすべての假設は避けることにしよう。ところで、いつたい僕とお前とは今どんな問題を取りあげたらいいんだ！ 問題は、如何にすれば一刻も早く僕の本質、つまり僕がどんな人間で、何を信じ、何を期待してゐるかを、お前に説明することが出来るかといふことだね、さうだらう？ だから、かう明言しておくれよ——僕は率直簡明に神を認容するつてね。しかし、ここに但し書きがあるんだ。といふのは、若し

も神があつて、本當に地球を創造したものをせすれば、われわれに分かりきつてゐるやうに、神はユウクリッポの幾何學によつて地球を創造し、人間の智慧にただ空間三次元の觀念だけを與へたのだ。ところが、幾何學者や哲學者の中には、それも最も著明な學者の中にすら、こんな疑ひをもつてゐるものが昔も今もあるんだ、つまり、全宇宙、といふより、もつと廣義にいへば、全存在はだね、どうもユウクリッポの幾何學だけで作られたものではなさうだといふことだ。ユウクリッポの法則によると、この地上では決して一致することのない二條の平行線も、事によつたら、どこか無限のうちでは一致するかも知れないなどと大膽な空想を逞しうする者さへもあるんだよ。そこで僕はもう諦めたんだ。これくらゐのことさへ理解できないのに、僕に神のことなんか理解できてたまるものかとね。僕はおとなしく白狀するが、僕にはこんな問題を解釋する能力が一つもない、僕の智慧はユウクリッポ式の、地上的のものなんだ。それなのに現世以外の事物を解釋するなんてことが、どうしてわれわれに出来るものか。アリョーシヤ、お前に忠告するが、こんなことは決して考へないことだよ。何よりいけないのは神のことだ——神はありや無しや？ なんてことなのさ。そんなことは三次元の觀念しか持つてゐない人間には、どうしても齒の立たない問題なんだ。それで僕は、神は承認する。進んで承認するばかりではなく、おまけに神の睿智をも目的をも承認する——われわれには少しも分らないけれどね。それから人生の秩序も意義も信じ、われわれがやがては融和するとかいふ永久の調和をも信ずる。また宇宙がそれにむかつて進んで居り、それ自體が『神に通じ』またそれが神であるところの道、といつたやうないろんな數限りないことを信ずる。どうもこのことについては、いろんな言葉がしたまこしらへてあるね。と



もかくも、僕はいい傾向に向かつてるやうだろ——ね？　ところが、いいかね、僕は結局この神の世界を承認しないのだよ。この世界が存在するといふことは知つてゐるけれど、それでゐて断じてそれを認容することができないのだ。何も僕は神を承認しないと書つてゐる譯ぢやないよ、いいかい。僕は神の創つた世界、神の世界を承認しないんだ、どうしても承認する譯には行かないんだ。ちよつと断つておくが、僕はまるで赤ん坊のやうに、かういふことを信じてるんだよ——いつかはこの苦しみも癒えて跡形もなくなり、人間的矛盾の忌々しい喜劇も、哀れな蜃氣楼として、弱々しく、まるで原子のやうに微細な人間のユウクリッド的の智能の厭ふべき造りごととして消え失せ、遂には世界の終局において、永久的調和の刹那において、何ともたとへやうのない高貴な現象があらはれて、それがすべての人々の胸に充ちわたり、すべての人々の憤懣を柔らげ、すべての人の悪行や、彼らによつて流された血を贖つて、人間界に惹き起した一切のことを單に赦すばかりでなく、進んでそれを辯護するといふんだ——まあ、すべてがその通りになるとしてもだね、それでも僕はこれを許容することが出来ないんだ、いや許容しようとは思はないんだ！　たとひ平行線が一致して、それを自分の眼で見たとしても、自分で見て、『一致した』と言つたとしても、やはり許容しないよ。これが僕の本質なのさ、アリョーシヤ、これが僕のテーゼなんだ。これだけはもう大真面目でお前に打ち明けたんだよ。僕はこのお前との話を、わざとこの上もない馬鹿げた風に始めたけれど、とどのつまり告白といふところまで滑ぎつけてしまつたよ、だつてお前に必要なのはただそれだけだからな、お前にとつては神様のことなんかどうだつていい、ただお前の愛する兄貴が何によつて生きてゐるかといふことだけ知ればいいんだからね。」

イワンは不意に思ひもかけない或る特別の情をこめて、この長口舌を終つた。

「どうして兄さんは『この上もなく馬鹿げた風に』なんか始めたんです？」と、アリョーシヤは物思はしげに兄を見つめながら訊ねた。

「先づ第一にだ、露西亞式に則るためなのさ。かうした問題に對する露西亞人の會話といふものは必ず、この上もなく馬鹿げた風に運ばれるからな。第二には、やはり馬鹿げてゐるほど、事實に接近することになるからだ。愚鈍といふ奴は簡單で狡くはないが、智はどうもごまかしたり、隠れたりしたがる。賢明は卑劣漢だが、愚鈍はむきで正直者だ。僕は自暴自棄といふところまで事を運んでしまつたから、馬鹿々々しく見せれば見せるだけ、僕にとつてはいよいよ都合がよくなつて来るんだ。」

「兄さんは何のために『世界を許容しない』のか、その譯を話して下さるでせうね？」とアリョーシヤが言つた。

「それはね、むろん説明するよ、何も秘密ぢやないし、そのために話をここまで滑ぎつけたんだから。なあ、アリョーシヤ、僕は何もお前を墮落させて、その足場から引きおろさうとは決して思はないよ、それどころか、若しかしたらお前に治療して貰ふつもりかも知れないんだよ。」と不意にイワンは、まるで小さなおとなしい子供のやうに微笑んだ。アリョーシヤは今までに、一度として彼がこんな笑ひ方をするのを見たことがなかつた



「僕は一つお前に白状しなければならぬんだよ。」とイワンは話しだした。「一體、どうして自分の隣人を愛することができるとやら、僕にはどうにも合點が行かないんだ。僕の考へでは隣人であればこそ愛することが出来ないところを、遠きものなら愛し得ると思ふんだがな。僕はいつか何か物の本で『恵み深きヨアン』（或る一人の聖者なのさ）の傳記を読んだことがあるんだ。なんでも一人の旅人が饑え凍えてやつて来て、暖めてくれと頼んだものだから、この聖者は旅人を自分の寢床へ入れて抱きしめながら、何か怖ろしい病氣で腐れかかつて、何ともいへぬ厭やな臭ひのする口へ、息を吹きかけてやつたといふのだ。でも、聖者がそんなことをしたといふのは瘦せ我慢からだよ、偽りの感激のためだよ、義務觀念に強制された愛からだよ、自分で自分に課した苦行のためだよ。誰か或る一人の人間を愛するためには、その相手に身を隠してゐて貰はなくちゃ駄目だ。ちよつとでも顔を覗けられたら、愛もそれきりおぢやんになつてしまふのさ。」

「そのことはゾシマ長老がよく話して居られましたよ。」とアリオシーヤが口を入れた。「長老様もや

つぱり、人間の顔は愛に經驗の浅い多くの人にとつては、時をり愛の障礙になると言つて居られました。しかし、人間性の中には實際、多くの愛が含まれてゐて、殆んど基督の愛に等しいやうなものさへありますよ。それは僕自身だつて知つてゐますよ。イワン……。」

「でも、今のところ、僕はまだそんなのを知らないし、理解することだつて出来ないよ、そして數へきれない大多數の人間も僕と同じなんだ。問題は、人間の悪い性質のためにこんなことがおきるものか、それとも人間の本質がさういふ風にできてゐるのか、といふ點にあるんだ。僕の考へでは、人類に對する基督の愛は、この地上にあり得べからざる一種の奇蹟なんだよ。なるほどキリストは神であつた。けれど、われわれは神ぢやないんだからね。よしんば僕が深い苦悶を味はふことが出来るにしても、どの程度まで苦悶してゐるのか、他人には決して分かるもんぢやない。だつて、他人は他人であつて、僕ではないから。それに、人間といふ奴はあまり他人を苦惱者として認めるのを喜ばないものなのだ、（まるでそれが禮儀でもあるやうにね）。どうして認めたがらないと思ふ？ それは例へば僕の體に厭やな臭ひがあるとか、僕が愚かしい顔をしてゐるとか、でなければ、いつか僕がその男の足を踏んづけたとか、さういつたやうな理由によるんだ。それに苦惱にもいろいろある。屈辱的な苦惱、僕の人格を下げるやうな苦惱、例へば空腹といつたやうなものなら、慈善家だつて許してくれるけど、少しく高尚な苦惱、例へば理想のための苦惱なんでもものになると、極めて少數の場合以外には、決して許してくれない。なぜかといふと、僕の顔を見ると、その慈善家が空想してゐたやうな理想のための受難者の顔とはまるで似ても似つかないからといふのだ。そこで僕はその人の恩恵を取りにがしてしまふことになる。それ



は決してその人の悪意からではない。乞食、殊にたしなみのある乞食は、断じて人前へ顔をさらすやうなことをしないで、新聞紙上で報謝を乞ふべきだ。抽象的な場合ならまだまだ隣人を愛することも出来る。遠くからなら隣人も愛し得るが、傍へ寄つては殆んど不可能だ。若しも舞踊劇の舞臺でのやうに、乞食が絹の襪を著て、破れたレースをつけて出て来て、優雅な踊をしながら報謝を乞ふのだつたら、まだしも見物してゐられるよ。しかし、それも見物するといふまでで、決して愛するといふ譯には行かないもんだ。いや、こんなことはもう澤山だ。ただ僕はお前を僕の見地へ立たして見さへすればよかつたんだ。僕は一般人類の苦惱について話したかつたのだが、今はむしろ子供の苦惱だけにとどめておかう。これは僕の論據を十分の一くらゐに弱めてしまふけれど、しかしまあ、子供のことにだけにしよう。これは勿論、僕にとつて不利益なだけだ。第一、子供は傍へ寄つても愛することが出来る。汚ない奴でも器量のよくない奴でも愛することが出来る。(尤も僕には器量のよくない子供といふものは決してゐないやうに思はれるんだがね。)第二に、僕が大人のことを話したくない理由は、彼らが醜惡で愛に相當しないばかりでなく、彼らに對しては天罰といふものがあるからだ。大人は智慧の實を食べて、善惡を知り、『神の如く』なつてしまつた。そして今でも引きつづきやはりその果實を食べてゐる。ところが子供はまだ何も食べないから、今のところまだ全く無垢なのだ。お前は子供が好きかえ、アリョーシャ？ 分かつてるよ、好きなさ。だからいま僕がどういふ譯で子供のことばかり話さうとするか、お前にはちやんと察しがつくだらうよ。で、若し、子供までが同じやうに地上で怖ろしい苦しみを受けるつれば、それは勿論、自分の父親の身代りだ、智慧の實を食べた父親の身代りに罰せられるんだ、

——でも、これはあの世の人の考へ方で、この地上に住む人間の心には不可解だ。罪なき者が、他人の代りに苦しむなんて法はないぢやないか。まして罪なき子供が！ かういつたら驚ろくかも知れないがね、アリョーシャ、僕もやはり子供が好きでたまらないんだよ。それに注目すべきことには、殘酷で情慾や肉慾の旺盛なカラマゾフ的人物が、どうかすると非常に子供を好くものだ。子供が本當に子供である間、つまり七つくらゐまでの子供は、怖ろしく人間ばなれがしてゐて、まるで別な性情を持つた別な生き物の觀があるよ……。僕は監獄へ入つてゐる一人の強盜を知つてゐるが、その男は商賣のために、毎晩々々あちこちの家へ強盜に入つて、一家族をみなごろしにするやうなこともよくあるし、時には一時に幾人もの子供を斬り殺すやうな場合もあつた。ところが、監獄へ入つてゐるうちに、奇態なくらゐに子供が好きになつたのだ。奴は獄窓から庭に遊んでゐる子供を眺めるのを、自分の日課のやうにしてゐた。一人の小さい子供などは、うまく手馴づけられて、いつもその窓の下へやつて来て、大の仲よしになつたほどだ……。ところで、僕が何のためにこんな話を持ち出したのか、お前には分からんだらうな？ ああ、何だか頭が痛い、そしていやに氣が減入つて来た。」

「兄さんは變な顔をして話しをしますね。」とアリョーシャが不安さうに注意した、「何だか氣でも違つた人のやうですよ。」

「話のついでだけれど、モスクワで或るブルガリヤ人から、こんな話を聞いたよ。」弟の言葉が耳に入らないやうに、イワン・フォードロキッチは言葉をついだ、「あの國ではね、土耳其人やチエルクス人が、スラヴ族の反亂を怖れて、到るところで暴行をするさうだ。つまり、家を焼く、人を斬る、女子供



に暴行を加へる、囚人の耳を扉へ釘づけにして一晩ぢゆう打つちやつておいて、朝になると首を絞めてしまふ——などといふ、とても想像もつかない有様なんだ。實際よく人間の残忍な振舞ひを『野獣のやうだ』などといふけれど、これは野獣にとつて怖ろしく不公平で、侮辱的な言ひ草だよ。だつて、野獣は決して人間のやうに残忍な眞似はしないものだ、あんなに技巧的で藝術的な残酷な眞似なんか出来つこないよ。虎だつて、ただ咬むとか引き裂くといったことしか出来ないものだ。人間の耳を一晩ぢゆう釘づけにしておくなんて、たとひ虎にそんな能力があつたにしろ、考へも及ばないことだ。とりわけ、その土耳古人どもは、變態性慾をもつて子供を苛むんださうだ。先づ母親の胎内から、じ首でもつて子供を抉り出すといふ邊から始まつて、ひどいものになると、乳呑子を空へ抛り上げて、母親の眼の前でそれを銃劍のさきで受けとめて見せる奴もある。母親の面前でやるといふのが、主なる快感を形づくつてゐる譯だな。ところが、もう一つ非常に僕の興味をそそる場面があるんだよ。それは、先づ一人の乳呑子がわなわなと慄へる母親の手に抱かれてゐて、あたりには侵入して來た土耳古人が群がつてゐる、といつた光景を想像して御覽。ところで、この連中が一つ愉快なことを思ひついてね、一生懸命あやして、赤ん坊を笑はせようとしてゐたんだが、たうとういい鹽梅に赤ん坊が笑ひ出したのさ。その刹那、一人の土耳古人がピストルを取り出して、赤ん坊の顔から五六寸のところから狙ひを定めた。すると赤ん坊は嬉しさうにきやつきやと笑ひながら、ピストルを取らうと思つて、小さな兩手を伸ばす、と、いきなりその藝術家は顔の眞中を狙つて、ズドンと引金をひいて、小さな頭をめちやめちやに碎いてしまふんだ……いかにも藝術的ぢやないか？ ついでながら、土耳古人は非常に甘いものが好きだつて話だ。」

「兄さん、何のためにそんな話をするんです？」と、アリオシーヤが訊ねた。

「僕は、若し悪魔といふものが存在しないで、人間がそれを創り出すとしたら、きつと人間そつくりの形に悪魔を作つたらうと思ふんだがなあ。」

「そんなことをいへば、神様だつて同じことですよ。」

「お前は『ハムレット』の中のポーニアスみたいになかなか巧く言葉をそらすね。」とイワンが笑ひ出した、「お前は巧く僕の言葉尻を抑へたもんだ。いや結構々々、大いに愉快だよ。しかし、人間が自分の姿や心に似せて創り出したものだつたら、さぞかしお前の神様は立派なもんだらうな。ところで、いまお前は、何のためにあんな話を持ち出したかつて訊ねたんだね？ 實はね、僕はあんな種の事實の愛好家で、同時に蒐集家なので、新聞や人の話から手當り次第に、さういふ種類の逸話をノートに取つて集めてゐるんだ。もうだいたい立派な蒐集が出来たよ。例の土耳古人も勿論その蒐集の中へ入つてゐるんだが、こんなのはみんな外國種だからな。ところが、僕は露西亞種もだいたい集めた。その中には、あの土耳古人よりも一段すぐれた奴さへあるんだ。お前も知つてゐる通り、露西亞では随分よく擲る。それも多く答や棒で擲る、しかもそこが國民的なんだよ。わが國では耳を釘づけにするなんてことは夢にも考へない。われわれはこれでも歐羅巴人だけれど、しかし答とか棒とかいふ奴は妙に露西亞的なものになつてしまつて、われわれから奪ひ去ることが出来なささうだ。外國では今はあんまり擲つたりなんかしないやうだ。人情が美しくなつたのか、それとも人間を擲つてはならぬといふ法律でも出来たのか、その邊はよく知らないけれどね。その代り外國の連中は別なもので、露西亞人と同様、國粹的なもので埋め



合せをしてゐるよ。それは露西亞ではとても不可能なほど、國民的なものなんだ。尤も露西亞でも——殊に上流社會で宗教運動が始まつた頃からは、そろそろ移植されかけたやうだがね。僕は佛蘭西語から譯した面白いパンフレットを持つてゐる。これにはつい最近、ほんの五年ばかり前に瑞西のジュネーヴで、或る殺人犯の惡黨を死刑にした話を書いてあるんだ。それはリシャルといふ二十三になる青年で、死刑の間に悔悟して基督教に入つたんださうだ。そのリシャルは誰かの私生兒で、まだ六つくらいの子供の時、両親が山に住んでゐる瑞西人の羊飼ひにくれてやつたのだ。羊飼ひは仕事に使はうと思つて、その子供を育てたわけだが、子供は羊飼ひの間で、野獸のやうに育つた。彼らは子供に何一つ教育を施さなかつたばかりか、却つて七つくらい年の年にはもう羊飼ひに追ひ使つたくらゐる。しかも雨が降らうが寒からうが、ろくに着物もさせなければ、食べ物さへ殆んど與へなかつたのだ。羊飼ひの仲間はそのことをしながらも、誰ひとり惡かつたと思つて、後悔する者なんかありはしない。それどころか立派に權利でも持つてゐるやうに考へてゐたのさ。なぜつて、リシャルは品物なんぞのやうに貰ひ受けたのだから、養つてやる必要さへないと思つてたんだからね。リシャル自身の證言によると、その頃この少年は、まるで聖書の中の放蕩息子の子やうに賣り物の豚に與へる餌でもいいから、何か食べたくてたまらないと思つたが、それさへ食べさせて貰へなかつた。彼が豚の餌を偷んだ時には折檻されたくらゐなんだ。こんな風にして、彼は少年時代と青年時代を送つたが、やがて、すつかり成人して體力が固まると、自分から進んで泥棒に出かけたのだ。この野蠻人はジュネーヴの町で日傭稼ぎをして金を儲けては、儲けた金を酒代にして、ならずものやうな生活をしてゐたが、結局、しまひに或る老人を

殺して持ち物を剝いだんだ。リシャルは忽ち逮捕されて裁判を受け、死刑を宣告された。あちらの連中は感傷的な同情なんかしないからねえ。ところが牢へはいると早速、牧師だの各基督教團體の會員だの慈善家の婦人だのといつた、いろんな連中がこの男を取りまいて、監獄の中で讀み書きを教へて、しまひには聖書の講義まで始めたんだ。さうして、説教したり、諭したり、嚇したり、賺したりされた結果、つひに當人は嚴かに自分の罪を自覺するに到つたのだ。そこで、リシャルは自分から裁判所宛に手紙を書いて、『自分は仕様のないならず者でしたが、やつとお蔭さまで神様が自分の心をお照らし下さつて、お恵みを授けて下さりました』とやつた譯さ。するとジュネーヴ中が騒ぎ出した。ジュネーヴの町中の慈善家や徳行家が大騒ぎを始めた。上流の人や教養のある人たちがどつと監獄へ押しかけ、リシャルを抱いたり接吻したりするんだ。『お前はわしの兄弟だ、お前にはお恵みが授かつたのだ！』當のリシャルは感きはまつて泣くばかりだ。『さうです。わたしはお恵みを授かりました！』わたしは少年時代から青年時代へかけて、豚の餌を喜んでゐましたが、今こそわたしにも神の御恵みが授かりまして、主のお胸に死ぬることが出来ます。』『さうだ、リシャル、主の御胸に死ぬがいい、お前は血を流したのだから、主の御胸に死ななければならぬ。お前が豚の餌食を羨んだり、豚の口から餌を偷んで擲れたりした時に（これは全くよくないことだ、偷むといふことはどうしたつて許されてゐないからな）、少しも神様を知らなかつたのはお前の罪ではないとしても、お前は血を流したのだから、どうしても死ななければならぬよ。』やがて最後の日が來た。裏へ果てたリシャルは泣きながらも絶え間なしに、『これはわたしの最もよき日です。なぜといつて、わたしは主のお傍へ行くのだからです。』と繰り返す。



すると牧師や裁判官や慈善家の婦人たちは、『さうだ、これはお前にとつて何より幸福な日だ、なぜと  
いつて、お前は主の御傍へ行くのだから！』こんな連中がぞろぞろと、リシャルの乗せられた囚人馬  
車の後から、徒歩や馬車で、刑場さしてついで行つたのだ。やがて刑場につくと『さあ、死になさい、  
兄弟！』とリシャルにむかつて喚く、『主の御胸に死になさい、なぜならば、お前にも神の御恵みが  
授かつたのだから。』かうして連中は兄弟リシャルに、むやみに兄弟としての接吻を浴びせた後、刑  
場へ曳き出して斷頭臺へ坐らせ、ただこの男に御恵みが授かつたからといふだけの理由で、いとも親切  
に首をはねたといふ譯さ。いや實にこの話は外國人の特性をよく現はしてゐるよ。このパンフレットは  
露西亞の上流社會に屬するルーテル派の慈善家の手で露西亞語に翻譯され、露西亞人民教化のためだと  
いつて、新聞雜誌の無料附録として配布されたものだ。リシャルの一件の面白いところは國民的な點  
にある。露西亞では或る人間がわれわれの兄弟になつたからといつて、又その人がお恵みを授かつたか  
らといつて、首を斬り落すなんてことは馬鹿らしい話だ。しかし、繰り返していふが、露西亞にもやは  
り獨自のものがある。殆んどこの話に負けない位があるよ。露西亞では人を擲つていたためつけるのが、  
歴史的な、直接的で最も手近な快樂となつてゐる。ネクラソフの詩には、百姓が馬の眼を——『素直な  
眼』——を鞭で打つところを歌つたのがある。あんなのは誰の眼にも觸れることで、露西亞式といつて  
もいい位だ。この詩人の描寫によると、力にあまる重荷をつけられた弱々しい馬が、ぬかるみに車輪を  
取られて曳き出すことが出来ない。百姓はそれを打つ、猛烈に打つ、つひには自分でも何をしてゐるの  
か分からないで、打つといふ動作に酔つてしまつて、力まかせに數知れぬ笞の雨を降らすのだ。『たと

ひ手前の手に負へなくつても、曳け、死んでも曳け！』瘦せ馬が身をもがくと、やるせない動物の泣い  
てゐるやうな『素直な眼』のうへを、百姓はびしびしと打ちはじめ。こちらは夢中になつて身をもが  
き、やつとのことで曳き出す。そして全身をぶるぶる慄はせながら、息もしないで體を斜めに向けるや  
うにして、妙に不自然な見苦しい足どりで、ひよいひよいと飛び上りながら曳いて行く、——その光景  
がネクラソフの詩の中に怖ろしいほど如實に現はれてゐる。尤も、これは高が馬の話だ。馬といふ奴は  
打つために神様から授かつたものだ、と、かう韃靼人がわれわれに説明して、それを忘れぬやうに鞭を  
くれたんだよ。ところが、人間でもやはり擲ることが出来るからね。現に知識階級に屬する立派な紳士  
とその妻君が、やつと七つになつたばかりの生みの娘を笞で折檻してゐる——このことは僕の手帳に詳  
しく書きこんであるんだ。親父さんは棒つ切れに節くれがあるのを見て、『この方がよく利くだらう』  
なんて喜んでゐるのさ。そして現在に血を分けた娘を『やつつけ』にかかるとだ。僕は正確に知つて  
るが、中には一つ打つごとに情慾といつていくらゐるに——字義どほりに情慾といつていくらゐる熱して  
行く人がある。これが笞の數を重ねるたびに、次第々々に激しくなつて、級數的に募つて行くのだ。  
一分間なぐり、五分間なぐり、やがて十分間となぐりつけるうちに、だんだん『ききめ』が現はれて愉  
快になつて来る。子供は一生懸命に『お父さん、お父さん、お父さん！』と泣き喚いてゐるが、しまひ  
には、それも出来ないで、せいぜいいふやうになる。時には、さういつた鬼のやうな残酷な所業のため  
に、事件が裁判沙汰になることもある。すると辯護士が雇はれる——露西亞人は昔から辯護士のことを  
『辯護士はお雇ひの良心だ』などといつてゐるが、この辯護士が自分の依頼者を辯護しようと思つて、



『これは通常ありがちの簡単な家庭的事件です。父親が自分の娘を折檻したまでの話ぢやありませんか。こんなことが裁判沙汰になるといふのは、現代の恥辱であります。』と喚きたてる。陪審員はそれに動かされて別室へ退き、やがて無罪の宣言が與へられる。民衆はその折檻者が無罪になつたからといつて、歡聲をあげるといふ段取りでな。ちえつ、僕がその場にゐる合はせなかつたのは残念だよ！ 僕がゐたら、その冷酷漢の名譽を表頌するために獎勵金支出の議案でも提出してやつたんだのに！……實にすばらしいボンチ繪だよ。しかし、子供のことなら、僕の蒐集の中にもつと面白いのがあるよ。僕は露西亞の子供の話をつんとうんと集めてるんだぜ、アリョーシヤ。五つになる小つちやな女の子が兩親に憎まれた話といふのがある。その兩親は『名譽ある官吏で、教養ある紳士淑女』なんだよ。僕はいま一度はつきり斷言するが、多くの人間には一種特別な性質がある、それは子供の虐待だ。しかも、子供に限るのだ。他の有象無象に對するときは、最も冷酷な虐待者も、博愛心に富み、教養の豊かな歐羅巴人のごさといつた顔をして、いやに殷勤で謙遜な態度を示すけれど、そのくせ、子供を苛めることが大好きなんだ。この意味において子供そのものまでが好きなのだ。つまり、子供の頑是なさが、この種の虐待者の心を咬むのだ。どことして行く處のない、誰ひとり頼る者もない小さい子供の、天使のやうな信じ易い心——これが虐待者の忌はしい血潮を沸かすのだ。あらゆる人間の中には野獸がひそんでゐる。それは怒りつばい野獸、責めさいなまれる犠牲者の泣き聲に情慾的な血潮をたぎらす野獸、鎖を放たれて抑制を知らない野獸、淫蕩のために色々な病氣——足痛風だとか、肝臓病だとかに取つつかれた野獸なのだ。で、その五つになる女の子を教養ある兩親がありとあらゆる拷問にかけるのだ。自分でも何のためやら

分らないで、ただ無性に打つ、叩く、蹴る、しまひには、いたいたな子供の體が一面、紫いろになつてしまつた。然るに、やがてそれにも厭や氣がさしてきて、もつとひどい技巧を弄するやうになつた。といふのは、實に寒々とした嚴寒の季節に、その子を一晚ぢゆう便所の中へ閉ぢこめるのだ。それもただ、その子が夜なかに用便を教へなかつたといふだけの理由にすぎないのだ、(いつたい天使のやうな、無邪氣にぐつすり寝入つてゐる、五つやそこいらの子供が、そんなことを知らせる智慧があるとでも思つてゐるのかしら)、さうして、洩らした穢い物をその子の顔に塗りつけたたり、無理やりに食べさせたりするのだ。しかも、これが現在の生みの母親の仕業なんだからね！ この親は夜よなかに汚ないところへ閉ぢこめられた哀れな子供の呻き聲を聞きながらも、平氣で寝てゐられるといふんだからね！ お前に分かるかい、まだ自分がどんな目に會はされてゐるのかも理解することができない、小つちやな子供が、暗い寒い便所の中でのいたいたな拳を固めながら、痙攣に引きむしられたやうな胸を叩いたり、邪氣のない素直な涙を流しながら、『神ちやま』に助けを祈つたりするんだよ——え、アリョーシヤ、お前はここの不合理な話が説明できるかい、僕の弟で、親友で、神聖な新發意のお前は、いつたい何の必要があつてこんな不合理が創られたものか、説明が出来るかい！ この不合理がなくては人間は地上に生きて行かない、なぜなら、善惡を認識することが出来ないから——などと、人はよくいふけれど、そんな代價を拂つてまで、碌でもない善惡を認識する必要がどこにあるんだ？ 認識の世界全體を擧げて、この子供が『神ちやま』に流した涙だけの價もないではないか。僕は大人の苦惱のことは言はない。大人は禁斷の木の實を食つたんだから、どうとも勝手にするがいい。みんな惡魔の餌食になつてしまつたつて



構ひはしない、僕がいふのはただ子供だけのことだ、子供だけのことだ！ おや、僕はお前を苦しめてるやうだね、アリョーシヤ、何だか人心地もなさうぢやないか。若し何なら、やめてもいいよ。」

「大丈夫です、僕もやつぱり苦しみたいんですから。」とアリョーシヤは呟いた。

「もう一つ、ほんのもう一つだけ話さしてくれ。これも別に意味はない、ただ好奇心のためなんだ。非常に特殊な話なんだが、つい近頃、露西亞の古い話を集めた本で讀んだばかりなんだ。『書紀』だつたか『古事』だつたか、よく調べて見なければ、どちらで讀んだか忘れてしまつたよ。何でも現世紀の初め頃——農奴制の最も暗黒な時代のことさ、それにしても、かの農奴解放者萬々歳だ！ さてその現世紀の初め頃、一人の將軍があつたのさ。立派な縁者や知友を澤山もつた、極めて富裕な地主であつたが、職を退いて暢氣な生活に入ると共に、殆んど自分の家來の生殺與奪の權を獲得したもののやうに、信じかねない連中の一人であつた、(尤も、こんな連中はその當時でも、あまり澤山はゐなかつたらしいがね)しかし、時にはそんなのもゐたんだよ。さて、この將軍は二千人からの農奴のゐる自分の領地に暮らしてゐて、近隣の有象無象の地主などは、自分の居候か道化のやうに扱つて、威張り散らしてゐたものだ。この家の犬小屋には何百匹といふ獵犬がゐて、それに百人ばかりも犬番がついてゐたが、みんな制服を着て馬に乗つてゐるのさ。ところが、ある時、召使の子供でやつと九つになる男の子が、石を投げて遊んでゐるうち、誤つて將軍の秘藏の愛犬の足を傷つけたんだ。『どうしておれの愛犬は跛を引いてゐるのか?』とのお訊ねに、これこれで子供が石を投げて御愛犬の足を傷めたのでございますと申し上げると、『ああん、貴様の仕業なんか、』と將軍は子供を振りかへつて、『あれを捕まへい!』と命

じた。で、人々はその子供を母の手許から引つたてて、一晩ぢゆう牢の中へ押しこめた。翌朝、未明に將軍は馬に跨つて、本式の狩獵のこしらへでお出ましになる。周りには居候や、犬や、犬飼や、勢子などが居並んでゐるが、みんな馬に乗つてゐる。ぐるりには、召使どもが見せしめのために呼び集められてゐる。その一ばん先頭には悪いことをした子供の母親がゐるのだ。やがて、子供が牢から引き出されて來た。霧の深い、どんよりした、寒い秋の日のことだ、獵には持つてこいの日和だつた。將軍は子供の着物を剥げと命じた。子供はすつかり丸裸にされて、ぶるぶる慄へながら、怖ろしさにはうつつとなつて、口さへきけない有様なのだ。『それ、追へ!』と將軍が下知をする。『走れ、走れ!』と勢子どもが吹鳴るので、子供は駆け出した……と、將軍は『かかれ!』と叫んで、獵犬を残らず放したのだ。そして狩り立てたのだ。犬どもは忽ちに、母親の眼のまへで、子供をすたすたに引き裂いてしまつたんだ……その將軍は何でも禁治産か何かになつたらしい。そこで……どうだらう? この將軍は銃殺にでも處したのかな? 道徳的感情を満足させるためには、銃殺にでも處すべきではないかえ? 言つて御覽よ、アリョーシヤ!』

「銃殺に處すべきです!」蒼白い歪んだやうな微笑みをうかべて、兄を見あげながら、アリョーシヤは小聲で言つた。

「大出來だ!」とイワシは何だか有頂天になつて吹鳴つた、「お前がさういふ以上はな……いや、どうも大へんな隠者があつたもんだ! そうらね、お前の胸のなかにだつて、そんな小惡魔が潛んでゐるぢやないか、え、アリョーシカ・カラマゾフ!」



「僕は途方もないことを言ひました、しかし……」

「それそれ、その『しかし』だよ……」とイワンは叫んだ。「ねえ、新發意先生、この地上においてはその途方もないことが必要以上に必要なんだよ。世界はその途方もないことを足場にして立つてゐるんだから、それがなかつたら世の中には何一つ起こりつこないんだよ。われわれは知つてゐるだけのことしか知らないんだ！」

「兄さんは何を知つてゐるのです？」

「僕にはなんにも分からないのだ。」と謙言でもいつてゐるやうに、イワンは語をついだ、「それに今となつては、何ひとつ理解しようとも思はないよ。僕はただ事實といふものにとどまるつもりだ。僕はもうずつと前から理解などすまいと決心したのだ。何か理解しようと思ふと、すぐに事實を曲げたくなくなるから、それで僕は事實の上にとどまらうと決心した譯だ。」

「なんだつて、兄さんは僕を試すのです？」と、アリオシーシャは緊張した調子で悲しさうに叫んだ、「いい加減にして言つてくれませんか？」

「勿論、いふとも、いはうと思へばこそ、ここまで話を運んで來たんだ。お前は僕にとつて大切な人間だから、僕はお前を見逃したくないのだ。あのゾシマ長老なんか譲りはしないよ。」

イワンはちよつと口を噤んだが、その顔は急にひどく沈んで來た。

「さあ、聽いてくれ、僕は鮮明を期するために、子供のことはかり例にとつたんだ。この地球を表面から核心まで浸してゐる一般人類の涙については、もう何もいはないことにする。僕はわざと論題を狭

めたのだ。僕は南京虫のやうな奴だから、何のために凡てがこんな風になつてゐるのか、さつぱり譯が分からずに、深い屈辱を感じるのだ。つまり、人間自身が悪いのだよ。もともと彼らには樂園が與へられてゐたのに、自分たちが見す見す不幸に陥ることを知りながら、自由を望んで天國から火を盗んだ。だから、何も哀れむことはない譯だ。僕の貧弱な、地上的な、ユウクリッド式の智慧をもつてしては、ここにはただ苦痛があるのみで、罪人はなく、一切のことは、直接に、簡単に、事件から事件を生みながら、絶えず流動して平均を保つて行く……といふことだけ位しか分からないのだ。しかし、これはユウクリッド式の野蠻な考へだ。僕にもこれが分かつてゐるから、そんな考へ方で生きて行くのは不承知なんだ！一體、罪人がなくつて、凡てが直接に簡単に、事件から事件を生んで行く、といふ事實が僕にとつて何になるんだ？ またこの事實を知つてゐるからつて、一體それが何になる？——僕には應報が必要なのだ。さもなくば僕は自滅してしまふ。しかも、その應報もいつか無限の中のどこかで與へられるといふのでは厭やだ。ちやんと、この地上で、僕の眼の前で行はれなくては厭やだ。僕は自分で見たものだ。若しその時分に死んでゐたら、蘇らして貰はなくてはならない。なぜつて、僕のゐない時にそれが現はれたんでは、あんまり癪にさはるぢやないか。實際僕が苦しんだのは、何も自分自身の體や、自分の悪行や、自分の苦行を肥やしにして、どこかの馬の骨か分からない奴の未來の調和を培つてやるためぢやないんだからね。牡鹿が獅子の傍に臥てゐるところや、殺されたものがむくむくと起き上がつて、自分を殺したものを抱擁するところを、ちやんと自分の眼で見届けたいのだ。つまり、萬人が凡てのとがらを一齊に知る時に、僕もその場に居合はせたいのだ。地上における凡ての宗教は、この希望の上



に打ち建てられてゐるのだ。しかし僕は信仰してゐるのだ。ところが、また例の子供だ、一體われわれはそんな場合、子供をどう始末したらいいのだらう？ この問題が僕には解決できないのだ。何度でも繰り返して言ふが、問題は山ほどあるけれど、僕は子供だけを例にとつた。といふのは、僕のいはなければならぬことが實に明瞭にその中に現はれてゐるからだ。いいかえ、すべての人間が苦しまなければならぬのは、苦痛をもつて永遠の調和を贖ふためにしても、何のために、子供がそこへ引合ひに出されるのだ、お願ひだから聴かしてくれないか？ 何のために子供までが苦しまなけりやならないのか、どういふ譯で子供までが苦痛をもつて調和を贖はなくてはならないのか、とんと譯が分からないんだ。どういふ譯で、子供までが材料に入れられて、どこの馬の骨か分からない奴のために、未來の調和の肥やしにならなければならぬんだ？ 人間同志の間の罪惡の連帶關係は僕にも分かる。應報の連帶關係は分かる。しかし、子供との間に連帶關係がある筈はない。そして若し、子供が父のあらゆる惡行に對して、父と連帶の關係があるといふのが眞理ならば、その眞理はまさしくあの世に屬するもので、僕なんかにはとても分からない。また剽輕な連中は、子供もやがて大きくなれば、どうせいろんな悪いことをするだらうなどといふかも知れないが、しかも、その子供はまだ大きくなつてはゐないんだ、まだ九つやそこいらのものを、犬で狩り立てたんぢやないか。おお、アリョーシヤ、僕は決して神を誹謗する譯ではないよ！ 若しも、天上天下のものが悉く一つの讚美の聲となつて、生きとし生けるものと、嘗て生ありしものとが聲を合はせて、『主よ、汝の言葉は正しかりき。何となれば、汝の道の開けたればなり！』と叫んだとき、全宇宙がどんなに震憾するかといふことも、僕にはよく分かる。また母親が自分

の息子を犬に引き裂かした暴君と抱き合つて、三人の者が涙ながらに聲を揃へて、『主よ、汝の言葉は正しかりき！』と叫ぶ時には、それこそ勿論、認識の極致が到達され、一切のことが明らかになるのだ。ところが、又ここへコンマがはいるよ。僕はそれを容認することができないのだ。で、僕はこの地上に生きてゐる間に、自分自身で早急に方法を講ずる。ねえ、アリョーシヤ、事によつたら、僕はそれまで生き永らへるか、或ひはそれを見るために甦つて来るかして、實際に自分の眼で、わが子の仇敵と抱き合つてゐる母親の姿を見ながら、一同と共に、『主よ、汝の言葉は正しかりき！』と叫ぶことが出来るかも知れない。が、僕はその時にもそれを叫びたくはないのだ。まだ時日のある間に僕は急いで自分自身を防衛する。従つて、より高き調和などは平に御辭退申しあげるよ。そんな調和は、あの臭い牢屋の中で小さな拳を固めて、われとわが胸を叩きながら、贖はれることのない涙を流して、『神ちやま』と祈つた哀れな女の子の一滴の涙にすら値しないからだ！ なぜ値しないかといへば、それはこの涙が贖はれることなしに打ち棄てられてゐるからだ。この涙は必ず贖はれなくてはならない、さもなければ調和などといふものはあり得ない。ただ、何によつて、何をもつて贖はうといふのだ？ 一體それは可能なことであらうか？ 復讐によつて贖はれるといふのか？ でも、僕には復讐なんか用はない、暴虐者のための地獄など、何になるんだ。すでに罪なき者が苦しめられてしまつた曉に、地獄なんかは何の助けになるんだ！ 第一、地獄が存在してゐてどんな調和があるんだ。僕は許したいのだ、抱擁したいのだ、人間がこれ以上苦しむことを欲しないのだ。若しも子供の苦悶が眞理の贖ひに必要なだけの苦悶の定量を充たすために必要だといふなら、僕は前以つてきつぱり斷言しておく——一切の眞理もそれ



だけの代償に値しないと。それくらゐなら、母親がわが子を犬に引き裂かした暴君と、抱擁などしてくれなくつてもいいんだ！ 母親だつて、暴君を許す権利はないのだ！ 若しも強つて望むなら、自分だけの分を許すがいい、自分の、母親としての無量の苦痛だけを許してやるがいい。然るに八つ裂きにされたわが子の苦痛は、決して許す権利を持つてゐないのだ。たとひ、子供自身が許すといつても、その暴君を許す譯には行かないのだ！ 若しもさうならば——若しも誰もが許す権利を持つてゐないとするれば、一體どこに調和があり得るのだ？ 一體この世界に許すといふ権利を持つた人間がゐるだらうか？ 僕は調和は欲しくない、つまり、人類に對する愛のために欲しくないといふのだ。僕は寧ろ報復されたい苦悶をもつて終始したい。たとひ僕の考へが間違つてゐても、やるせない苦悶と、癒やされざる不満の境にとどまるのを潔しとする。それに調和といふ奴があまり高く値踏みされてゐるから、そんな入場料を拂ふことは、どうも僕らの懐ろ具合に合はないんだよ。だから僕は自分の入場券だけを急いでお返しする。僕が潔白な人間であるならば、できるだけ早くお返しするのが義務なんだよ。だから僕はそれを實行するのだ。ねえ、アリオーシヤ、僕は神様を承認しない譯ではない、ただ『調和』の入場券を謹んでお返しするだけのことだよ。」

「それは謀叛です。」と、アリオーシヤは眼を伏せながら小聲で言つた。

「謀叛？ 僕はお前からそんな言葉を聞きたくなかつたんだが。」と、イワンはしんみりした聲で言つた。「謀叛などで生きて行かれるかい、僕は生きて行きたいんだよ。さあ、僕はお前を名ざして訊くから、眞直ぐに返事をしてくれよ——いいかい。假りにだね、お前が最後において、人間を幸福にし、且

つ平和と安靜を興へる目的をもつて、人類の運命の塔を築いてゐるものとしたら、そのためにただ一つの小つばけな生き物を——例のいたいたな拳を固めて自分の胸を打つた女の子でもいい——是が非でも苦しめなければならぬ、この子供の贖はれざる涙なしには、その塔を建てる事が出来ないと假定したら、お前は果してこんな條件で、その建築の技師となることを承諾するかえ？ さあ、偽らずに言つてくれ！」

「いいえ、承諾するわけには行きません。」と、アリオーシヤは小聲で答へた。

「それからね、世界の人間が、いたいけな受難者の何のいはずもない血潮のうへに打ち建てられたやうな幸福に甘んじて、永久に幸福を享受するだらうなんかといふやうな考へを、お前は平氣で認めることが出来るかい？」

「いや、できません。けど、兄さん、」と、アリオーシヤは急に眼を輝やかしながら、かう言ひだした。「兄さんは今、許すといふ権利を持つたものが、この世の中にゐるだらうかと言ひましたね？ ところが、それがゐるんですよ。その人ならば一切のことに對して、凡ての人を許すことができます。それといふのも、その人はあの人に代つて、自分で自分の無辜の血を流したからです。兄さんはこの人のことを忘れてゐましたね。ところが、この人を基礎としてその塔は築かれるのです。この人にむかつてこそ、『主よ、汝の言葉は正しかりき、何となれば汝の道は開かれたればなり！』と叫びもすることです。」

「ああ、それは『罪なきただ一人』と、あの手の血のことだらう！ どうしてどうして、この人のこ



とを忘れはしなかつたよ。それどころか、どうしてこの人を引合ひに出さないのかと、長いあひだ不思議に思つてゐたんだよ。だつて大抵お前たちは論争の時には、何よりも先きに先づこの人を擔ぎ出すぢやないか。時にね、アリオーシャ、笑つちやいけないよ、僕はいつか一年ばかり前に劇詩を一つ作つたんだ。若しも、僕につき合つてもう十分間ほど暇を潰すことが出来るなら、一つお前に話して聴かしてもいいんだけど。」

「兄さんが劇詩を書いたんですつて？」

「ううん、どうしてどうして、」と、イワンは笑ひ出した、「今までに、嘗て二行と詩なんか書いたことはなかつたんだが。その劇詩はただ頭の中で考へて、今もなほ覚えてゐるといふだけの話だ。しかし、熱心に考へたものだよ。お前は僕の最初の讀者、いやいや、聴き手なんだ。全く作者にとつてはたつた一人でも聴き手は取り逃がしたくないもんだからな。」とイワンは薄ら笑ひをもらした。「話さうか、どうしようかな？」

「僕は喜んで聴きますよ。」とアリオーシャは言つた。

「僕の劇詩は『大審問官』といふんだ。馬鹿々々しい物だけれど、お前に聴いて貰ひたいんだよ。」

## 大審問官

「ところで、これには、前置きを省く譯には行かないんだよ、つまり、文學的序文といふ奴をな、ふん、」とイワンは笑つた、「それにしても、大した作者になつたものだ！ さて、舞臺は十六世紀に起こつたことになつてゐるんだが。それは丁度あの、——尤もこんなことはお前も學校で習つて、ちやんと知つてる話だが、——詩の中で、天上界の力を地上へ引きおろすことが流行した時代なんだ。ダンテのことは言はずもがな。佛蘭西では裁判所の書記や修院の坊さんが、マドンナや、聖徒や、キリストや、神様御自身までも舞臺へ引つ張り出して、いろんな芝居をやらせたものだ。當時はそれがすべて至極單純に取り扱はれてゐたものだ。ユゴオの *Notre-Dame de Paris* のなかには、ルイ十一世の時代に王子誕生祝賀のため、巴里の市會議事堂で *Le bon jugement de la très sainte et gracieuse Vierge Marie* いと聖潔にして優しき、麗女マリヤの聖なる裁判 といふ外題の教化的な演劇が、人民のために無料で公開されたことが書いてある。この劇では、聖母がみづから舞臺に現はれて、その所謂 *bon jugement* を宣告することになつてゐるのだ。露西亞でもピョートル大帝以前の昔には主として舊約聖書から題材を採つた同じやうな劇が、や



はり時々演ぜられてゐたんだが、かうした演劇のほかにも、作中に聖徒や、天使や、あらゆる天國の力を必要に應じて活躍させた、いろんな小説や『詩』が世上に現れたものだ。露西亞の修院でもやはりさうした物語の翻譯をやつたり、寫本をとつたり、中には創作にまで手を出す者があつたけれど、しかも、それが韃靼侵入時代のことなんだからな、その一例として、ある修院で出來た（と言つても、無論、希臘語からの翻譯だが）小劇詩に、『聖母の苦難の路』といふのがあるが、それはダンテにも劣らぬ大膽な場面の描寫に充ちてゐる。聖母が大天使ミハイルに導かれて、地獄の中の苦難の中を遍歴する。そして聖母が罪人やその苦難を目撃するのだ。その中に、火の湖におとされてゐる、實に凄まじい罪人の一群がある。その連中のなかには、火の湖の底深く沈んで、もはや浮かびあがることができず、つひに『神様にも忘れられる』罪人もあるのだ。——實に深刻な力強い表現ぢやないかよ。そこで聖母はそれを見て驚ろき悲しみながら、神の御座の前に身を伏せて、地獄におちたすべての人——彼女の目撃したすべての罪人に對して一切平等に憐憫を垂れ給へと哀願する。この聖母と神との對話が非常に興味があるんだ。聖母は一心に哀願して、傍らを離れようとしな。神はその子キリストの釘づけにされた手足を指して訊ねる、『彼を苦しめた者どもを、どうして許すことができようぞ？』聖母はすべての聖者、すべての殉教者、すべての天使、すべての大天使にむかつて、自分と共に神の御前にひれ伏して、あらゆる罪人の平等なる赦免を哀願してくれと頼むのだ。そこで、結局、聖母は神から毎年神聖金曜日から三位一體祭までの間の五十日間、すべての苦患を中止するといふ許しを得る。すると、罪人たちは地獄の底から主に感謝して、『主よ、かく裁きたる汝は正し』と叫ぶのだ。ところで、僕の劇詩としても、

そのところに現はれたとしたら、これと同じ部類に屬したことでつたらうよ。僕の劇詩でも、キリストが舞臺へ出て來るが、何にも言はずに、ただ現はれるだけで、通り過ぎてしまふのだ。彼が『われ速かに來らん』と言つて、みづからの王國へ再び出現すると約束してから、もう十五世紀もたつてゐる。『われその日と時を知らず、神の子自らも知らざるなり、ただ天にましますその父のみ知り給ふ。』と豫言者もするし、キリスト自身もまだ地上に生きてゐる頃かう言つた時からだ。だが、しかし、人類は以前と同じ不變の信仰と不變の感激をもつて彼の出現を待つてゐる。おお、更に大きな信仰をもつて待つてゐるのだ。何しろ人間が天國からの證しを見なくなつてから、もう十五世紀も経つてゐるんだよ。

信ぜよ胸のささやきを

天よりの證し今はなければ、

胸のささやきを信するよりほかない譯だよ！尤もその當時にも多くの奇蹟があつたのは事實だ。奇蹟的な治療を行つた聖者もあつたし、その傳記によれば、聖母の訪れを受けたやうな人々もあつた。しかし、惡魔も居眠りをしてはゐなかつたから、これらの奇蹟の眞實さを疑ふ者が、人類の中に現はれ出したのだ。丁度その頃、北方ゲルマニヤに怖ろしい邪教が現はれた。『燃火のごとき』（つまり教會の如きだ）大いなる星が『水の源泉におちて水は苦くなりぬ』だ。これらの邪教が不敵にも奇蹟を否定し始めたのだ。しかし、信仰に残つた人々は、更に熱烈に信じつづけに行つた。人類の涙が天國のキリストの許まで昇つて行つて、依然として彼を待ち彼を愛くしみ、相も變らず彼に望みをつないで、神のためには苦しみ且つ死ぬべく憧れてゐたのだ。……かうして幾世紀も、幾世紀も人類が信仰と熱情をもつて、



「おお、主なる神よ、夙くわれらに現はれ給へ」と祈念したため、宏大無邊の慈悲をもたれたキリストは、つひに祈れる人々のところへ天降つてやろう、といふ御心になつたのだ。その前にも彼は天國を降つて、まだこの地上に生きてゐた義人や、殉教者や、氣高い隠者たちを訪れたといふことは、それらの人たちの傳記にも見えてゐる。わが國でも、自分の言草の眞實を深く信じきつてゐたチユツチエフがこんな風に歌つてゐる。

十字架の重荷に惱まされ、

奴隷のすがたに身をやつし、ああ、生みの地よ、

主キリストは、汝が土のいやはてまでも、

祝福を垂れ給ひつつ、ゆかせ給ひぬ

それは實際その通りだつたに違ひない、まつたくだ。そこで、キリストはほんのちよつとでも、人類のところへ降つてやろうといふ御心を起したんだよ、暗い罪に陥つて、苦しみ悩みながらも幼児のやうに彼を愛慕してゐる人類のところへさ、僕の作は西班牙のセギリヤを舞臺にとつて、神の榮光のために日毎に國內に炬火が燃えて、

華麗なる火刑の庭に

おぞましき異教の者の烙かれたる

怖ろしい宗教裁判の時のことを扱つたものなんだ。勿論、このキリスト降臨は、彼が嘗て約束したやうに天國の榮光につつまれて、最後に出現したのとは全然、ちがつてゐる。決して、東から西へと輝き

わたる、稲妻のやうな出現ではないんだ、キリストはほんの一瞬間でもいいから、わが子らを訪れて見ようと思つたのだ。そして、故らに異教の輩を烙く炬火の爆音のすさまじい土地を選んだ譯なのだ。きはまらない慈愛をもつたキリストは、十五世紀前に三十三年の間、人類の間を歩きまはつた時と同じ人間の姿をかりて、もう一度、民衆の中へ現はれたのだ。彼は南方の市の『熱き巷』へ降臨したが、それは丁度、『華麗なる火刑の庭』で、殆んど百人に近い異教徒が、*ad majorem gloriam Dei* 神の榮光を大にらしめんがため國王をはじめ、朝臣や、騎士や、僧正や、艶麗な女官や、その他セギリヤの全市民の眼の前で、大審問官の僧正の指揮のもとに、一舉に烙き殺された翌くる日であつた。キリストはこつそりと、人知れず姿を現はしたのだが、人々は——不思議なことに、——キリストだと直ぐに感づいてしまふ、ここが僕の劇詩の中で優れた部分の一つなんだ、——つまり、どうして人々がそれを感づくかといふところがさ。民衆は不可抗力に引きずられて、彼の方へとつと押し寄せたかと思ふと、忽ちにしてそのまはりを取り圍み、次第に厚い垣を築きながら、その後ろに隨いてゆくのだ。彼はかきりない憐憫の微笑みを靜かにたたへながら、黙々として群衆の中を進んで行く、愛の太陽はその胸に燃え、光明と力とはその眼から迸り、その輝やきが人々の上に照り渡り、彼らの心はそれに應へるやうな愛に傾く。キリストは人々の方へ手をさし伸べて祝福を與へたが、その體どころか、着物の端に觸れただけで、すべてのものを癒やす力が生ずるのだつた。と、その時、幼少からの盲目であつた一人の老人が群衆の中から、『主よ、わたくしをお癒し下さりませ、さすれば、あなた様を拜むことができます』と叫んだのだ。と、忽ち

\* 外交官として水らく船通にくらしてゐた威爾遜の詩人。露西亞皇族の先帝と見做されてゐる。一八〇三—七三。(譯者註)



限から隣でも落ちたやうに、盲人には主の顔が見えるやうになつた。民衆は泣きながら、彼の踏んで行く土を接吻する。子供たちは彼の前に花を投げて、歌をうたひながら、『ホザオ！』を叫ぶ。『これはキリスト様だ、キリスト御自身だ、』とみんなが繰りかへす。『これはキリスト様に違ひない、キリスト様でなくて誰だらう？』彼はふと、セザリヤ寺院の入口に立ちどまつた。ちやうどその時、蓋をしない小さな白い棺が泣き聲に送られて寺院へかつぎ込まれるところだつた。その棺には、ある有名な市民の一人娘で、七つになる女の子が眠つてゐた。その幼い死骸は花に埋まつてゐる。『あのお方が、あなたの子供さんを生き返らして下さりませ、』と、悲嘆にくれた母にむかつて、群衆の中から叫ぶ聲が聞こえた。棺を迎へに出た寺僧は怪訝な顔をして眉を蹙めながら、それを眺めてゐる。すると、その時、死んだ子供の母のけたたましい叫び聲が聞こえる。彼女は主の足許へ身を投げて、『もし主キリストでいらつしやいますならば、この子を生き返らせて下さいませ。』と彼の方へ両手を差し伸べながら、叫ぶのだ。葬列は立ち止つて、棺は寺の入口へ——彼の足許へおろされた。彼は憐憫の眼でそれを見まもつてゐたが、その口は静かに、あの『タリタ・クミ』(少女よ、われ汝にいとこよ)をいま一度くり繰返した。すると、娘は棺の中で起きあがつて坐ると、びつくりしたやうな眼を大きく見開いて、にこにここと邊りを見廻す。その手には白薔薇の花束が握られてゐたが、それは彼女と共に棺の中へ入れてあつたものだ。群衆の間には動揺と叫喚と嗚咽が起こる。この瞬間、寺院の横の廣場を、大審問官である僧正が通りかかる。それは殆んど九十に近い老人で、脊の高い腰のしやんとした人で、顔は瘦せこけ眼は落ち窪んでゐるが、その中にはまだ火花のやうな光りがひらめいてゐる。彼の着物はきのふ羅馬教の敝を焙いたときに、人

民のまへで着てゐたやうな、きらびやかな大僧正の袍衣ではなく、古い粗末な法衣であつた。その後ろからは陰氣な顔をした補祭や、奴隷や、『神聖な』警護の士などが、かなりの距離をおいてつづいてゐた。僧正は群衆の前に立ちどまると、遠くから様子を眺めてゐた。彼は何もかも見てしまつたのだ、キリストの足許へおろされて女の子が蘇つたのを見たのだ、そして彼の顔は暗くなつた。その白い濃い眉は撃められ、眼は不吉な火花を散らし始めた。彼はその指を伸して、警護の士にむかひ、かの者を召し捕れと命令した。彼はそれ程の権力を持ち、群衆はあくまでも従順にしつけられ、戦々兢兢として彼の命に服することに馴らされてゐたので、さつと警護の者に通路をあけた。そして、急にしいんと墓場のやうに静まり返つた沈黙の中で警護の者はキリストに手をかけて引き立てて行く。群衆はまるでただ一人の人間のやうに、一せいに土下座せぬばかりに老審問官の前にひれ伏す。彼は無言のまま一同を祝福しつゝ通り過ぎて行く。警護の者は囚人を神聖裁判所の古い建物内にある、陰氣で狭苦しい圓天井の牢屋へ引つたてて來ると、その中へ監禁してしまつた。その日も暮れて、暗くて暑い、『死せるが如き』セザリヤの夜が訪れた。空氣は『月桂樹とレモンの香に匂つて』ゐる。深い闇の中で、不意に牢獄の鐵扉があいて、老審問官が手に灯りを持つて、そろそろと牢屋の中へはいつて來た。彼はたつた一人きりで、扉はすぐに閉ざされた。彼は入口に立ち止ると、暫らくの間、一分か二分、じつとキリストの顔に見入つてゐた。たうとう静かに傍へ近寄つて、灯りを卓の上に載せると、口をきつた。『そこに御座るのはキリストかな？ キリストかな？』しかし何の答へもないので、直ぐに又つけ足した。『返事はしないがいい。黙つてをるがいい。それにお前は何を言ふことができよう？ わしにはお前のいふこと



が分り過ぎるくらゐ分かつてゐるのだ。それにお前は、もう昔、いつてしまったことより外には何一ついひ足す権利も持つてゐないのだ。それにしても、なぜお前はわしらの邪魔をしに來たのだ？ お前はわしらの邪魔をしに來たのだ。それはお前にも分かつてゐる筈だ。しかし、お前は明日どんなことが起こるか知つてゐるかな？ わしはお前が何者かは知らぬ、また知りたくもない。お前が本當のキリストか、それとも贖者か、そんなことはどうでもよい、とにかく、明日はお前を裁判して、邪教徒の極悪人として火烙りにしてしまふのだ。すると今日お前の足を接吻した民衆が、明日は、わしがちよつと合圖をしさへすれば、お前を烙く火の中へ、われ勝ちに炭を掻きこむことだらう、お前はそれを知つてゐるのか？ 恐らく知つてゐられるであらうな。」と彼は片時も囚人から眼を離さうとしないで、考へ込むやうな風に、かう言ひ足したのだ。

「僕には何のことだかよく分りませんよ、兄さん、一體それは何のことですか？」と黙つて聞いてゐたアリョーシャは、微笑みながら、かう訊ねた、「それはただ出鱈目な妄想なんですか、それとも何か老人の考へ違ひなんですか？ 何だか本當にはなさうな、*qui pro quo*（誰が）ぢやありませんか。」  
「ぢや、さうしておくさ。」とイワンは笑ひ出した、「若しも、お前が現代のリアリズムに心酔してゐて、幻想的なことには全然我慢することができないで、それを *qui pro quo* と考へたいといふんなら、まあ、そんなことにしといてもいいよ、ほんとに、」と彼はまた笑つた、「その老人はもう九十といふ年なんだから、いい加減にもう氣ちがひじみた觀念になつてゐるかも知れない。それに囚人の風貌だつて老人の心を打つた筈だからな。いや、ことによつたら、それは九十になる老人の自慰の際の謔言かも知

れない。幻想かも知れない。おまけにきのふ火刑場で百人からの異教徒を烙き殺したため、まだ氣が立つてるのかも知れないよ、しかし、僕にとつても、お前にとつても、*qui pro quo* だらうが、出鱈目な妄想だらうが、それはどうせ同じことぢやないかな、要するに、老人は自分の腹の中を、すつかり吐き出してしまひたかつただけの話だ。九十年の間、だまつて腹の中に藏つてゐたことを、すつかり吐き出してしまひたかつただけの話さ。」

「で、囚人はやつぱり黙つてゐるんですか？ 相手の顔を見つめながら、一言も口をきかないのですか？」

「それや、さうなくつちやならないよ、どんな場合でもね。」と、イワンはまた笑ひ出した、「老人は自分から、キリストは昔いつてしまつたこと以外には、何一ついひ足す権利を持つてゐないと斷言してゐるぢやないか。何なら、その中にローマン・カトリックの最も根本的な本質が含まれてゐるといつてもいいくらゐだ、少くとも僕の意見ではね。『もうお前は一切のことを法王に任せてしまつたのぢやないか、今は一切が法王の手に握られてゐるのだ、だから、今ごろになつて、のこのこ出て來ることだつて、よして貰ひたいものだ、少くとも、ある時期までは邪魔をして貰ひたくはない。』と、かういふのさ。こんな意味のことを少くともエズイタ派の連中は、口でいふばかりではなく、本にまで書いてゐるのだよ。僕は自分でもこの派の神學者の書いたものを讀んだことがある。『一體お前は、自分が出て來たあの世の秘密を、たとひ一つでもわれわれに傳へる権利をもつてゐるのか？』と大審問官はキリストに訊ねておいて、すぐ自分で彼に代つて答へたのだ、『いや、少しも、もつてゐない。それはお前が前にい



つた言葉に、何一つつけ足すことができないためだ。それは、お前がまだこの地上にをつた頃、あれほど主張した自由を、人民から奪はないためだ。お前が、今新しく傳へようとしてゐることは、すべて人民の信仰の自由を犯すものだ。なぜならば、それは奇蹟として現はれるから。しかも、人民の自由は、まだあの頃から、千五百年も前から、お前にとつては何より大切なものだつたではないか、あの當時、「われ汝らを自由にせん」と、よく言つてゐたのはお前ではなかつたか、ところが今、お前は彼らの「自由な」姿を見たのではないのか。」と、物思はしげな薄ら笑ひをうかべながら、老人は急にかう言ひ足したのだ。「ああ、この事業はわれわれにとつて高價なものについた」いかめしい眼眸で相手を見つめながら、彼は言葉をつづけて、「だが、いまわれわれはお前の名によつて、この事業を完成した。十五世紀の間、われわれはこの自由のために苦しんで来たが、やつと今は完成した。立派に完成した、お前は立派に完成したといつても本當にはしないだらうな？ お前はつつましやかにわしを見つめたまま、憤慨するのも大人氣ないといふやうな顔をしてをる、しかし、人民は今、いつにもまして、現に今、自分たちが完全に自由になつたと信じてをるのだ。しかも、その自由を、彼らは自から進んでわれわれに捧げてくれた。そして、懇ろにわれわれの足許へそれを置いてくれたのだ。けれど、それを成し遂げたのはわれわれなのだ。そしてお前が望んだのはこんなことではなかつたのかい、こんな自由ではなかつたのか」といつたのだ。」

「僕は、また分からなくなりましたよ。」とアリオーシャが遮つた、「老人は皮肉を言つてゐるんですか、嘲つてゐるんですか？」

「決してさうぢやないんだ、彼はつひに自由を征服して、人民を幸福にしてやつたのを、自分や仲間の手柄だと思つてゐるのさ。『なぜなら、今、(勿論、彼は審問のことを言つてゐるんだよ) はじめて人間の幸福を考へることができるようになつたからだ。人間はもともと反逆者にできあがつてをるのだが、反逆者が幸福になると思ふか？ お前はよく警告を受けた——と彼はキリストに向つて言つたのだよ——お前は注意や警告を飽くほど聴かされながら、それに耳を藉さないで、人間を幸福にすることのできる唯一の方法を斥けてしまつたではないか。しかし、仕合せにも、お前がこの世を去るときに、自分の事業をわれわれに引き渡して行つた。お前はその口から誓つて、人間を結びつけたり解いたりする権利をわれわれに授けてくれた。だから、勿論、今となつては、その権利はわれわれから取りあげるといふ譯には行かぬ。何のためにお前はわれわれの邪魔をしに來たのだ？』」

「注意や警告を飽くほど受けた、といふのは一體何のこととせう？」と、アリオーシャは訊いた。

「そこが老人のいほうとした肝腎な點なんだよ。」

「『怖ろしくして、しかも賢明なる精靈が』と老人は語り続けるのだ、『自滅と虚無の精靈——偉大なるあの精靈が、荒野でお前と問答をしたことがあるだらう、書物に書いてあるところでは、それがお前を(試みた)ことになるのださうだ。それは本當のことかな？ しかし、その精靈が三つの問ひの中でお前に告げて、お前に否定せられたあの、書物の中で(試み)と呼ばれてゐる言葉以上に、より眞實なことが何か言ひ得られるだらう？ もしいつかこの地上で、本當に偉大な奇蹟が行はれる時があるとすれば、それこそあの三つの試みの中に奇蹟が含まれてゐるのだ。もし假りにこの怖ろしき精靈の三つの問



ひが、書物の中から跡かたもなく消失してしまつたとして、再びこれを元どほり書物の中へ書き入れるため新たに考案して書き上げねばならなくなつたとする。そのために世界の賢人——政治家、長老、學者、哲人、詩人などを呼び集めて、さあ三つの問ひを工夫して作り出してくれ、しかし、それは事件の偉大さに適合してゐるのみならず、ただ三つの言葉でもつて、三つの人間の言葉でもつて、世界と人類の未來史を悉く表現してゐなくてはならぬ、といふ問題を提出したとする。さうしたら世界ぢゆうの智恵を一束にしてみたところで、力と深みにおいて、かの強くて賢い精靈が荒野でお前に發した、三つの問ひに匹敵するやうなものを考へ出すことが果してできるかどうか、それはお前にだつて分かりさうなものではないか？ この三つの問ひだけから判断しても、その實現の奇蹟だから判断しても、移りゆく人間の智恵でなくて、絶對不滅の叡智を向ふに廻してゐる、といふことが分かるではないか。なぜなら、この三つの問ひの中に人間の未來の全歴史が、完全なる一箇のものとなつて凝結してゐる上に、地上に於ける人間性の歴史的矛盾を悉く包含した、三つの形態が現はれてゐるからである。勿論、未來を測り知ることとはできないから、その當時こそ、それはよく分からなかつただけけれど、それから十五世紀を経た今日になつて見れば、もはや抜き差しならぬほど完全に、この三つの問ひの中に一切のことが想像され、豫言されて、しかもその豫言が悉く的中してゐることが、よく分かるではないか。

『一體どちらが正しいか、自分で考へて見るがよい——お前自身か、それともあの時お前に質問をしたものか？ 第一の問ひはどうだらう、言葉は違ふかも知れぬが、かういふ意味だつた。(お前は世の中へ行かうとしてゐる、しかも自由の約束とやらを持つたきりで、空手で出かけようとしてゐる。しか

し生來單純で粗野な人間は、その約束の意味を悟ることができないで、かへつて怖れてゐる。なぜなら、人間や人間社會にとつて、自由ほど堪へ難いものは他にないからである！ このむき出しになつて焼け果てた荒野の石を見よ。もしお前がこの石を麵麩に變へることができたら、人類は上品で従順な羊の群れのやうに、お前の後を追ふだらう、さうしてお前が手を引いて、麵麩を呉れなくなりませぬか、とこのことばかりを氣遣つて、絶えず戦々兢兢としてをるに違ひないぞ。』と云つた。ところが、お前は人民の自由を奪ふことを欲しないで、その申し出でを斥けてしまつた。お前は、もし服従が麵麩で購はれたものならば、どうして自由が存在し得るか、といふ考へだつたのだ。その時お前は人は麵麩のみにて生くるものに非ずと答へたが、しかし、この地上の麵麩の名をもつて、地の精靈がお前に反旗を翻し、お前と戦つて勝利を博するのだ。そしてすべての者は、(この獸に似たるものこそ、天より火を盗みてわれらに與へたるものなり)と絶叫しながら、その後を随つて行くのをお前は知らないのか。永い年月の後に、人類は己れの智恵と科學の口を藉りて、犯罪もなければ、罪障もない、ただ飢ゑたる者があるばかりだ、と公言するだらうことをお前は知らないのか。(食を與へよ、然る後われらに善行を求めよ！)と書いた旗を押し立てて、人々はお前に向かつて暴動を起す。そしてその旗がお前の寺を破壊するのだ。お前の寺の跡には、やがて新しい建築ができる。そして更に怖ろしいパピロンの塔が築かれるのだ。尤も、この塔も以前の塔と同じやうに落成することはあるまいが、それにしても、お前は新しい塔の建築を差し止めて、人類の苦痛を千年だけ短縮することができると言ふのだ。なぜならば、彼らは千年の間、自分の塔のために苦しみ通した擧句、われわれの處へ歸つて來るに違ひないからだ！ そのと



き彼らは再び地下の墓穴の中に隠れてゐるわれわれを捜し出すだらう。(われわれは再び迫害を受け、苦しめられるからだ)、彼らは捜し出したらわれわれにむかつて、(わたくし共に食物を下さい、わたくし共に天國の火を取つて来てやると約束した者が、嘘をついたのです)と絶叫するだらう。その時、はじめてわれわれが彼らの塔を落成させてやるのだ。なぜなら、それを落成させることのできるのは、彼らに食を與へるもののみで、われわれはお前の名をもつて、彼らに食を與へてやるからだ。しかしお前の名をもつてと言ふのは、ほんの出来かせに過ぎないのだ。さうとも、われわれがゐなかつたら、彼らは永久に食を得ることができないのだ！ 彼らが自由である間は、いかなる科學でも彼らに麵麩を與へることができない、結局、彼らは自分の自由をわれわれの足許に投げ出して、(わたくし共に奴隷になすつても構ひませんから、どうか食べ物を下さい、)といふやうになるだらう。つまり、自由と麵麩とは如何なる人間にとつても、兩立し難いことを、彼らは自から悟るだらう。實際どんなことがあつても、決して彼らは自分たちの間で、うまく分配するといふことができないに決まつてゐるから、また彼らは無力で、不徳で、無價値な暴徒に過ぎないのだから、決して自由になり得ないことも悟るだらう。お前は彼らに天上の麵麩を約束したが、何度も繰り返すやうだが、果してあの無力で、永久に不徳な、永久に下種ばつた人間の眼から見て、天上の麵麩が地上の麵麩と比べものになるだらうか？ よし幾千萬の人間が、天上の麵麩が欲しさに、お前の後からついて行くにしても、天上の麵麩のために地上の麵麩を棄てることのできない幾百幾千萬の人間は、一體どうなるといふのだ？ それともお前に大切なのは、立派な、力強い幾萬かの人間だけで、その他の弱い、けれどもお前を愛してゐる幾百萬の人間、いや、

濱の眞砂のやうに數へ切れない人間は、偉れた力強い人間の材料とならなければならぬといふのか？ いや、われわれには弱い人間も大切なのだ、彼らは不徳漢で反逆者ではあつても、最後には却つてかういふ人間が從順になるのだ。彼らはわれわれに感嘆して、神とまで崇めるに至るだらう。なぜならば、われわれは彼らの先頭に立つて、彼らの怖れてゐる自由に甘んじて堪へて、彼らの上に君臨することを諾ふからだ。かくして、結局、彼らは、自由になることを怖ろしいと感じだすに違ひない！ しかしわれわれは彼らに向かつて、自分たちもやはりキリストに從順なものだから、お前たちの上に君臨するのはキリストの御名によるのだ。と言つて聞かせる。かうしてわれわれはまた彼らを欺くが、もはや斷じてお前を自分たちの傍へ近づけはしないのだ。この偽りのなかにわれわれの苦惱がある。しかもわれわれは偽らざるを得ないのだ。荒野における第一の間ひはかういふ意味を持つてゐるのだ。お前は自分が何にも増して尊重した自由のために、これだけの物を拒否したのだ。更に、この問題のうちには、この世界の大きな謎が潜んでゐるのだ。お前がもし『地上の麵麩』を受け容れたなら、個人および全人類に共通な永遠の悩み、——(何人を崇拜すべきか？)といふ疑問に對して、回答を與へることになつたのだ。自由になつた人間にとつて、最も苦しい、しかも絶え間なき問題は、一刻も早く自分の崇むべき者を捜し出すことである。しかし、人間といふ者は議論の餘地なく崇拜に値する者を求めてゐる、萬人盡く打ち揃つて、一時にその前に跪き拜し得るやうな、絶對的に崇むるに足る對象を求めてゐるのだ。これらの哀れな被造物の心勞は、めいめい勝手な崇拜の對象を求めただけではなく、萬人が信服してその前に跪くことのできるやうな者を捜し出すことにあるのだ。どうしても、(すべての人と一しよ)でなければ



ば承知しないのだ。この共通な崇拜の要求が、この世の初まりから、各個人および全人類のおもなる苦惱となつてゐる。崇拜の共通といふことのために、彼らは互ひに劍をもつて殺戮し合つた。彼らは各々の神を創り出して互ひに招き合つてゐる。つまり、(お前たちの神を崇めないか、さうしなければ、お前たちもお前たちの神も死あるのみだぞ!)といふのだ。これは世界の終るまでこの通りだ。神といふものが地上から消え失せてしまつた時でも、やはり同じことだ。彼らは偶像の前にも、跪くだらうから。お前はこの人間性の根本の秘密を知つてゐたらう、いや知らない筈はない。ところが、お前はすべての人間を無條件で自分の前に跪かせるため、精霊がお前にすすめた唯一絶対の旗幟——つまり地上の麵麩といふ旗幟——を拒否したのだ、しかも天上の麵麩の名をもつて拒否したではないか。それから先きにお前はどんなことをしたか、考へてみるがよい。何事によらず、例によつて、自由の名をもつて行つたではないか! わしがお前に言つてをる通り、人間といふ哀れな生きものは、生れ落ちるとより授けられてゐる自由の賜物を、逸早く誰かに譲り渡さうとして、その相手を探し出すことに汲々としてゐて、この苦しみほど人間にとつて切實なものはないのだ。それにしても、人間の自由を支配し得るのは、彼の良心を安んずることのできる者に限ることだ。ところで、お前には麵麩といふ絶対的な旗幟が與へられたのだから、麵麩さへ與へれば、人間はお前の足許に跪くにきまつてゐる。なぜといつて、麵麩ほど確實なものはないからだ。が、若しその時、お前のほかに、人間の良心を支配する者が出現した暁には、——おお、その時こそは、お前の麵麩を棄てても、人間は自分の良心を籠絡する者に隨いて行くに違ひない。この場合においてはお前も正しかつたのだ。なぜなら、人間生活の神秘はただ生きるといふ

ことに存するから。何のために生きるかといふ確乎たる觀念がなかつたら、人間はたとへ周圍に麵麩の山を積まれても、生くることを樂しとせず、こんな地上にとどまるよりは、むしろ自殺の道を選んだに相違ない。これは確かにその通りだつたらう。ところが、實際はどうであつたか。お前は人間の自由を支配するどころか、かへつて一層彼らに自由を増してやつたではないか! それとも、お前は人間にとつて、安らひの方が時としては死でさへも、善悪の認識界に於ける自由の選擇よりは、遙かに高價なものであることを忘れたのか? それは、無論人間としては、良心の自由ほど愉快なものはないのだけれど、これほどまた惱ましいものもないのだ。然るに、お前は人間の良心を永久に慰める確乎たる根據を與へないで、ありとあらゆる異常な謎のやうな、しかも取り留めもない、人間の力にはそぐはぬ代物を取つて與へた。それ故、お前の行爲は全然人類を愛することなくして、行つたと同じ結果になつてしまつた、しかも、それが誰かといへば、人類のために一命を投げ出した人なのだ! お前は人間の自由を支配しようとして、却つてその自由を多くして、その苦惱によつて永久に、人間の心の王國の負擔を多くしてやつたではないか。お前は自分で嫉かして俘こにした人間が、自由意志でお前に隨いて來るために、人間に自由の愛を求めたのだ。人間はこれからさき、確乎たる古代の掟を棄てて、自分の自由意志によつて何が善で何が悪であるかを、一人で決めなければならなくなつた。しかも、その指導者としては、お前の姿が彼らの前にあるだけなのだ。だがお前はこんなことを考へはしなかつたか、——若しも、選擇の自由といふやうな、怖ろしい重荷が人間を壓迫するとすれば、つひにはお前の姿やお前の眞理を排斥するに至る。そして(眞理はキリストの中にはない)と叫ぶやうになる。といふのは、お前



があまりに多くの心勞と、とても解決のできない問題を課したため、人間は困惑と苦痛の中にとり残されたからだ。實際、これ以上に慘酷なことはとてもできるものではない。かうしてお前は自分で自分の王國の崩壊する根本を作つたのだから、誰も他人を咎めることはできない。とはいへ、お前がすすめられたのは、果してこんなことであつたらうか？ここに三つの力がある。つまり、これらの意氣地ない反逆者の良心を、彼らの幸福のため永久に征服して、俘にすることのできる力は、この地上にたつた三つよりないのだ。その力といふのは、奇蹟と神秘と政權である。お前は第一も第二も第三も拒否して、自らその先例を作つた。あの怖ろしくも、おぞましい精靈が、お前を宮殿の頂きに立たせて、(若しも、お前が神の子か否かを知りたいなら、試みに下へ飛んで見よ。なぜなら、下へ落ちて身を粉碎しないやうに、途中で天使に受けとめて貰ふ人の話が本にも書いてあるから、その時お前は自分が神の子かどうかを知ることができるし、天なる父に對するお前の信仰のほども知れる譯だ。)しかし、お前はそれを聞くと、そのすすめを斥け、かかる術策に引つかかつて下へ身を投げるやうなことをしなかつた。それは勿論、お前は神としての誇りを保つて、立派に振舞つたに違ひない。しかし人間は——あの意氣地の無い反逆者の種族は決して神ではないからな。おお、勿論あの時、お前がたつた一足でも前へ進み出て、下へ身を投ずる構へだけでもしたのなら、神を試みたことになつて、忽ちすべての信仰を失ひ、お前が救ふためにやつて來た土に當つて粉碎し、お前を誘惑した惻しい精靈を悦ばしたに違ひない、わしはそれを知つてゐたのだ。が、くり返して言ふが、一體お前のやうな人間が澤山にゐるだらうか？このやうな誘惑を持ちこたへる力がほかの人間にもあるなどと、お前は本當にただの一分間でも考へること

ができたか？人間の本性といふものは、奇蹟を否定するやうにはできてゐないのだ。況んや、そのやうな生死に關する怖ろしい瞬間に、——最も怖ろしい、根本的な、苦しい精神的疑問の湧き起つた瞬間に、自由な心の決定にのみ頼つて行くやうにはできてゐないのだ。お前は自分の言行が書物に記録されて、時の極み、地の果てまで傳へられることを知つてゐたので、すべての人間も自分の例に倣つて、奇蹟を必要としないで神と共に暮らすだらう、そんなことを當てにしてゐたのだ。けれども、人間は奇蹟を否定すると同時に、直ちに神をも否定する。なぜならば、人間は神よりも寧ろ奇蹟を求めてゐるのだから、——この理をお前は知らなかつたのだ。人間といふものは奇蹟なくして生きることができないから、自分で勝手に新しい奇蹟を作り出して、果ては祈禱師の奇蹟や、巫女の妖術まで信ずるやうになる。そして相手が百倍もひどい悪黨で、邪教徒で、不信心者であつても意としないのだ。お前は多くの者が、(十字架から下りてみる、さうしたらお前が神であることを信じてやる)と、冷かし半分に揶揄つた時、お前は十字架からおりて來なかつた。つまり、又しても人間を奇蹟の奴隸にすることを潔しとせず、自由な信仰を渴望したから、下りなかつたのだ。お前は自由な愛を渴望したが、怖ろしい偉力に依つて、凡人の心に奴隸的な歡喜を呼び起こしたくなかつたのだ。しかしお前は人間を餘りに高く見積り過ぎたのだ。それは天性彼らは暴徒にでき上つてゐても、やはり奴隸に違ひないからだ。まあよく觀察して判斷するがよい。もつ十五世紀も過ぎたのだから、よく人間を觀察するがよい。あんな奴らをお前は自分と同じ高さまで引き上げたのだ。わしは誓つて言ふが、人間はお前の考へたより、遙かに弱くて卑劣なものなのだ！一體お前のしたと同じことが人間にできると思ふのか？あんなに人間を尊敬し



たために、却つてお前の行爲は彼らに對して同情のないものになつてしまつたのだ。それはお前があまりにも多くのものを、彼らに要求したからである。これが人間を自分の身より以上に、愛した、お前のなすべきことといへるだらうか？ 若しもお前があれば彼らを尊敬さへしなかつたら、あれほど多くのものを要求もしなかつたらう。そしてこの方が遙かに愛に近かつたに違ひない。つまり人間の負擔も軽く済んだ譯だ。人間といふものは弱くて卑しいものだ。いま彼らは到るところで、われわれの教權に反抗して、それを誇りとしてゐるがそんなことは何でもない。それは赤ん坊か小學生の自慢だ。それは教室で騒動を起こして、教師を追ひ出す小つぼけな子供なのだ。しかし今にそんな子供らしい歡びは終りを告げて、それに對して彼らは高い支拂ひをしなければならぬ。彼らは寺院を破壊して地上に血を流すことだらう。しかし、結局はこの愚かな子供たちも、自分らは暴徒とは言つても、最後まで反抗を持續することのできない、意氣地ない暴徒に過ぎないことを悟るだらう。やがては、愚かな涙を流しながら、自分たちを暴徒として創つた者は、疑ひもなく自分たちを冷笑するためたと自覺するだらう。彼等がこんなことをいひ出すのは絶望に陥つた時、その言葉は神を冒瀆するものとなり、それによつて彼らは一そう不幸に陥るだらう。それは、人間の本性が到底、冒瀆を堪へ忍ぶことのできないもので、結局、自分で自分にその復讐をするに決まつてゐるからだ。かるが故に、不安と惑亂と不幸と——これがお前が彼らの自由のためにあれだけの苦しみを忍んだ後で彼らに與へられた、今の人間の運命なのだ！ お前の偉大なる豫言者はその幻想と譬喩の中で、最初の復活に參與したすべての人を見たが、その數はあらゆる種族を通じて一萬二千人づつあつたといつてをる。しかし、それほど多くの者がゐたとしても、

それは人間ではなくて神であつたといつてもいいくらゐだ。彼らはお前の十字架を堪へ忍び、荒れ果てた不毛の曠野の幾十年を、蝗と草の根によつて露命をつないで來たのだから、勿論、自由の子、自由な愛の子、お前の名のために自由と偉大なる犠牲となつた子として、大威張りでこれらの人々を指さすことができるだらう。しかし、考へても見るがいい。それはわづか數千人の、しかも神ともいふべき人間だけである。あとの人間はどうなるのだ？ さうした偉大な人々の堪へ忍んだことを、他の弱い人間が同じやうに堪へ忍ぶことができなかつたからとて、彼らに何の罪があらう？ そのやうな怖ろしい賜物を、うけ入れることができなかつたからとて、弱い魂を責める譯には行くまい。それともお前は、ただ選ばれた者のために、選ばれた者の許へ來たのに過ぎなかつたのか？ 假りにさうだとすれば、それこそ神秘で、もはや、われわれには分からないことだ。しかし本當に神秘だとすれば、われわれは神秘を傳道して、彼らに向かつて、一番肝要なものは良心の自由なる判断でもなければ、愛でもなく、ただ一つの神秘あるのみだ。すべての人間は自分の良心に叛いてまでも、この神秘に盲従しなければならぬと教へる權利を持つてゐる譯だ。實際われわれはその通りにして來た。われわれは、お前の事業を訂正して、それを奇蹟と神秘と教權の上に据ゑつけたのだ。すると民衆は、再び自分達を羊の群れのやうに導いてくれる者ができ、それほど彼らに苦痛を齎したあの怖ろしい贈物を、つひに取りのけて貰へる時が來たのを悦んだのだ。われわれがこんな風に教へたのは間違つてゐるかどうか、一つ聞かせて貰ひたい。われわれが柔しく人間の無力を察して、情けをもつて彼等の重荷をへらしてやり、弱い彼らの本性を、たとひそれが悪いことであつても大目に見て許してやつたのが、果して人類を愛したことに



ならぬのだらうか？ 一體お前は、今頃になつて何のためにわれわれの邪魔をしにやつて来たのだ？ どうしてお前は、その柔しい眼でじつと見抜くやうに、黙つてわれを見つめてをるのだ？ 怒るのなら勝手に怒るがよい、わしはお前の愛なんか欲しくはない、わしの方でもお前を愛してはゐないのだから。それにわしは、何もお前に隠しだてをする必要もない。それともわしが今、誰と話をしてゐるか、知らないと思ふのか？ わしが今はいはうと思つてゐることは、何もかもお前に分かつてゐる筈だ。それはお前の目つきでちゃんと讀める。しかし、わしはお前にわれわれの秘密を隠さうとは思はぬ。事によると、お前は是非わしの口からそれが聞きたいのかも知れぬ。それなら、聞かせてあげよう。われわれの仕事仲間はお前でなくて奴（悪魔）なのだ。これがわれわれの秘密だ！ われわれは既にずつと前から、もう八世紀の間もお前を棄てて、奴といつしよになつてゐるのだ。ちやうど八世紀以前、われわれは彼の手からお前が憤然として斥けなところのものを取つたのだ。それは地上の王國を示しながら、奴がお前に薦めた最後の賜物だつたのだ。われわれは彼の手から羅馬とシーザーの劍を取つて、われわれこそ地上の唯一の王者だと宣言したのだ。尤も、未だこの事業を十分に完成することはできなかったが、それはわれわれの罪ではない。この事業は今日に至るまで、ほんの初期の状態にあるけれど、とにかく、緒についてはゐるのだ。その完成はまだまだ長く待たねばならぬし、まだまだこの地球も多くの苦しみを嘗めなければならぬが、しかし結局、その目的を貫徹してわれわれは皇帝となり、やがては人類の世界的幸福を企てることのできるのだ。ところが、お前はまだあのときにシーザーの劍を取るこ

告を享け入れてゐたなら、人類が地上で探し求めてゐる一切のものを充たすことが出来た筈だ。言ひ換へれば、崇むべき人と良心を託すべき人と、すべての人が世界的に一致して、蟻塚のやうに結合する方法である。なぜといふのに、世界的結合の要求は、人間の第三にして且つ最後の苦惱だからである。全體としての人類は常に世界的に結合しようと努力してゐる。偉大な歴史を持つた偉大な國民が多くあつたにはあつたけれど、これらの國民は高い地歩を占めれば占めるほど、一層不幸になつて行くのだつた。といふのは人にすぐれて強い者ほど、人類の世界的結合の要求をより烈しく感じるからである。帖木兒や成吉思汗といふやうな偉大な征服者は、さながら旋風のやうに地上を席捲して、宇宙を併合しようとして努力した。そして、これらの人々も無意識にはあるが、やはり、人類の世界的結合の要求を表現したのだ。全世界とシーザーの紫いろの袍をとつてこそ、はじめて、世界的王國を建設して、宇宙的平和を設定することができるといふのに、人類の良心を支配し、且つ、人類の麵麩をその手に把握してゐる者でなくしては、人類を支配することができないからだ。われわれは勿論、お前を棄てて奴のあとについて行つた。おお、人類の自由な智慧と、科學と、人肉啖食の放肆きはまりなき時代が、まだこの上に幾世紀もつづくだらう。まさしく人肉啖食だ。なぜなら、彼らは、われわれの力をかりずして、バビロンの塔を建て始めたのだから、彼らはつひに人肉啖食で終るのは當然なのだ。しかし、最後には、この獸が、われわれの許へ這ひ寄つて、われわれの足を舐めまはしながら、血の涙を注ぐことだらう。そこで、われわれはその獸に跨つて杯を擧げる。そして、その杯には（神秘）と書かれてゐるだらう。しかし、その時になつて、はじめて平和と幸福の王國が人類を訪れるのだ。お前は自分の選ば



れた者ども以外にはないのだ。ところが、われわれは、凡ての者を懲はせることができる。まだまだそれ位のことではない、これらの選ばれたる者共や、選ばれたるものになり得る強者の多くは、もはやお前の出現を待ちくたびれて、自分の精神力や情熱をまるで見當ちがひの畠へ移してしまつてゐる。まだこれからも移して行くだらう。そして遂には、お前に叛いて自由の反旗を翻すに違ひない。しかし、お前自身もこの反旗を翻したではないか。ところが、われわれの方では萬人が幸福になつて、もはや反逆を企てるものも、互ひに殺傷しあふものもなくなるのだ。これに反して、お前の自由の世界では、それが随所に行はれてゐる。おお、われわれは、彼らがわれわれのために自分の自由を棄てて、われわれに服従した時、はじめて彼らは幸福になれるのだとよく皆の者に言ひ聴かしてやらう。ところで、どうだらう、われわれのいふことは正しいだらうか、正しくないだらうか？ いや彼ら自身でわれわれのいふことが正しいことを悟るに違ひない。それは、お前の自由のおかげで、どれほど怖ろしい奴隷状態と混亂に落されてゐたかを思ひ出しさへすれば充分だからな。自由だとか、自由な知慧だとか、科學だとかは、彼らを物凄い溪谷につれ込んで、怖ろしい奇蹟や、解き難い神秘の前に立たせるため、彼らのうち頑強で瘳猛な者は自殺してしまふし、頑固ではあつても弱い者は互ひに亡ぼし合ふだらう、その他の意氣地のない不仕合せな者たちは、われわれの足許へ這ひ寄つて、かう叫ぶのだ、(あなた方は正しうございませぬ。あなた方がキリストの神祕を持つていらつしやいます。でありますから、わたくしどもはあなた方のところへ歸ります。どうか、わたくしどもを自分自身から救つて下さいませぬ。)そこで、われわれは彼ら自身の獲た麵麩をその手から取り上げると、石を麵麩に變へるといふやうな奇蹟な

どは何も行はないで、再び彼等にそれを、分配してやる、彼らは麵麩を受け取る時に、このことをはつきり承知してゐるけれど、彼らが悦ぶのは麵麩そのものよりも、むしろ、それをわれわれの手から受け取るといふことなのだ！ なぜならば、以前われわれのみなかつた頃には、彼らの獲た麵麩がその手の中で石ころになつてしまつたが、われわれのところへ歸つて來てからは、その石がまた彼らの手の中で元の麵麩になつたことを、悟り過ぎるくらゐ悟つてゐるからである。永久に服従するといふことがどんな意味を持つてゐるかも、彼らは理解し過ぎるほど理解するに違ひない！ この理に合點のゆかぬ間は、彼らはいつまでも不幸なのだ。だが、これを彼らに知らさないやうにしたのは第一だれなのか、それが聞きたい。羊の群れを散り散りにして、不案内な道へ追ひやつたのは誰だ？ でも、羊の群れもまた再び呼び集められて、今度こそ永久に服従することだらう。その時になつて、われわれは彼らに穩かなつつましい幸福を授けてやる。彼らの本來の性質たる意氣地ない動物としての幸福を授けてやるのだ。おお、われわれは最後に彼らを説き伏せて、決して誇りをいだかないやうにしてやる。つまり、お前が彼らの位置を高めるために、彼らに誇りを教へこんだからだ。そこでわれわれは彼らに向かつて、お前たちは意氣地なしで、ほんの哀れな子供のやうなものだ、そして子供の幸福ほど甘いものはないと言ひ聞かせてやる。すると、彼らは臆病になつて、まるで巢についた牝鶏に雛が寄り添ふやうに、怖ろしさに慄へながら、われわれの方へ身を擦り寄せて、われわれを振り仰ぐに違ひない。彼らはわれわれの方へ詰め寄りながらも、同時にわれわれを崇め怖れて、荒れさわぐ數億の羊の群れを鎮撫することのできる偉大な力と智慧とを持つたわれわれを、誇りとするに至るだらう。彼らはわれわれの怒りを見て、哀れ



にも慄へ戦いて、その心は臆し、その眼は女や子供のやうに涙もろくなるだらう。しかし、われわれが  
ちよつと合圖さへすれば、忽ち身も軽々と、歡樂や、笑ひや、幸福の子供らしい歌へ移るのだ。無論、  
われわれは彼らに勞働を強ひるけれど、暇な時には彼らのために子供らしい唄と合唱と、罪のない踊り  
の生活を授けてやる。ちやうど子供のために遊戯を催してやるやうなものだ。勿論、われわれは彼らに  
罪惡をも許してやる。彼らは弱々しい力ない者だから、罪を犯すことを許してやると、子供のやうにわ  
れわれを愛するやうになる。どんな罪でもわれわれの許しさへ得て行へば贖へる、とかう彼らに言ひ聞  
かせてやる。罪惡を許してやるのは、われわれが彼らを受するからだ。その罪惡に對する應報は、當然  
われわれ自身で引き受けてやるのだ。さうしてやると、彼らは神様に對して自分たちの罪を引き受けて  
くれた恩人として、われわれをますます崇めるやうになる。従つてわれわれに何ひとつ隠しだてをしな  
いやうになる。彼らが妻の他に情婦と同棲することも、子供を持つことも、持たぬことも、すべては彼  
らの従順であるか従順でないか、従つて、許しもすれば、咎めもする。かうして彼らは楽しく悦ばしく  
われわれに服従して來るのである。最も惱ましい良心の祕密も、それから——いや、何もかも、本當に  
何もかも、彼らはわれわれのところへ持つて來る。するとわれわれは一切のことを解決してやる。この  
解決を彼らは悦んで信用するに違ひない。といふのは、それによつて大きな心配を免れることもできる  
し、今のやうに自分で勝手に解決するといふ怖ろしい苦痛を免れることができるからだ。かくて凡ての  
者は、幾百萬といふ凡ての人類は幸福になるだらう。しかし、彼らを統率する十數萬の者は除外される  
のだ。すなはち、祕密を保持してゐるわれわれのみは、不幸に陥らねばならぬのだ。何億かの幸福な幼

兒と、何萬人かの善惡の知識の呪ひを背負ふた受難者ができる譯だ。彼らはお前の名のために靜かに死  
んで行く、靜かに消えてゆく。さうして、棺の彼方にはただ死以外の何もものを見出さないだらう。し  
かも、われわれは祕密を守つて、彼等自身の幸福のために、永遠の天國の報いを餌に彼らを釣つて行く  
のだ。何故といつて、もしあの世に何かがあるにしても、到底かれらの如き人間に與へられる筈はない  
からだ。人の話や豫言によると、お前は再びこの世へやつて來るさうだ。再びすべてを征服して、選ば  
れたる人や、誇りと力を持つた者たちを連れてやつて來るさうだ、けれどわれわれはかう言つてやる  
——彼らはただ自分を救つたばかりだが、われわれは凡ての者を救つてやつた、とな。またこんな話も  
ある。やがてそのうちに意氣地のない連中がまたもや蜂起して、獸の上に跨つて、(祕密)を手にした  
姦婦の面皮を引つ剥がし、その紫いろのマントを引き裂いて、(醜い體)を裸にするといふことだ。尤  
も、その時はわしが立ち上つて、罪を知らぬ何億といふ幸福な幼兒を、お前に指さして見せてやる。彼  
らの幸福のために彼らの罪を一身に引き受けたわれわれは、お前の行手に立ち塞がつて、(さあできる  
ものならわれわれを裁いて見ろ)といつてやる。いいかえ、わしはお前なんぞを怖れはしないぞ。い  
いかえ、わしもやはり荒野へ行つて、蝗と草の根で命をつないだことがあるのだぞ。お前は自由をもつ  
て人間を祝福したが、わしもその自由を祝福したことがあるのだ。わしも(數の埋め合せ)をしたいと  
いふ渴望のために、お前の選ばれたる人々の仲間へ——偉大なる強者の仲間へ入らうと思つたことも  
ある。しかし後で眼が醒めたから、氣違ひに仕へることが嫌になつたのだ。それでまた引き返して、  
(お前の仕事を訂正した)人々の群れに投じたのだ。つまり、わしは傲慢な人々の傍らを去つて、謙遜



な人々の幸福のために、謙遜な人々のところへ歸つて來たのだ。今にわしのいつたことは實現されて、われわれの王國は建設されるだらう。繰り返して言ふが、明日はお前もその従順な羊の群を見るだらう。彼らはわしがちよつと手で合圖をすれば、われ勝ちにお前を烙く炬火へ炭を掻きこむことだらうよ。それはつまり、お前がわれわれの邪魔をしに來たからだ。實際、もし誰か、最もわれわれの炬火に烙かれるに適はしい者があるとすれば、それは正しくお前だ。明日はお前を烙き殺してくれるぞ。D（これで）。イワンは口を噤んだ。彼は話してゐるうちにすつかり熱して、酔つたやうになつて語をつづけたが、語り終つた時、不意ににやりとした。

黙々としてすつと聴き入つてゐたアリョーシャは、しまひには異常な昂奮を覺えて幾度も躍起に兄の言葉を遮らうとする衝動を辛うじて抑へてゐたのであるが、突然、その場から飛び上りさま口をきつた。

「しかし……それは馬鹿々々しい話ですよ！」と彼は眞赤になつて叫んだ、「兄さんの劇詩はイエスの讚美です、決して非難ぢやありません……、兄さんが期待した結果にはなつてゐません、それに誰が兄さんの自由観なんか信じるのですか！ そんな、そんな風に自由といふものを解釋していいものでせうか！ それが果して正教の解釋でせうか……それは羅馬です、いや羅馬も全體を盡したものではありません、それは嘘です、——それはカトリック教の中でも一ばん良くないものです、審問官や、エズイタ思想です……それに兄さんのおつしやる審問官のやうな奇怪な人物は到底あり得るものではありません。自分の一身に引き受けた人類の罪とは一體何のことですか？ 人類の幸福のために何かの呪ひを

背負つた、祕密の保有者とは一體どんなのです？ 何時そんな人がありましたか？ 僕らはエズイタ派のことは知つてゐますが、彼らは随分ひどいことをいはれてますけれど、兄さんの考へてるやうなものではありません！ まるで違ひますよ、全然そんなものぢやありません……、彼らはただ頭に皇帝を——羅馬法王を戴いた、未來の世界的王國の建設にむかつて邁進する羅馬の軍隊に過ぎません。それが彼らの理想で、そこには何の神祕もなければ、高遠な憂愁もありません……、権力と、卑しい地上の幸福と、隷屬に對する最も單純な希望があるに過ぎないのです……、いはば、未來の農奴制度ともいふべきものですが、それには彼ら自身が地主にならうとしてゐるのです……、これつ位が彼らのもつてゐる凡ての考へですよ、恐らく彼らは神だつて信じてはゐないでせう。兄さんのいふ苦しめる審問官はただの幻想ですね……」

「まあ、待てよ、待てつ、」とイワンは笑つて、「いやに逆せあがるぢやないか、お前が幻想といふんなら、それでもいいよ！ 無論、幻想さ、だがな、お前は本當に、近世のカトリック教の運動の全部が穢れた幸福のみを目的とする権力の希望に過ぎないと思つてるのかい？ そいつはパイロシイ神父にでも教はつたことぢやないかな？」

「いいえ、いいえ、反對に、パイロシイ神父はいつだつたか、兄さんと同じやうなことをいはれたことさへありますよ……しかし、無論ちがひます、まるで違ひますよ。」と、アリョーシャは慌てて言ひ直した。

「いや、そいつは、お前が『まるで違ふ』といつたところで、なかなか貴重な報告だぜ。そこで一つ



お前に訊きたいのはね、どういふ譯でお前のいふエズイタや審問官たちは、ただ物質的な卑しい幸福のためのみに團結したといふんだい？ なぜ彼らの中には、偉大なる憂愁に悩みながら、人類を愛する受難者が一人もゐないといふのだい？ ね、穢れた物質的幸福をのみ渴仰してゐる、かういふ連中のなかにも、せめて一人ぐらゐる、僕の老審問官のやうな人があつたと想像してもいいぢやないか、彼は荒野で草の根を食ひながら、自ら自由な完全なものになるために、自分の肉體を征服しようとして狂奔したのだが、人類を愛する念には生涯かはりがなかつたのさ、ところが、一朝、忽然として意志の完成に到達するといふ精神的な幸福はそれほど偉大なものではない、といふことを大悟したのだ。それは、意志の完成に到達した時には、自分以外の數億の神の子が、ただ嘲笑の對象物となつてしまふ、といふことを認めざるを得ないからだ。全く彼らは自分の自由をどう處置していいかも分からないのだ、かういふ哀れな暴徒の中から、バビロンの塔を完成する巨人が出て來よう筈はない、『偉大なる理想家』が、かの調和を夢みたのは、こんな鷲鳥のやうな連中のためではない、かういふことを悟つたので、彼は引返して……賢明なる人々の仲へ加はつた譯だが、そんなことはあり得ないといふのかえ？」

「誰の仲間へ加はるので、賢明なる人とは誰のことですか？」アリョーシャは殆んど激情に驅られながら、かう叫んだ、「彼らには決してそんな智慧もなければ、そんな神祕だの祕密だのといふものもありません……あるのはただ、無神論だけです、それが彼らの祕密の全部です、兄さんの老審問官は神を信じてゐやしません、それが老人の祕密の全部です！」

「さうだとしても、かまはんよ！ やつとお前も氣がついたつて譯だね、いや、本當にその通りなん

だ、本當に彼の祕密はただその中のみ含まれてゐるのだよ、しかし、それは彼のやうな人間にとつても苦しみではないだらうか。彼は荒野に於ける苦行のために自分の一生を棒に振つてしまひながら、それでも人類にたいする愛といふ病を、癒やすことができなかったのだよ、やつと自分の生涯の目没ころになつて、あの怖ろしい精靈の勸告だけが、意氣地のない反逆者どもを——『嘲笑のために作られた、未完成な試験的生物』を、幾らか凌ぎよい境遇におくことができる、といふことをはつきりと確信したのだ、それを確信すると同時に、彼は賢明なる精靈、怖ろしい死と破壊の精靈の指圖に従つて進まねばならぬといふことを悟つたのだ、このために虚偽と詐欺を採り入れて、人間をば故意に死と破壊へ導き、しかも彼らがどうかしたはずみで、自分らの行手に感づかないやうにする必要がある、つまり、せめてその間だけなりと、この憫れな盲人どもに、自分を幸福なものと思はせておくためなんだ。だが、注意して欲しいことは、この虚偽もキリストの名のためだといふ點だよ。老人は生涯、熱烈にキリストの理想を信じてゐたのさ！ これでも不幸ではなからうか？ もしもあの『穢れた幸福のためのみの權力に渴してゐる』軍隊の頭に、ほんの一人でも、こんな人物が現はれたら——その一人だけでも悲劇を生むに充分ぢやないか？ そればかりか、こんな人があつた一人でも頭に立つてゐたら、羅馬の事業（その軍隊もエズイタ派もみんな引つくるめて）羅馬の事業に對する本當の指導的な理想を生むに充分ぢやないか、僕はかう斷言する——かうした『唯一人者』は、あらゆる運動の指導者の間に、今まで決して絶えたことがない。ことによつたら、羅馬僧正の間にも、この種の唯一人者がなかつたとも限らないからなあ。それどころか、かうして非常に執拗に、非常に自己流に人類を愛してゐるこの呪ふべき老人は、



同じやうな『唯一人者的』老人の大群集の形をとつて、今も現に存在してゐるかも知れないのだ、しかもそれは決して偶然ではなく、ずつと前から秘密を守るために組織された同盟、もしくは秘密結社として存在してゐるかも知れない、この秘密を不幸な意氣地のない人間どもから隠すのは、つまり彼らを幸福にするためなんだ。つまり彼らを幸福にするためなんだ、これは必ず存在する、また存在しなければならぬ筈だよ、僕は何だかメーソンの基礎にも、何かこんな秘密に類したものがあらんぢやないか、といふやうな氣がする、カトリック教徒がメーソン組合員を憎む譯は、彼らを自分の競争者、つまり、自分の理想の分割者とするからだ、羊の群れも一つでなくちやならないし、牧者も一人でなくちやならないから……それはさうと、こんな風に僕が自分の思想を辯護してゐると、どうやらお前の批評に敲きつけられてしまつた作者のやうだね、さあ、こんなことはもう澤山だよ。」

「兄さんは、もしかしたら自分がメーソンかも知れませんね！」と、不意にアリオシヤは口を辻らせた、「兄さんは神を信じてゐないのですよ、」と彼は言ひ足したが、その聲はもう非常に強い悲しみを帯びてゐた。そのうへ彼には、兄が冷笑的に自分を眺めてゐるやうに感じられた。「それで、兄さんの劇詩はどんな風に完結するんです？」と、不意に彼は地面を見つめながら訊ねた。「それとも、もう完結してゐるんですか？」

「僕はこの風に完結させたいと思つたのさ、審問官は口を噤んでから、暫らくのあひだ囚人が何と答へるかを待ち設けてゐた。彼には相手の沈黙が苦しかつたのだ。見ると囚人は始終しみ入るやうに、靜かにこちらの顔を見つめたまま、何一つ言葉を返さうとも思はぬらしく、ただじつと聽いてゐるばかりだ。」

老人は、どんな苦しい怖ろしいことでも構はないから、何か言つて貰ひたくて堪らないのだ。が、不意に囚人は無言のまま老人に近づいて、九十年の星霜を経た血の氣のない唇をそつと接吻したのさ。それが回答の全部なのだ、老人はぎくりとした。何だか唇の両端がびくりと動いたやうであつた。と、彼は扉の傍へ近づいて、それをさつと開け放しながら、囚人にむかつて、『さあ、出て行け、そしてもう来るな……二度来るな……どんなことがあつても！』といつて、『暗い巷』へ放してやる。すると囚人はしづしづと歩み去るのだ。」

「で、老人は？」

「例の接吻が胸に燃えさかつてゐただけけれど、やはり、元の理想に踏みとどまつたんだ。」

「そして兄さんも老人といつしよなんでせう、兄さんも？」とアリオシヤは憂はしげに叫んだ。イワンは笑ひ出した。

「だつて、アリオシヤ、こんなものはほんの出鱈目ぢやないか、これまで二行の詩も書いたことのない、無分別な學生のとりとめもない劇詩に過ぎないんだよ、何だつてさうお前は生眞面目にとるんだい？ ほんとにお前は僕がエズイタ派の仲間へ走つて、キリストの事業を訂正しようとしてゐる連中の群れへ投じるだらうなんて、思つてるのかい？ とんでもないこつたよ！ 僕はお前にも言つた通り、三十まではかうしてたらだと生きのびるんだ、そして三十が來たら盃を床へ叩きつけるまでさ！」

「ぢや、粘つこい若葉や、立派な墓や、青空や、愛する女はどうなんです！ それぢや兄さんは何をあてに生きて行くのです、どうしてさういふものを愛してゆくつもりなんです？」アリオシヤは傷ま



しげに叫んだ、「胸や頭にそんな地獄を持ちながら、兄さんはどうしてやつて行くのです？ いいえ、兄さんは屹度ああいふ仲間に入るために出かけて行きます……でなかつたら自殺しますよ、とても辛抱しきれたものぢやありません！」

「何でも辛抱することのできる力があるさ！」と、もう冷やかな嘲笑を帯びた聲でイワンが言った。

「どんな力が？」

「カラマゾフの力さ……カラマゾフ式の下劣な力なのさ。」

「それは淫蕩に溺れて、墮落の中に魂を押し潰すことですね、ね、ね？」

「まあ、さうかも知れんな……、しかし、ただ三十までだ。ひよつとしたら、逃げ出せるかも知れんが、しかしその時は……」

「どんな風に逃げ出すんです？ どうして逃げ出すんです？ 兄さんのやうな考へを持つてゐたんです、とても駄目です。」

「こいつもやつぱりカラマゾフ式にやるさ。」

「それはあの『すべてが許されてゐる』といふ奴ですか？ 本當にすべてのことが許されてゐるといふのですか、さうなんですか、さうなんですか？」

イワンは眉を擧めたが、急に不思議なほど眞蒼な顔になった。

「あ、お前は、昨日ミウソフが腹を立てた、例の文句を持ち出したんだ……、あの時、ドミトリイが不細工に飛び出して、あの文句を繰り返したつけない。」と彼は歪んだやうな薄笑ひを洩した、「ああ、

ことによつたら、『すべてが許されてゐる』かも知れないよ。綸言汗の如しさ、それにミイチカのことじつけもなかなか巧いぞ。」

アリョーシヤは黙つて兄を見つめた。

「僕はね、アリョーシヤ、ここを去るに當つて、世界ぢゆうでお前だけは親友だと思つてゐたんだが、と、突然思ひがけない眞情を籠めてイワンが言つた、「今となつてはお前の胸にも、僕を容れる場所がないことに気がついたよ、可愛い隠者さん。だがね、『一切のことが許されてゐる』といふ定義は否定しないよ、ところで、どうだい、お前はこの定義のためには僕を否定するだらうね、え、え、さうだらう？」

アリョーシヤは立ち上がつて傍に近寄ると、無言のまま静かにその唇に接吻した。

「文學的剽竊だぞ！」と、イワンは急に一種の歡喜に浸りながら、叫んだ、「お前はその接吻を僕の劇詩から盗み出したな！ でも、まあ、有難う、さあお立ち、アリョーシヤ、出かけようよ、僕にもお前にももう時間だから。」

二人は外へ出たが、居酒屋の戸口のところで立ちどまつた。

「なあ、おい、アリョーシヤ、」とイワンはしつかりした語調で言ひ出した。「若しも、本當に粘つてい小さい葉を愛するだけの氣力が僕にあるとしたら、それはお前を思ひ起こしたためにそれを愛するといふことになるんだ。お前がこの世界のどこかにゐると思つただけで、もう僕には澤山だ。そしたら僕は人生に全く愛憎をつかさないでゐられる。しかし、お前はこんなこと飽き飽きしたらうな？ 何なら、



これは戀の打ち明け話と思つてくれてもいい。でも、もうこれで、お前は右へ、僕は左へだ、——それで澤山、ねえ、もう澤山だよ。つまり、もし僕があす立たないで（しかし、きつと立ちさうなんだが）、まだどうかしてお前に逢ふことがあつても、この問題については、もう何にも言はないやうにしてくれ。くれぐれも頼んだぞ。それから、ドミトリイのことについても、特に頼んでおくが、どうか二度と僕に口をきかないでくれ。」と、急に彼はいらいらした調子でかう言ひ足した。「もう話すこともなくなつたよ、言ふべきことは言つてしまつたんだ、さうだらう？　ところで、僕の方から一つお前に約束をしておかう、三十近くなつて、『杯を床へ叩きつけ』たくなつた時には、僕はどこにお前が住んでゐようと、もう一度お前のところへ話しに来るよ……たとひアメリカからでもやつて来る。覚えておいてくれ、わざわざやつて来るんだから。それにお前が、その時分に、どんなになつてゐるかを、ちよつと見に来るだけでも、ほんとに愉快だらうからな。いや、ずるぶん大げさな約束だ。しかし、實際に七年か、十年も別かれることになるかも知れない。さあ、もうお前の Pater Seraphicus のところへ行つた方がよからうぜ、もう今は死にかかつてゐるんだからね、お前の歸らないうちに死んだら、僕が引きとめてたからだといつて、腹を立てるかも知れないよ、さやうなら、もう一度接吻してくれ、さうだ、さうだ、ぢや行けよ……」

イワンは不意に身をかはすと、もう振り返らうともせず、思ふ方をさしてずんずん歩き出した。それは丁度きのふ兄ドミトリイが、アリョーシャの傍を離れて行つた時の様子に似てはゐたが、その性質においては全く趣を異にしてゐた。この奇妙な印象は、丁度そのとき、愁ひにとざされたアリョーシャ

の頭を、矢のやうに掠め過ぎたのであつた。彼は兄の後ろ姿を見送りながら、暫しの間、佇んでゐた。ふつと、イワンが妙にふらふらしながら歩いて行くのに気がついた。それに、後ろから見ると右肩が左肩より少し下がつてゐる。こんなことは、これまでにつひぞ見たことのないことである。が、彼もくると身を轉すると、殆んど駈け出さんばかりにして、修道院を指して急いで行つた。既にあたりは、急にたそがれて、不氣味に思はれるくらゐであつた。自分にもはつきりと説明することのできない、何かしら新しい或るものが、彼の心のうちにわきあがつてゐた。彼が庵室の森へはいつた時、また昨日のやうに風が吹き起こつて、松の古い木が物ずごく、彼の身のまはりに、ざわめき出した。彼は殆んど走らないばかりであつた。

『Pater Seraphicus——兄さんはこんな名前をどこから……』こんな考へがアリョーシャの頭に浮かんで来た。「イワン、イワン兄さん、可哀さうに、今度はいつ會へることだらう？……ああ、もう庵室だ！　さうだ、さうだ、ここに Pater Seraphicus がいらつしやるのだ。この人が僕を……悪魔から永久に救つて下さるのだ！』

その後、彼は生涯の間にいくたびか、この時のことを思ひ出して、イワンに別かれを告げたとき、どうして急に、——午前中、ほんの数時間まへにはどんなことがあつてもさがし出さなければならぬ、それを果さぬうちは、たとひ今夜ちゆう修道院へ歸れなくとも、斷じて途中で引きかへしたりなどはしないとまで決心してゐた兄のドミトリイのことを忘れはててしまつたのかと、少からぬ疑惑に包まれるのであつた。



未ださほどに明らかならず

イワン・フォードロキッチはアリオシヤにわかれると、フォードル・パーヴロキッチの家へと歸途についた。不思議なことに、急に堪へ難い憂愁が彼を襲つて來たのである。しかも、何よりも不思議なのは、一歩一歩家に近づくにつれて、それが次第に大きくなつて行くことであつた。しかし、奇態なのは憂愁そのものではなくて、どうしてもその憂愁の原因がイワン・フォードロキッチには突き留めることのできない點であつた。これまでにも憂愁に襲はれることがあつたから、こんな場合にそれが頭をもたげたからとても何も不思議はなかつた。何しろ明日は、自分をここへ牽き寄せたあらゆる物を振り切つて、今や新しい、全然未知な方向へ急に轉じて、またもや以前と同じ全くの孤獨な道へ出發しようとしてゐるのだが、いろいろの希望はあつても果して如何なる者を對象とするかも知らず、人世から期待するところの餘りに多きに過ぎるのみで、その期待についても希望についても、我ながら、何一つ確かな説明ができなかつたのである。事實、かうした新しい未知の世界に對する憂鬱が、彼の心にあつたけれど、それでもこの瞬間、彼を悩ましてゐるのは、全然、別なものであつた。『もしかしたら父親の

家に對する嫌惡の情ではないかしら？』かう彼は吐の中で考へた。『どうもさうらしい、もうまつたく蟲が好かなくなつてしまつたからなあ、尤も、あの穢らしい園を跨ぐのも今日がいよいよ最後だが、それにしてもどうも嫌な氣がする……だが違ふぞ、これでもない、ではアリオシヤと別かれたためかしら、又あんな話をしたためかしら？ もう何年も社會全體に對して沈黙を守つて、物を言ふのも大儀だと思つてゐたのに、不意にあんな意味なことを並べ立てたためかも知れん。』實際、それは若く無經驗と若い虚榮心との、若い悔恨の情かも知れない。つまりアリオシヤのやうな小僧に對して、うまく自分の胸中を言ひ現はすことのできなかつた忌々しさかも知れない。しかもイワンは、アリオシヤ如き人間に對しては肚の中で見くびつてゐたことは疑ひもない事實である。勿論それもあるだらう、いや必らずあるに違ひない。しかし、これもやはりさうでない、みんなさうでない。『胸が悪くなるほどくさくさする癖に、どんなに腕いてもとんと思ひ當ることができないのだ。もう考へない方がいい……』

イワン・フォードロキッチは『もう考へまい』として見たが、それは何の役にも立たなかつた。何よりも第一この憂愁は、どこか偶然的で、全然外部的な趣きを具へてゐるために、なほ忌々しく癪にさはる、さういふ感じがするのであつた。つまり何かしら人か物かがどこかに突つ立つてゐるといつた鹽梅なのである、例へば、よくあることだが、何か眼の前へ突き出てゐるのに、話か仕事に夢中になつてゐて長い間氣がつかないでゐるけれど、何だか妙に氣持が苛々して、まるで苦しくさへなる、そのうちにやつと氣がついて、その邪魔物を取りのぞくののだが、それは大抵の場合つまらない馬鹿げた物で、——どこか飛んでもない場所へ置き忘れた品物とか、床の上へ落ちたハンカチとか、書棚へ片づけ忘れた書



物とか、そんなやうな物である。やがてイワン・フョードロキツチは怖ろしく不快な苛だたい気分、父の家まで辿りついたが、耳門から凡そ十五歩ばかり離れたところから、ふと門を眺めた時、自分の心を苦しめ悩ましてゐた原因を忽ち察知したのである。

門傍のベンチに、下男のスメルチャコフが腰をかけて、夕涼みをしてゐるのだ。イワン・フョードロキツチはそれを一目見るなり、自分の心の底には、この下男のスメルチャコフが潜んでゐた。それが何とも不愉快で堪らなかつたのだ、といふことに気がついた。すると、すべてが急にぱつと照らし出されて、明瞭になつた。先刻アリョーシヤがこのスメルチャコフに出會つたことを話した時、何かしら暗い忌はしいものが彼の胸を突き貫して、すぐに反射的に憎悪の念を喚びましたのであつた。それから話に夢中になつてスメルチャコフのことは暫らく忘れられてゐたのだが、それでもやはり心の底に残つてゐたため、アリョーシヤと別かれて、ひとり家路につくと同時に、この忘れられてゐた感覚が不意にまた頭を持ち上げたのである。『一體こんなくだらないやくざ者が、どうしてこんなにおれの心を騒がせるんだらう』と、彼は堪へ難い憤懣を覚えながらかう考へた。

それはかうである、近頃イワン・フョードロキツチはこの男がひどく嫌ひになつて来た。それがこの二三日は取りわけ甚くなつたのである。この人間に對する殆んど憎悪に近い感情が、日一日と募つて来るのを、彼自身でも氣づき始めた。かうした憎悪の念がこれほど險惡な經過をとつて来たのは、最初イワン・フョードロキツチがこの町へ歸つて来た當初とは全然反對な事態が生じたためかも知れない。當時イワン・フョードロキツチはスメルチャコフに對して、不意に一種特別な同情を寄せたが、後には彼を

非常に獨創的な人間だとさへ考へるやうになつた。この下男に自分と話しをするやうに仕向けたのは彼自身であつたが、いつも相手の考への妙に不條理なといふよりは、妙に不安定な點に一驚を喫するのであつた。そして何が、一體『冥想者』の心を、こんなに絶え間なく執固く騒がせてゐるのか、さつぱり合點が行かなかつた。彼らは哲學的な問題も語り合つたし、また例の、太陽や月や星は、やつと四日目にしか創られなかつたのに、どうして最初の日に光りがさしてゐたのだらうか、この事實をどう解釋すべきだらうか、などといふ問題についても話し合つたものである。しかしイワン・フョードロキツチは間もなく、問題は決して太陽や、月や、星でないことを悟つた。なるほど、太陽や、月や、星は興味ある問題ではあるけれど、スメルチャコフにとつては全く第三義的のもので、彼は全然別なものを要求してゐるらしかつた。そして、あれやこれやと、その時々によつて同じ調子ではないけれど、とにかく、どんな場合でも底の知れぬ自尊心、それも辱められたる自尊心が、まさまざと顔を覗け始めるのであつた。イワン・フョードロキツチはそれが甚く氣に喰はなかつた。そもそもこれから嫌惡の念がきざし始めたのである。その後、家庭内にこたごたが起つて、グルーシエンカが現はれたり、兄ドミトリイの騒ぎが持ち上つたりして、いろいろ面倒なことが續いた時、二人はそのことについても語り合つた。尤も、スメルチャコフはこの話をする時に、ひどく昂奮した様子を見せたけれど、一體それが落着すればいいと自分で思つてゐるのか、到底正確に突き留めることはできなかつた。そればかりか、不用意のうちには現はれる彼の希望の茫漠として支離滅裂なことに寧ろ驚ろかされるくらゐであつた。彼はいつも、何かを訊き出さうとするもののやうに、前から考へてゐるらしい遠まはしな質問を持ちかけるのであつたが、



それが何のためかは説明はしなかつた。そして非常に熱心に何かを訊ねてゐる最中に、突然びつたりと口を噤んでしまつて、まるで別なことへ話頭を轉ずることがあつた。しかし、つひにイワン・フォードロキツチを極度にまで苛立たせて、その心に烈しい嫌惡の情を起させたのは、最近スメルチャコフが彼に對してありありと示すやうになつた、一種特別な忌はしい馴れ馴れしさであつた。しかも、それが日を経るにつれて、一そう著しくなるのであつた。だが、彼は別に、無禮な態度をとるといふ譯では決してなく、いつも非常に恭々しい口のきき方をしてゐたが、どういふものか、スメルチャコフは、自分とイワン・フォードロキツチとがある事情について、共同關係でも持つてゐるやうに思ひ込んでゐるらしかつた。そして、いつか二人の間に取り交はした密約といふやうなものでもあつて、自分たち二人だけには分かつてゐるけれど、まはりの人間どもには到底わかりつこないのだ、といった風な調子で、いつも話しをするやうになつたのである。だが、イワン・フォードロキツチは自分の心に次第に募つて來る嫌惡の原因を長いあひだ悟ることができなかつたが、このごろになつて漸くその真相が分かつて來たのである。嫌惡と腹立たしさにじりじりしながら、彼はいま無言のまま、スメルチャコフの方を見ないやうにして、耳門をくぐり抜けようと思つたのだが、その瞬間に、スメルチャコフがつとベンチから立ち上つた。その身振りを見ただけで、イワン・フォードロキツチは立ちどころに、彼が何か特別な相談を持ちかけようとしてゐるんだな、と推察した。イワン・フォードロキツチはちらと相手を見て立ち止つた、そして自分がつい今のさきさう思つたやうに、さつさと通り過ぎてしまはないで、かうして立ち止つたことを考へると、彼は身内の慄へるほど腹が立つて來た。憤怒と憎惡をもつて、彼はスメルチャコ

フの去勢僧のやうに瘦せこけた顔や、きれいに櫛で梳き上げた兩鬢や、小さい冠毛のやうに膨らました前髪をじつと睨んだ。心もち細めた左の眼は丁度、『いかがですな、通り過ぎておしまひなさらぬところを見れば、お互ひに惻巧なわたくし共の中には、何か御相談ごとがあるらしうござんすな。』とでも言つてゐるやうに、薄笑ひを浮かべて、瞬きをしてゐた。イワン・フォードロキツチは身震ひをした。『退いてろ、やくざ野郎、おれは貴様なんぞの仲間ぢやないぞ、馬鹿野郎！』さう嗷鳴りつけてやりたいと思つたのだが、自分ながら意外なことには、まるきり別な言葉が口を衝いて出てしまつたのである。

「どうだい、お父さんはまだ寝てるかい、それとも、もう起きたかい？」と、自分でも思ひがけないくらの靜かに、素直に彼はかう言つた。そして、やはり全く思ひがけなく、うつかりベンチへ腰を下してしまつた。この一瞬間、彼は殆んど恐怖に近いものを感じた。そのことは後になつてもよく憶えてゐた。スメルチャコフは兩手を背後へ廻したまま、その前に立つて、自信ありげな殆んど嚴ついくらゐな眼眸で彼を見つめた。

「まだお寝みでございます。」と彼は急かすに言つた。（『口をきいたのはお前さんの方が先きで、こちらとちやないよ』とでも言つてゐるやうだ）「若旦那、あなたには驚ろいてしまひますよ。」ちよつと口を噤んでから、わざとらしく眼を伏せながら、彼はかうつけ加へると、右の足を一步前へ踏み出して、エナメル塗りの靴の爪先を無意味に動かすのであつた。

「どうして僕に驚ろいてしまふんだい？」イワン・フォードロキツチは一生懸命に己れを抑制しながら



ら、ぶつきら棒な荒々しい調子でかう言つたが、不意に、自分は並々ならぬ好奇心を抱いてゐて、それを満足させない間は、どんなことがあつてもこの場は離れられさうにないと氣がつくと、われながら嫌な氣がした。

「どうして、あなたはチェルマーシニヤへお出かけになりませんか？」と、不意にスメルチャコフは眼を上げて、馴々しくにつこり笑つた。「何故こちとらが笑つたかお前さんには分かつてゐる筈だよ、もしお前さんが賢い人間ならばね。」さう細められた彼の左の眼が言つてゐるやうに思はれた。

「何のために僕がチェルマーシニヤへ行くんだ？」イワン・フォードロキツチはちよつと面喰らつた。スメルチャコフは又ちよつと口を噤んでゐた。

「フォードル・パーヴロキツチの方から、あなたにそれをお頼みになつたではありませんか。」遂に彼はかうゆつくりと言つたが自分でもこの答へを大して重要なものとは思つてゐないらしい。これはただ何か言はない譯に行かないから詰らないことを持ち出して胡麻化すだけだとも言つた様子であつた。

「やい、こん畜生、もつとはつきり言へ、貴様はどうしたいつて言ふんだ？」たうとうイワン・フォードロキツチはおとなしい態度から、荒々しい氣勢に轉じながら、腹立たしさうに嗷鳴つた。

スメルチャコフは前へ踏み出してゐた右足を左足へ引きつけて、しやんと體を眞直ぐにしたが、しかし依然として落着きはらつて薄笑ひを浮かべたまま、相手の顔を見つめてゐた。

「いえ、別に大したことはありませんよ……ただちよつと話の序でに……」  
「またもや沈黙が続いた。二人は一分間ばかり黙り込んでゐた。イワン・フォードロキツチは、自分が

もう今にも立ち上つて、怒り出しさうだと思つたが、スメルチャコフは彼の前に突つ立つたまま、何かを待ちもうけてゐるといつた風であつた。「お前さんが怒るか怒らないか、茲で拜見してゐますぜ」イワン・フォードロキツチには少くともかう感じられた、たうとう彼は立ち上がらうとして身を動かし、スメルチャコフは宛かもその瞬間を捕へた。

「イワン・フォードロキツチ わたくしの境遇は全く怖ろしうでございます、自分でもどうしたらいいのかわかりません。」突然、彼はしつかりと、一語々々を分けるやうに、かう言つた。そして、最後の言葉といつしよに溜息をついたのであつた。イワン・フォードロキツチは又すぐに腰をおろした。

「ごちらもまるで氣まぐれな方々で、まるで赤ん坊のやうになつていらつしやいますよ、」とスメルチャコフは言葉をつづけた。「わたくしの申し上げますのはあなたのお父様と、お兄様のドミトリイ・フォードロキツチのことでございますよ、今にもお目覚めになりましたら、フォードル・パーヴロキツチは、すぐにまたわたくしにつきまよつて、のべつに訊きとほしなさいますんで、『どうだ、あれは來なかつたか？ どうして來なかつたのだ？』と、これが夜半の十二時頃まで、いや十二時すぎまでのべつに續くのでございますよ、そしてアグラフェーナ・アレクサンドロヴナがお越しにならなかつたら（こ）によつたら、あの女はまるつきり、そんな考へを持つていらつしやらないのかも知れませんが、翌る朝はまた早速わたくしに飛び掛つて『なぜ來なかつた？ どうして來なかつた？ 一體いつ來るのだ』——と、まるでわたくしの罪か何ぞのやうなことを仰しやいますので、ところがまた一方では、そろそろ薄暗くなりかかりますと、——いえ、それよりもつと早い時もございますが、——今度はお見さ



んが刃物を持って隣りへお見えになりましたね、『氣をつけろよ、悪黨、煮出汁とり野郎、もし貴様があの女を見通がして、ここへ来たことをおれに知らせなかつたら、誰より真先きに貴様を打ち殺して呉れるぞ。』と仰しやいます、それから夜が明けて朝になると、今度はまたフォードル・パーヴロキッチが同じやうに、うるさくわたしをお苛めになりますので、『どうして来なかつた、もうすぐやつて来るだらうか?』と、どちらも、あの御婦人がお見えにならなかつたのを、まるでわたくしの罪か何ぞのやうに仰しやるのです。かうしてお二人のお腹立ちが日一日と、いえ、一時間一時間に、烈しくなつて行きますので、わたくしは時々、怖ろしさの餘り、いつそ自殺してしまはうかと思ふことがございますよ、若旦那、わたくしはもうあのお二人にはつくづく匙を投げましたよ。』

「ぢや、何だつて係りあひになつたんだい? 何だつてドミトリーに内通を始めたんだ?」とイワン・フォードロキッチは苛だたしさうに言つた。

「どうして係りあひにならずにゐられませう? それに、すつかりほんとのことを申しますと、決してわたくしの方から係り合つたものではございません、わたくしは初めから黙つてゐて、一口も言葉を返す元氣もなかつたのでございます、ただあの人が勝手にわたくしを自分の召使に、いはばリチャルドの役に決めておしまひになつたんですよ、その頃から、もう何ぞといへば、『悪黨め、もしあの女を見通したが最後、打ち殺して呉れる!』と、それより他には、言ふことも御存じないのでございますよ、若旦那、明日も又たしかに長い発作が起りさうですしね。』

「何の長い発作なんだ?」

「長い癲癇の発作でございますよ、おつそろしく長い発作なのです、幾時間も、いえ、事によつたら、一日も二日も續くかも知れませんが、一度、三日間ぶつづきに續いたことがございます、その時は屋根裏からおつ落ちましたんで、やんだかと思ふと又ぶり返して、三日の間はどうしても人心地に返ることができませんでした。その時、フォードル・パーヴロキッチがヘルツェンシュトゥベといふ、この町の醫者呼んで下さいまして、頭を氷で冷して頂きました、それからまだ何か手當をして頂きましたつけ……本當に危うく死にさうでしたよ。』

「でも癲癇つていふ病氣は、いつごろ起るか、前もつて知ることはできないつて言ふぢやないか、どうしてお前はあす発作が起るなんて言ふのだい?」一種特別な、苛々したやうな好奇心を浮かべて、イワン・フォードロキッチがかう訊ねた。

「それあ、まつたくの話ですよ、前もつて知るつて譯には参りません。』

「それに、その時は屋根裏からおつ落ちたつていふぢやないか。』

「屋根裏へは毎日上りますからね、明日にもまた屋根裏からおつ落ちないものでもありませんよ、もし屋根裏でなければ、穴藏へおつ落ちるかも知れませんが、穴藏へ行く用事も毎日ございますからね。』  
イワン・フォードロキッチは長い間、彼をじいつと見つめてゐた。

「何か小細工をしてるな、ちやんと見え透いてるぞ、第一お前の言ふことはどうもよく分からん、と低くはあつたが、何となく脅しつけるやうな調子で彼は言つた。「どうだお前はあすから三日のあひだ、癲癇の眞似でもするつもりぢやないのか? え、おい?」スメルチャコフはじつと地面を見つめたまま、



又しても右足の爪先でこそそ悪戯をしてゐたが、今度は右足を元の處へ引つこめて、その代りに左足を前へ出してから、顔を上げると、にやりと一つ薄笑ひをして、かう言つた。

「もしわたくしが、それをやるとしましても、つまりその眞似ごとをするをしましても、——それは経験のある人間には別に難かしいことではありませんからね——わたくしは自分の命を助かるためにやることですから、それに對しては充分な権利を持つてゐる筈でございますよ、わたくしが病氣で臥てさへゐれば、たとへアグラフェーナ・アレクサンドロヴナが旦那のところへお見えになつても、病人を掴まへて『なぜ知らせなかつた』と責める譯には参りませんよ、御自分でも恥かしくお思ひになることではせうから。」

「えい、畜生！」イワンは憤りのために顔を歪めながら、不意に飛び上がった。「何だつて貴様は自分の命のことばかり心配してゐるんだ！ そんな兄貴の脅し文句は腹立ちまぎれに過ぎんさ、それっきりのことだよ、兄貴はお前なんか殺しやしないよ、もし誰かを殺すにしても、お前ぢやないよ！」

「蠅か何ぞのやうに叩き殺しておしまひなさいませ、先づ第一番にわたくしがやられるのです、しかし何より怖ろしいことが別にありますよ——つまり旦那に對して、何か馬鹿なことでも仕出かしなすつた場合に、あの人と共謀のやうに思はれるのが怖ろしいのでございます。」

「どうしてお前が共謀のやうに思はれるんだ？」

「わたくしが共謀のやうに思はれる譯は、例の合圖を、極内々でお知らせしたからですよ。」

「合圖つて何だ？ そして誰に知らせたんだ？ 本當に此奴め、はつきり言はんか？」

「すつかり白状しなければなりません。」いやに仔細らしく落着いてスメルチャコフは引つぱるやうな物の言ひ方をした。「實は、わたくしとフォードル・パーヴロキッチとの間に、一つ秘密があるので、御承知でもございませうが（多分御承知でございませうね）、旦那はこの三四日、夜になると、いえ、早い時には宵の口から、部屋の内側から扉に鍵をおろしておしまひになります、尤も、あなたはこの頃では、毎日早く、二階の居間へ引つこんでおしまひになりますし、昨日はまるでどこへもおいでになりませんでしたから、おほかた御存じないかも知れませんが、旦那はこのごろ夜になると、念入りに戸締りをなさるのでございます、それでグリゴリー・ワシーリエキツチが行つても、聲、確かにさうだと分らない間は、決して扉をお開けになりません、ところで、グリゴリー・ワシーリエキツチはあんまり来ませんから、今のところお居間のお世話をするのは、わたくし一人でございます——これはアグラフェーナ・アレクサンドロヴナの悶着が始まつて以來、旦那が御自身でお決めた手筈です、しかし夜になると、わたくしは旦那の言ひつけで、傍屋の方へさがつて寝みますが、それでも夜半ごろまでは寝ずに、時々起きては庭を見廻つて、アグラフェーナ・アレクサンドロヴナのおいでを待ち受けてゐなくはなりません、何しろ旦那はこの二三日といふもの、まるで氣違ひのやうに、あの女を待ちきつておいでなんですから、旦那のお考へでは、あの女はお見えを、ドミトリー・フォードロキツチを（旦那はいつもミーチカと仰しやつてですが）怖がつてゐるから、夜もよつほど遅くなつてから、裏道を通つてお見えになるに違ひない。『だから貴様はかつきり十二時まで、いや、もつと遅くまで見張りをしろ、もし、彼女がやつて來たら、居間の戸口へ走つて來て叩いてもよし、庭から窓を叩いてもよい、



だが、はじめの二つはこんな風にゆつくり叩いて、それから今度は早い目に三つとんとんと叩くのだ。さうすれば、わしはすぐ彼女が来たのだと思つて、そつと扉を開けてやるわい、』と、かう仰しやるのでございます、それから、もし何ぞ變つたことが起こつた時のために、もう一つ別の合圖を教へて下さいました、それは初め二つは早目に叩いて、それからちよつと間を置いてもう一つずつと強く、どんと叩くのでございます、すると旦那は何か急なことがあつたので、わたくしがぜひ旦那にお目にかからなくちやならないのだとお察しになつて、やはり直ぐ扉を開けて下さいます、そこで、わたくしは中へ入つて、お知らせするといふ手筈でございます、これは、アグラフェーナ・アレクサンドロヴナが自身でお見えにならないで使ひで何かお知らせになる場合の用心でございます、それに、ドミトリイ・フョードロキツチもやはりお出でになるかも知れませんから、あの方が近くへ来ていらつしやるといふことを旦那にお知らせしなければなりません、旦那は大變ドミトリイ・フョードロキツチを怖がつておいでになりますから、たとへアグラフェーナ・アレクサンドロヴナがおいでになつて、旦那と一緒に部屋の中へ閉ぢ籠つていらつしやる時でも、ドミトリイ・フョードロキツチが近くへ姿をお見せになりましたらわたくしは直ぐ戸を三つ叩いて、是非それをお知らせしなければなりません、かういふ風に五度たたく方の合圖は『アグラフェーナ・アレクサンドロヴナがおいでになりました』といふことで、もう一つの三度叩く方の合圖は『急用です』といふ譯なのでございます、これは旦那が御自分で幾度も眞似をして、よく説明して教へて下さつたのでございます、かういふ譯で世界ぢゆうにこの合圖を知つてゐるのは、わたくしと旦那と二人きりでございますから、旦那はちつとも疑つたり、聲を立てたりなさ

ないで（旦那は聲を立てることをひどく怖れていらつしやいますので）、そつと扉を開けて下さいます、この合圖が今はドミトリイ・フョードロキツチに知れてしまつてゐるのでございますよ。」

「どうして知れてしまつたんだ？ 貴様が告げ口をしたのぢやないか？ どうしてそんな大それたことをしたんだ？」

「怖ろしいからでございますよ、それにどうしてわたくしがあの人に隠しおほせるものですか？ ドミトリイ・フョードロキツチは毎日のやうに、『貴様はおれを騙してゐるんぢやないか？ 何かおれに隠してゐるんぢやないか？ そんなことをしたら貴様の兩足を叩き折つてやるから！』つて脅しなされるぢやありませんか、そこでわたくしはあの人にこの秘密をお知らせしたのです、つまりそれで、わたくしの奴隷のやうな服従を見て戴いて、わたくしが決して嘘を申すどころか、かへつて何もかもお知らせしてゐる、といふことを信じて戴くためにでございますよ。」

「もし、兄貴がその合圖を利用して押し入りさうだと思つたら、貴様が入れないやうにしなければならんぞ。」

「そりや、わたくしにしても、お兄さんが自暴になつてをられることは承知してゐますから、無理にもお通しすまいと思ひましたところで、もしわたくしが發作で倒れてゐましたら、何とも仕方がないではございませんか。」

「ちえつ、勝手にしろ？ どうして貴様はまた、發作が起ることに決めてやがるんだ、本當に糞！ いつたい貴様はこのおれを擲擲つてゐるのか、どうだ？」



「どうしてあなたを擲擲ふなんて、そんな大それたことができませう、第一こんな怖ろしいことを眼の前に控へてゐて、冗談どころぢやございませぬよ、何だか癩癩が起こりさうな気がします、そんな気がするのでございます、怖ろしいと思ふだけでも起こりますよ。」

「ちえつ、畜生め！ あす貴様が寝こめば、グリゴリーが見はりをするよ、前からあれにさう言つていたら、あれなら決して兄貴を入れやしないぞ。」

「どんなことがあつても、旦那のお許しがない以上、あの合圖をグリゴリー・ワシリーエキツチに知らせるなんていふ譯には参りませぬよ、それにグリゴリー・ワシリーエキツチがお兄さんのおいでを聞きつけて、入れないやうにするだらうと仰しやいますけれど、あの人は何しろきのふから加減が悪くて、あすマルファ・イグナーチエヴナが療治をすることになつてをるのです、先きほどそんな相談をしてゐました、何でもその療治はすゐる面白いことをするのですよ、マルファ・イグナーチエヴナは或る浸酒を知つてゐるのも絶やさぬやうに藏つてをります、何かの草から採つた強い奴で、あの女はその秘法を知つてゐるのでございます、グリゴリー・ワシリーエキツチは年に三度ほど中風か何ぞのやうに、腰が抜けてしまひさうなほど痛むのです、そんな時この浸酒で療治をします、何でも年に三度くらゐの腰が抜けてしまひます、その折マルファ・イグナーチエヴナはこの浸酒で手拭を濡らして、半時間ばかり病人の脊中ぢゆうを、からからになつて赤く腫れ上がるまでこするのです、そして何かお呪ひを唱へながら、巖に残つてゐる浸酒を病人に飲ませます、尤も、すつかりではございませぬ、そんな時にはいつも少々残して置いて、自分でも飲むのです、さうして二人とも、酒のいけぬ人が酔つ拂

つたやうに、そのままそこに倒れてしまつて、かなり長い間ぐつすり寝こむのです、グリゴリー・ワシリーエキツチは眼を覺ませば、いつも病氣がなほつてゐますが、マルファ・イグナーチエヴナは眼を覺ました後できまつて頭痛がするのでございます、かういふ譯でして、もしマルファ・イグナーチエヴナがあす本當に療治をすれば、あの夫婦が何か物音を聞きつけて、ドミトリイ・フォードロキツチを入れないやうにするなぞといふことは、どうも覺束ない話でございますよ、きつと寝こんでしまひますから。」

「何といふ馬鹿らしい話だ！ 何もかも故意とのやうに、重なりあふぢやないか、貴様は癩癩を起こすし、グリゴリー夫婦は覺えなしに寝てしまふなんて！」とイワン・フォードロキツチは叫んだ、「ひよつと貴様がわざとそんな段取りに仕組まうつてんぢやないかい？」不意に彼はかう口を迂らして、峻しく眉を擧げた。

「どうしてわたくしが、そんな段取りなんか仕組みませう……それに、何もかもドミトリイ・フォードロキツチのお考へ一つで、どうともなるといふ矢先きに、何のためにそんなことをいたさせう……あの人が何か仕出かさうとお思ひになれば、何もかもその通りに仕出かしなるのでございますよ、本當に減相もない、わたくしがあの人の手引きをして、旦那の處へ踏み込ませるなんて、そんなことがあつてよいものですか。」

「ぢや、何のために兄貴が親爺の處へやつて来るんだ、それもこつそりやつて来るなんて？ アグラフェーナ・アレクサンドロヴナは決してここへやつて來やしないと、貴様自身いつてるぢやないか。」



と、イワン・フォードロキツチは憤りのために顔色を變へて語をついだ「貴様の口からもそれを聞くし、僕もここに滞在してゐる間にちやんと見抜いてしまつたんだが、親爺はただ夢を見てゐるだけで、あの淫賣女は決してやつて来やしないんだ、あの女が来もしないのに、何のために兄貴が親爺の處へ暴れこむんだ、まあ言つてみる！ 僕は貴様の肚の中が知りたいんだ。」

「何のためにいらつしやるかは、御自分で御承知でございます、わたくしの肚の中などを詮索なさることはございませぬ、お兄さんはただ腹立ちまぎれにもいらつしやいませうし、もしわたくしが病氣でもすれば、あの疑ぐり深い御性分のことですから、もしやといふ心をお起こしになつて、昨日のやうに我慢しきれなくなつて、部屋の中まで捜しにいらつしやるかも知れませぬよ——もしやあの女が自分に隠れて入りこんでやしないかとお思ひになつて。その上お兄さんはフォードル・パーヴロキツチのところ、三千留のお金を入れた大きな封筒が、ちやんと用意してあることも、やつぱり御存じになつてゐます、その封筒は三つも封印をした上に紐で結へて、『わが天使なるグルーシエンカへ、もしわが許に來りなば』と御自分の手でお書きになつたのですが、それから二三日たつてまた『雛鳥へ』と書き添へられました、これがそもそも疑はしいのでございませうよ。」

「下らないことだ！」イワン・フォードロキツチは殆んどわれを忘れて嗚鳴つた。「ドミトリイは金を盗むやうな男ぢやない、おまけに、そのついでに親爺を殺すなんて筈はない、昨日のやうな場合には、痾癩もちの馬鹿が夢中になつたことだから、グルーシエンカのために親爺を殺すやうなことがあるが、強盗なんぞに出かけて堪るものか！」

「でも、あの方は今、非常にお金の入用に迫られていらつしやいますよ、イワン・フォードロキツチ、どんなにお困りになつてゐるか、あなたは御存じないのでございませう。」スメルヂャコフはどこまでも落ちつき拂つて、著しくはつきりした調子でかう説明した。「その上、お兄さんはその三千留の金を、まるで自分のものかなんぞのやうに思つていらつしやいます、『親爺はまだちやうど三千留だけおれに支拂ふ義務があるのだ』と御自分の口からわたくしに仰しやいました、それに、イワン・フォードロキツチ、もう一つ確かな眞理があるのですよ、よく御自分で判断して御覽なさいまし、これは殆んど間違ひのない話ですが、アグラフェーナ・アレクサンドロヴナは、自分でその氣にさへなられるなら、譯なくあの方を——つまりフォードル・パーヴロキツチを丸めこんで結婚してしまひますよ、それに旦那の方だつて案外その氣におなりにならないとも限りませぬし。わたくしはあの御婦人が決して來られないと申しましたのも、もしかしたら、そんな浮いたことより、いつそ奥様になりたいといふ下心でられるかも知れないと思ふからでございますよ。わたくしの聞きましたところでは、あの御婦人の旦那のサムソフといふ商人が、あの方に向つてあけかけに、それは悪くない分別だと言つて、笑つたさうでございます、それに御當人もなかなか伶俐な女でございますから、ドミトリイ・フォードロキツチのやうな裸一貫の人と結婚する筈はありませんよ、これだけの事を頭に入れてから、一つお考へになつて御覽なさい、イワン・フォードロキツチ、さうなつた晩には、ドミトリイ・フォードロキツチにしる、また弟さんのアレクセイ・フォードロキツチにしましても、旦那がおかくれになつたからとて、ただの一留だつて貰へることぢやございませぬ、なぜと言ひまして、アグラフェーナ・アレクサンドロヴナが



旦那と結婚なさるのは、何もかも一切合財、自分の名義に書き換へて、財産といふ財産を残らず自分の物にする下心なんですからねえ。ところが、まだそんなことにならない今のうちに、お父さんがお亡くなりになれば、早速あなた方にはめいめい四萬留づつのお金が渡りますよ、旦那のあれほど憎んでいらつしやるドミトリイ・フォードロキツチにでさへ、遺言状が拵へてありませんから、分け前が手に入る譯なんで……これはみんなドミトリイ・フォードロキツチにはよく分かつてをります。」

イワン・フォードロキツチの顔が妙に歪んで、びくりと慄へたやうであつた。彼は急に赧くなつた。「ぢや、何だつて貴様は、」と彼は突然スメルチャコフを遮つた。「そんな事情があるのに、チェルマ一シニヤへ行けなど僕に勸めるんだ？ どういふつもりであんなことを言つたのだ？ 僕が行つてしまつた後で、太變なことが起こるぢやないか。」イワン・フォードロキツチはやつとの思ひで息をついだ。

「全く仰しやる通りです。」と、スメルチャコフは靜かに分別臭い調子で、とはいへ、じつとイワンの顔色を窺ひながら言つた。

「何が仰しやる通りなんだ？」と、辛うじて己れを抑へながら、嶮しく眼を輝かしてイワン・フォードロキツチが問ひ返した。

「わたくしはあなたがお氣の毒になつて、ああ申したのでございますよ、わたくしがあなたの立場にをりましたら、こんなことに係り合ふよりは……いつそ何もかも棄てて、どこかへ行つてしまひますよ……」きらきらと光るイワン・フォードロキツチの眼を、思ひ切り露骨な表情で眺めながら、スメルヂ

ヤコフはかう答へた。二人とも沈黙に落ちた。

「どうやら貴様は大馬鹿者らしいぞ、そして、勿論、怖ろしい悪黨だ！」かういつて、突然イワン・フォードロキツチはベンチから立ち上がった。それから直ぐに耳門の中へ入つてしまはうとしたが、不意に立ち止つて、スメルチャコフの方を振りむいた。何かしら變なことが起こつた。イワン・フォードロキツチは思ひがけなく痙攣でも起したやうに、唇を噛みしめて、拳を握り緊めた——そして次の瞬間には、スメルチャコフに躍りかかりさうな劍幕であつた。こちらは少くともその同じ刹那にそれを見てとつて、思はずぎくりとして、全身を後ろへ退いた。しかし、その瞬間はスメルチャコフにとつて無事に経過した。イワン・フォードロキツチは黙つたまま、しかし何やら思ひ感つた様子で、無言のまま耳門の方へ踵を轉じた。

「僕はあすモスクワへ立つよ、もし望みなら話してやるが、明日の朝はやく立つんだ……それだけだ！」と彼は憎々しげに、一語一語を分けるやうに、大きな聲でかう言つた。後になつて彼は、どんな必要があつてそんなことをスメルチャコフに言つたのか、われながら不審でならなかつた。

「それが何よりでございますよ。」こちらはそれを待ち構へてゐたやうに、かう合槌を打つた「ひよつと何ぞ變つたことがありました場合には、こちらから電報でお呼びするやうなことがあるかも知れませんけれど。」

イワン・フォードロキツチはもう一度立止つて、又もや素早くスメルチャコフの方へ向き直つた。と、今度は相手の方に何か同じやうな變化が生じた。あの馴々しい投げやりな表情が一瞬にし、消え失せて、



その顔全體が極端な注意と期待を表はしてゐたが、しかし、それはもはや臆病で卑屈らしい表情であつた。イワン・フォードロキツチを讀めてゐる彼の眼眸には、『もう何か仰しやることはございませぬか、もう何も言ひ残しなかつたことはございませぬか?』といふやうな意味が讀み取られた。

「チエルマーシニヤだつたら呼んでくれないのかい……その、何か事件のあつた場合にさ?」何のためとも分ならず、急に聲を張り上げて、イワン・フォードロキツチが咄嗟に唖鳴つた。

「チエルマーシニヤへおいでになつても……やつぱりお知らせしますよ……」と、スメルチャコフは慌てたやうに、殆んど囁くやうな聲で呟いたが、しかし依然として、じつとイワン・フォードロキツチの顔をまともに見つめてゐた。

「だがお前がチエルマーシニヤ行きを勧める所をみると、モスクワは遠くてチエルマーシニヤは近いから旅費が惜しいとでも言ふのか、それとも僕が無駄な大廻りをするのが氣の毒だとも言ふのかい?」

「全く仰しやる通りでございます……」と、またしても忌はしくにたにたと笑ひながら、ひきぢぎれたやうな聲でスメルチャコフが呟いた。そして擦撃するやうな身振りで、素早く後ろへ飛び退く身構へをするのであつた。しかし、イワン・フォードロキツチはスメルチャコフが吃驚したくらゐ出し抜けにからからと笑ひ出した。そして尙も笑ひつづけながら、足ばやに耳門を潜つてしまつた。このとき誰か彼の顔を一目見たものがあつたら、彼が笑ひ出したのは決して愉快であつたがためでないことを、たしかめたに違ひない。それに彼自身もこの瞬間にどんなことを心に思つてゐたのか、それは、たうてい説

明することができなかつたのであらう。彼はさながら癡癡にかかつてゐるやうな身振りと足どりで歩いて行つた。

## VII

## 「賢い人と話す興味」

物の言ひ振りもやはり同じやうであつた。廣間へはいるなり、フォードル・パーヴロキツチにばつたり出會ふと、彼はいきなり手を振りながら父に向かつて、『僕は二階の部屋へ歸るんで、お父さんの處へ行くのぢやありません、さやうなら!』と喚きさま父にさへ顔をそむけるやうにして、傍を通り過ぎてしまつた。この刹那、老人が堪らなく憎らしかつたといふことは、さもありさうなものであるが、これほど露骨な憎悪の表現は、フォードル・パーヴロキツチにとつても實に意外であつた。實際、老人は至急、彼に話したいことがあつて、わざわざ廣間まで出迎へたところだつたのである。それが、かういふお愛嬌を浴せかけられたので、老人は開いた口もふさがらず、突つ立つたまま、中二階をさして梯子段を上つて行くわが子の姿を見えなくなるまで、嘲笑ふやうな顔つきで見送つてゐた。

「あいつは一瞥どうしたといふんだ?」と、彼はイワン・フォードロキツチの後ろからはいつて來た



スメルヂャコフに向かつて訊ねた。

「何かに腹を立てていらつしやるのでせうが、どうなすつたのやら、さつぱり分かりませんよ。」と、こちらは逃げ口上てかう呟いた。

「ええ勝手にしやがれ！ 怒る奴には怒らしとくさ。お前もサモワルを出しといて、さつさと出て行け、さあ早く、何ぞ變つた話はないのか？」

そこで、今しがたスメルヂャコフがイワン・フォードロキツチに哀訴したやうな、うるさい質問が始まつた。つまり彼が待ちに待つてゐる例の女客のことばかりであるから、それを茲へくたくたくと繰り返すことは避けよう。半時間の後には家はすっかり戸締りができた、そして愛慾に取りのぼせた老人は一人で部屋の中を歩き廻つて、約束の五つのノックの合圖が今にも聞こえぬかと、胸をわくわくさせて待ち構へながら、時々暗い窓の外を覗いて見たが、『夜』のほかに何ひとつ眼に入るものはなかつた。

もう非常に遅い時刻ではあつたが、イワン・フォードロキツチはまだ眠らないで物思ひに耽つてゐた。彼はこの夜たいへん遅く、二時すぎに床に就いた。しかし、今は彼の思想の推移を細々と傳へることも止して置かう。それに今はそんな靈魂に立ち入つてゐる時ではない。この靈魂についてはやがて語るべき順番が来るだらう。それに、たとへ今何かを讀者に物語らうとしてみたところで、それは非常に難かしいこととなるに違ひない。なぜならば、彼の頭の中にあるのは、思想と名づくべきものではなくて、何かしら甚く取り留めのない、しかも怖ろしく入り亂れたものであつたからである。彼自身にも自分の心が、すっかり混亂してしまつたやうな氣がした。搦て加へて、奇態な、まるで思ひもかけぬいろいろ

ろの慾望が目覺めて、彼を苦しめるのであつた。例へば、もう十二時を過ぎたやうな時刻なのに、突然矢も楯も堪らず、階下へおりて扉を開け放して傍屋へ行つて、スメルヂャコフを打ちのめしてやりたくなる、と言つたやうなことであつた。しかし、もし誰かにどういふ譯でと訊かれたら、あの下男が憎らしくて堪らないのだ、この世にまたとないほど酷い侮辱を自分に加へた奴だ、といふ位のことよりほかには、何一つ取り立てて理由らしいものを示すことはできなかったであらう。いま一方から見ると、彼はこの夜、一種説明し難い、忌々しい臆病な氣持に魂を掴まれて、そのために今急に肉體的な力まで喪失したやうな感じがした。そして頭が痛み、眩暈がする。何だかまるで誰かに復讐をしようとも思つてゐるやうに、憎々しい毒念が彼の胸を刺すのであつた。彼は、先刻の會話を思ひ出すと、アリオシヤさへも憎らしかつた。時には自分自身までが憎くて堪らなかつた。カテリーナ・イワーノヴナのこと、は殆んど考へようともしなかつた。彼はけさ彼女に向かつて『明朝モスクワへ立ちます』と立派に廣言した時でさへ、肚の中では『なあに、出鱈目だ、なんて行けるものか、お前はいま空威張りをしてゐるが、さう易々と別かれることができるものか』と自分で自分に囁いたことを、はつきり覚えてゐるので、この時彼女のことを忘れてしまつたのがなほさう奇怪に感じられた。彼は後になつて、深くこのことに驚ろいたのである。大分たつてから、この夜のことを思ひ出した時、イワン・フォードロキツチの心に烈しい嫌惡の念を喚び覺した事實が一つある。それはほかでもない、彼は時々ふいと長椅子を立つては、ちやうど自分の様子を窺見されるのが怖ろしく氣になるやうに、そつと扉を開けて梯子段の上まで出て、下の方へじつと耳を傾けながら、ワョードル・パーヴォキツチが下の部屋で身動きをしたり歩いたりす



る物音に、一心に聴耳を立てるのであつた、しかも一種奇怪な好奇心を覺えて、息を殺し、胸を躍らせながら、暫らくづつ、五分間ばかりづつ、じつと耳を澄ますのであつたが、しかし、何のためにこんなことをするのか、何のために耳を澄ますのか、それは無論、彼自身にも分からなかつた。この「振舞ひ」を彼はその後、生きてゐる間ぢゆう、(卑劣な)行爲と呼んでゐた。深い深い魂の奥底で、自分の生涯ぢゆうの最も卑劣極まる行爲だと考へたのである。當のフォードル・パーヴロキツチに對しては、その瞬間、何ら憎悪などといふ感じを抱かなかつたが、ただどういふ譯か、ひどく好奇心を動かされたのである。いま父は下の部屋でどんな風に歩き廻つてゐるのだらう、いま一人きりで何をしてゐるだらう、などと考へてみたり、今頃は定めし、暗い窓を覗いては、不意に部屋の中で立ちどまつて、誰か戸を叩きはせぬかと、待ちに待つてゐるに違ひない、などと想像してみるのであつた。こんなことのために、イワン・フォードロキツチは二度までも階段の下り口へ出て見たのであつた。二時ごろ、邊りがしんと靜まり返つて、もうフォードル・パーヴロキツチも寢に就いた時分、イワン・フォードロキツチはすつかり心身の疲労を覺えたので、一刻も早く眠りたいといふ、烈しい希望を抱きながら床に就いた。果して、彼は忽ち深い眠りに落ちて、夢も見ずにぐつすり寢込んでしまつたが、しかし朝は早く、まだやつと明るくなつたばかりの七時に眼を覺ました。眼を開くと、われながら驚ろいたくらゐ、自分の身内に突然ある異常な精力の汪溢するのを感じて、逸早く跳ね起きて着換へを済ました。それから靴を引き出すと、早速、荷造りに取りかかつた。肌着類は丁度きのふの朝、洗濯屋から残らず受け取つたばかりであつた。イワン・フォードロキツチは萬事が好都合に運ばれ、こんな急な出發に何の支障も無いことを

考へて、にやりと薄笑ひを浮かべたほどであつた。まったくその出發は唐突であつた。實際イワン・フォードロキツチは前日、(カテリーナ・イワーノヴナと、アリョーシヤと、それから後でスメルチャコフに) あす出發すると言ひはしたものの、ゆふべ床に就く時、出發のことなど考へてもゐなかつたことをよく憶えてゐる。少くとも、あさ眼を覺したとき、第一着手として、靴の荷造りに取りかからうなどとは、夢にも考へてゐなかつたのである。やがて靴とトランクの荷造りはできあがつた。マルファ・イグナーチエヴナが彼の處へあがつて来て、『お茶はどちらで召し上がりますか、こちらになさいますか、階下へおおりになりますか?』と毎日の問ひを發したのは、もう九時すぎであつた。イワン・フォードロキツチは下へおおりた。その言葉にも動作にも、何となくそはそはして、性急なところはあつたけれど、殆んど嬉しさをうた様子をしてゐた。愛想よく父に挨拶をして、ことさら體の具合まで訊ねながら、父の返事も待たずに彼は、一時間の後には、これつきりモスクワへ立つてしまふから、馬をよこすやうに使ひをやつて欲しいと、一氣に申し出た。老人は息子の出發を悲しむといふ儀禮上の要求さへ忘れて、微塵も驚ろいた振りを見せずこの知らせを聞き終つた。その代りに、ちやうどいい鹽梅に自身の大切な用件を思ひ出して、急にひどく慌て出した。

「何だと、お前! 變な奴だぜ! きのふ話さないなんて……だがまあ、どつちにしても、今すぐだつて話をつくだらう、なあ、お前、どうか頼むからひとつチェルマーシニヤへ寄つて行つてくれないか、ワロキヤの宿場からほんのちよつと左へ折れるだけなんだよ、せいぜい十二露里そこそこでもうその、チェルマーシニヤなんだから。」



「どうしてそんな、とても駄目ですよ、鐵道まで八十露里もあるのに、モスクワ行きの汽車は晩の七時に出るんですから、やつとぎりぎりに間に合ふくらゐなんですよ。」

「なあに、明日の間には合ふよ、でなきや明後日のな、だが、今日は是非ともチエルマーシニヤへ寄つてくれい、ほんのちよつとの手間で親を安心させるといふものだよ！もしここに仕事さへなかつたら、もうとつくにわしが自分で飛んで行つてるところなんだが、何しろとても急な、大事な用だからな、しかしこちらの都合が……どうもさうしちやゐられないんだ……。な、あの森はベギーチェフとチャーチキンの二區に跨がつて、淋しい處にあるんだ。ところで、マスロフといふ商人の親子が木を伐らしてくれといふんだが、たつた、たつた八千留より出しをらんだ、去年ついた買手は破談になつたけれど、一萬二千留出すと言ひをつたよ、それはこの者ぢやないんだ——そこに曰くがあるのだ、何しろ、この人間には、今とても賣れ口がないのだよ、このマスロフといふのが親子とも十萬分限のやりで、自分が値をつけたら、どんなことがあつても取らにや承知せんといふ奴で、こちらの商人で、この親子に太刀打ちのできる者が一人もないのだ。ところが、先週の木曜日に、不意にイリンスコエの坊さんが手紙で、ゴルスツキンがやつて来たことを知らせてくれたのだよ、これもやはりちよつとした商人で、わしは前から知つとるが、一つ存難いことは、この男がこちらの者でなくて、ポグレボフの人間だつてことなのさ、つまりマスロフなんか眼中に置いてないつて譯なんだ、何しろこの町の者ぢやないからな。そこで、あの森を一萬一千留で買ふと言つてるのだよ、な、いいかえ？坊さんの手紙では、その男がもう一週間しか逗留しないといふことだから、お前一つ出かけて、その男と談判をしてみてくれなにか

……

「それぢやあ、その坊さんに手紙を出したらいいぢやありませんか、その人が談判をしてくれますよ。」  
「とてもあの人にやできない相談だよ、あの坊さんには見る眼といふものがないからなあ、人は好いもので、あの人になら今すぐ二萬留の金を、受取なしに平氣で預けて見せるよ、しかし眼力といふものが少しもないんだ、人間ならまだしも、鴉にだつて瞞されさうなお人好しだよ、それでゐて學者だから驚ろくて。ところが、そのゴルスツキンといふのは、見かけは紺の袖無しなんか着こんで、まるでどんな百姓のやうだが、肚の中と來たら、まるつきり悪黨なんだ、これがお互ひの不仕合せといふのさ、つまり、怖ろしい嘘つきなんだ、これが問題なのさ、どうかすると、何のためにあんな嘘をつくのかと、不思議になるやうな嘘をつくんだ。一昨年なんかも、女房が死んだから、今二度目のを貰つてゐるなどと言ひをつたが、その實そんなことは根も葉もない出鱈目なんだよ、女房が死ぬどころか、今でもびんびんしてゐて、三日に一遍は決つて亭主野郎を擲つてゐるんだ、そんな風だから、今度も一萬一千留で買ふといふのも、本當か嘘か、それを突きとめないではと思ふのさ。」

「そんなぢやあ、僕なんか何の役にも立ちませんよ、僕には眼力なんかありませんから。」  
「いや、待て、さうでない、お前でも役に立つぞ、今わしがあの男の、つまりゴルスツキンの癖をすつかり教へてやるわい、わしはもう大分まへからあの男と取引きをしてをるからな。いいか、あの男はまづ髻を見なくちやならんだ、あいつの髻は赤くて汚れてちよろちよろしとるが、その髻を慄はしながら腹を立てて物を言ふ時は、つまり何も言ふことはない、あいつは本當のことを喋つてゐるんだ、真



面目に取引きをする気があるんだ。ところが、もし左の手で髯をかう撫でながら、笑つてゐる時は、つまり瞞着しようと思つて悪企みをしてやがるのだ、あの男の眼は決して見るのぢやないぞ、あいつの眼では何も分かりやせんぞ、悪黨だからな——つまり髯さへ見てゐればいいのさ、わしがあの男に宛てた手紙をお前に託けるから、そいつを見せてくれ、男はゴルスツキンだが、本當はゴルスツキンぢやなくてリヤガウイだ、しかし、お前あいつに向かつてリヤガウイなんて言つちやいかんぞ、怒るからな、もしあいつと談判をして、旨く行きさうだつたら直ぐ手紙をよこしてくれ、ただ『嘘ではない』と書きこへすりやいいんだよ。はじめ一萬一千留で頑張つてみた上で、千留くらゐは負けてやつてもいい。しかし、それより上負けちやいかんぞ、まあ、考へてもみる、八千留と一萬一千留——三千留の開きぢやないか、この三千留はまつたく目つけものなんだよ。それに、またといつて、なかなか買ひ手はつきやせんし、今さしづめ金には困り抜いてるんだからなあ、もし眞面目な話だといふ知らせさへあれば、その時はわしが飛んで行つて片をつけるわい、何とかして暇を見つけるさ。しかし、まだ今のところでは、坊さんの思ひ違ひかも知れんからなあ、わしがわざわざ出かけても仕様がないうよ。」

「ちよつと、そんな暇がないんですよ、堪忍して下さい。」

「まあさ、親爺のいふことも聞いてくれ、恩に着るぞ！ お前たちはどいつもこいつも不人情な奴ばかりだよ、本當に！ 一日や二日どうだといふんだい？ 一體お前は今どこへ行かうつてんだ、ゼニスへでも行くのかい？ なあに、お前のゼニスは二日の間に亡くなりやあせんよ、アリオーシャをやつてもいいのだが、こんなことにかけては、アリオーシャぢや仕様がないうよ、お前だけだよ、賢い人間は、

それがわしに分からんと思ふのかい？ 森の賣り買ひこそしまいが、眼力を具へてをるからなあ。ただあの男が本當のことを言つとるかどうかさへ、見抜きやいいんだ、今も言つたやうに髯を見るんだ、髯が慄へてたら本當なんだから。」

「お父さんは自分からあの忌々しいチェルマーシニヤへ、僕を追ひ立てるんですね？ え？」と、イワン・フォードロキツチは不気味な薄笑ひを浮かべながら呟鳴つた。

フォードル・パーヴロキツチはその不気味なものだけに氣づかないで、或ひは氣づくことを欲しないで、ただ薄笑ひの方だけを取りあげたのである。

「ちやあ、行つてくれるんだな、行つてくれるんだな！ すぐに今一筆書いてやるからな。」

「分かりませんよ、行くかどうか、まあ途中で決めませうよ。」

「途中でとは何だ、今きめるがいい、な、いい子だから決めてくれ！ 話がついたら一筆書いて、坊さんに渡してくれ、さうすれば、奴さんがすぐお前の書きつけをわしに届けてくれるからなあ、それから後はもうお前の邪魔はせんから、ゼニスへでもどこへでも行くがよい、坊さんが自分の馬をつけて、お前をワロキヤの宿場まで送つてくれるよ……」

老人はただもう有頂天になつて、手紙を書いたり、馬の用意に使ひを出したりして、前菜とコニヤクを出させた。彼は悦に入ると、きまつて口數が多くなるのだが、この時は何となく控へ目にしてゐるやうであつた。ドミトリー・フォードロキツチのことなどは嘖びにも出さなかつた。しかし、別かれを惜



むといつた様子は更に見えなかつた。むしろ何と言つていいのか分からないやうにさへ見受けられた。イワン・フォードロキツチも直ぐそれに気がついた。『だが、親爺もいい加減おれには飽きたらうな。』と彼は肚の中で思つた。玄關までわが子を送り出すと初めて、フォードル・バーヴロキツチも少し騒ぎ出して、接吻するつもりで傍へ近寄つた。しかしイワン・フォードロキツチは明らかに接吻を避けるつもりで、咄嗟に、握手のために手を差し出した。老人も忽ちそれと悟つて、急に身を退いた。

「ぢや、御機嫌よう、御機嫌よう！」と彼は玄關口から繰り返した。「いつかまたやつて来るだらうな？ 本當に来てくれよ、わしはいつでも歓迎するよ、ぢや、達者で行くがいい！」

イワン・フォードロキツチは旅行馬車の中へ乗りこんだ。

「あばよ、イワンや、あんまり悪うは言はんでくれよ！」父は最後にかう叫んだ。

家内の者は皆、スメルチャコフも、マルファもグリゴリイも見送りに出た。イワン・フォードロキツチはめいめいに十留づつやつた。彼がすつかり馬車の中に落ち着いた時、スメルチャコフが膝かけの絨毯を直しに駈け寄つた。

「なあ、おい……チェルマーシニヤへ行くんだよ……」と、如何にも唐突にイワン・フォードロキツチはかう口を迂らした。丁度きのふと同じやうに、ひとりで言葉が飛び出してしまつたのである。おまけに神経的な微笑までついて出た。彼はその後長い間このことを憶えてゐた。

「して見ると、賢い人とはちよつと話しても面白いといふのは本當のことでございますね」じつと泌み入るやうにイワン・フォードロキツチを賸めながら、スメルチャコフがしつかりした調子で答へた。

馬車がごとんと一つ揺れると、走り出した。旅人の心は朦朧としてゐたけれど、彼はあたりの野良や、丘や、木立や、晴れ渡つた空を高く飛び過ぎる雁の群れなどを、食するやうに見入るのであつた。と、急に彼は心が爽やかになつた。で、馭者に話しかけてみると、その百姓の答へがひどく面白いやうに思はれたが、一二分もたつてから考へてみると、それはただ耳許を通り過ぎただけで、實際のところ、彼は百姓の答へを少しも聽いてはゐなかつたのである。彼は口を噤んでしまつたが、それでゐて非常に好い氣持であつた。空気が清く澄み、しつとりとしてすがすがしく空は美しく晴れ渡つてゐた。ふとアリョーシヤとカテリーナ・イワーノヴナの姿が、彼の頭を掠めたが、彼はただ靜かに微笑みただけで、靜かにその懐かしい幻影を吹き消してしまつた。『まだまだあの連中の時代だらうさ、』と彼は考へた。驛はただ馬を換へるだけで逸早く通り過ぎて、ひたすらワロキヤをさして急いだ。『なぜ賢い人はちよつと話しても面白いんだ？ あいつは何のつもりであんなことを言ひをつたのだらう？』不圖こんなことを考へた時、彼は息のとまるやうな思ひがした。『しかもおれは何のために、チェルマーシニヤへ行くんだなんて、わざわざ奴に報告したんだらう？』やがてワロキヤの宿へついた。イワン・フォードロキツチは馬車から降りると、忽ち馭者の群れに包圍された。で、十二露里の田舎道を私設の驛運馬車に乗つて、チェルマーシニヤへ向けて立つことに決めた。彼は馬をつけるやうに命じた。彼は驛舎へ入つたが、ちよつとあたりを見廻して驛長の妻君の顔を見ると、急にひつ返して玄關へ出た。

「チェルマーシニヤ行きは取りやめだ、おい、七時の汽車には間に合ふか？」

「間に合ひますよ、馬をつけませうかな？」



「大至急でつけてくれ、ところで、お前たちのうちで誰か、あす町へ行くものはないかね？」  
「なんで行かんことがあるもんですか、このミートリイが行きますだよ。」

「ぢや、ミートリイ、お前に一つ頼みがあるんだがなあ、お前おれの親父のフォードル・パーヴロキツチ・カラマゾフの家へ寄つて、おれがチェルマーシニヤへ寄らなかつたことをさう言つてくれないか、行つて呉れるだらうかね？」

「なんの行かねえことがござりませう、お寄りいたしますだよ、フォードル・パーヴロキツチ様なら、ずつと以前から存じ上げてをりますよ。」

「ぢや、これが駄買だ、たぶん親爺はよこしやしないだらうからなあ……」とイワン・フォードロキツチは快活に笑ひ出した。

「へえ、まつたく下さる氣づけえはござりましたねえとも。」とミートリイも笑ひ出した。「どうも、旦那、有難うございます、ちやんとお寄り申しますよ。」

午後の七時にイワン・フォードロキツチは汽車に乗つてモスクワへ向かつた。『これまでのことは何もかも消えて亡くなれた、勿論これまでの世界も永久に葬り去つて、音も沙汰も聞かなくなればならぬ。新しい世界へ行くんだ、新しい土地へ行くんだ、決して後ろなんか振り返ることぢやない！』

歡喜の代りに彼の魂は、今まで嘗て経験したことのない闇に閉ざされ、心は深い悲しみに疼き始めた。彼は夜つびで、とつおいつ物思ひに耽つてゐたが、列車は遠慮なく走つて行つた。漸く夜明けごろ汽車がモスクワの市街へかかつたとき、彼は突然われに返つた。『おれは悪黨だ！』と彼は吐の中で嘔いた。

一方フォードル・パーヴロキツチは、わが子を送り出してしまふと、非常な満足を感じた。まる二時間ものあひだ彼は自からを仕合せ者のやうに感じて、ちびりちびりとコニヤクを傾けたほどである。ところが不意に、すべての家人にとつてこの上もなく忌々しく、この上もなく不愉快な事件が家内に持ち上つて、忽ちフォードル・パーヴロキツチの心を混亂に陥れてしまつた。スメルチャコフが何かの用で穴藏へ行つて、一ばん上の段から下まで轉げ落ちたのである。それでもマルファ・イグナーチエヴナが庭に居合はせて、早速その物音を聞きつけたのはまだしも幸ひであつた。彼女は落ちるところこそ見なかつたが、その代り叫び聲を聞きつけたのである。それは一種特別な奇妙な叫び聲ではあつたが、もうずつと前から聞き覚えのある癲癩持が發作を起こして卒倒する時の叫び聲であつた。彼は階段をおりる途中で發作を起こしたのだらうか？ それならば、勿論そのまま、憶えなしに下まで轉ろげ落ちるのが當然である。それとも反對に、墜落と震盪のために、生來の癲癩持であるスメルチャコフにその發作が起こつたものか——その邊の事情は遂に知る由もなかつたが、兎に角、人々は彼が穴藏の底で、體ぢゆうをびくびくと痙攣させながら、口の端に泡を吹いて身をもがいてゐるところを發見したのである。初めみんな屹度手が足を挫いて、體ぢゆう打身だらけになつてゐるだらうと思つたのに、マルファ・イグナーチエヴナの言つたやうに、『神の御加護で』別にそんなこともなくて濟んだが、ただ彼を穴藏からこの娑婆へ擔ぎ出すのが困難であつたから、近所の人に手傳つて貰つて、やつと運び出すことができた。この騒ぎの間、フォードル・パーヴロキツチも現場に居合はせて、ひどく吃驚してしまつて、途方に暮れた面持で、自分でも手助けをしたほどであつた。しかし病人は意識を恢復しなかつた。發作は時



時止むこともあつたけれど、すぐにまたぶり返して来た。で、また去年やはり誤つて屋根裏からおつ落ちた時と同じやうなことが繰り返されるのだらうと人々は推測した。それで、去年氷で頭を冷やしたことをふと思ひ出した。まだ穴蔵に氷が残つてゐたので、マルファ・イグナーチエヴナがその世話を引き受けることになつたが、夕方になつてフォードル・パーヴロキツチは醫者のヘルツェンシュトウペを呼びにやつた。醫者は直ぐに駆けつけて呉れた。彼は慎重に病人を診察して、(この人は縣内でも最も慎重で丁寧なかなりな年配の上品な醫者であつた)これはなかなか激烈な發作だから、『怖ろしい結果にならないとも限らぬ』しかし今のところ、まだはつきりしたことは分らないが、もし今日の藥が効かなかつたら、明日また別な處方をしてみようと言つた。病人は傍屋の一室へ寝かされたが、それはグリゴリー夫婦の部屋の並びの部屋であつた。フォードル・パーヴロキツチはその後ひき續いて、一日ぢゆういろんな災難を忍び通さなければならなかつた。第一、食事はマルファ・イグナーチエヴナの手で調へられたが、スープなどはスメルチャコフの料理に較べると、『まるでおとし水のやう』だし、鶏肉はからからに焼き過ぎて、とても噛みこなせる代物ではなかつた。マルファ・イグナーチエヴナは主人の手酷しい、けれど道理に適つた小言に對して、鶏はそれでなくてももともと非常に年をとつてゐたのだし、また妾にしても料理の稽古ひとつさせて戴いた譯でないからと抗議を申し込んだ。それから夕方になると、また一つの心配が持ち上がった。それは、もう一昨日あたりからぶらぶらしてゐたグリゴリーが、折も折たうとう腰が立たなくなつて、寝込んでしまつたといふのであつた。

フォードル・パーヴロキツチはできるだけ早くお茶を切りあげると、ただひとり母家へ閉ぢ籠つた。

彼はひどく不安な期待に胸をふさがれてゐた。その譯は、丁度この夜グルーシエンカの來訪を、殆んど確實に待ち設けてゐたからである。今朝ほどスメルチャコフから、『あの女がけふこそ間違ひなく行くといつて約束をなさいました』といふ、殆んど傳言に近い情報を受け取つてゐたからである。怏へ性のない老人の胸は早鐘のやうに打ち續けた。彼はがらんとした部屋を歩き廻つて、ときどき聽耳を立てるのであつた。どこかでドミトリーが彼女を見はつてゐるかも知れないから、耳を鋭く澄ましてゐなければならなかつた。そして彼女が戸を叩いたら(スメルチャコフは女にどこをどう叩くかといふ例の合圖を教へておいたと、もう一昨日、フォードル・パーヴロキツチに報告した)、できるだけ早く扉を開けてやつて、一秒も無駄に玄關で待たせないやうにすることが肝腎だ、でない、彼女が何かに驚いて運び出すやうなことになつたら、それこそ大變である。フォードル・パーヴロキツチは随分氣が揉めただけれど、彼の心がこれほど甘美な希望に浸つたことは、これまでつひぞないことであつた。今度こそ彼女は間違ひなくやつて來ると斷言することができるのではないか!



16844

# カラマゾフの兄弟

ドストイェフスキイ  
中山省三郎譯

上卷 既刊 價 B6 五八八頁  
三〇〇圓

中卷 十一月下旬刊行

下卷 十二月下旬刊行

プラトン全集 岡田正三譯

第八卷近刊 價 B6 三三〇頁  
二〇〇圓

第三、四卷重版近日出來

感情教育 フロベール  
生島遼一譯

全三卷再版發賣中

各 價 B6 三〇〇餘頁  
一三〇圓

カラマゾフ兄弟 上 定價三〇〇圓

昭和二十三年十月二十日印刷  
昭和二十三年十月廿五日發行

譯者 中山省三郎

發行者 田中秀吉

印刷所 河北印刷工業所  
京都市中京區二條通界町東入

發行所 株式會社 全國書房  
京都市中京區御池通堂小路西入  
電話本局五五七四・三九三五番  
價目 東京部二六三五圓

配給元 日本出版配給株式會社  
東京都千代田區錦田通四丁目二・九

